ギリシア人への勧め

アレクサンドリアのクレメンス
藤遥　制作

1章 1〜5節　新しい歌

1:1:1 テーバイのアンフィオンと、メテュムナのアリオンは、ふたりとも歌い手でした（どちらも神話です。この歌は、今もギリシャ人の合唱隊に歌われています）。音楽の技によって、アリオンは魚をおびき寄せ、アンフィオンはテーバイに城壁を築いたといいます。また、トラキアの、もうひとりの知恵者は（これもまた別のギリシャの神話です）、歌だけで獣を手なずけました。それればかりか、木々を、つまり樫の木を、音楽で植え替えたのです。1:1:2 あなたには、これらと兄弟のような、もう一つの神話と歌い手の話もしてあげられます。ロクリスのエウノモスと、ピュトの蝉の話です。ピュトでは、死んだ大蛇を記念して、ギリシャ人の祭りが催されていました。エウノモスは、その這うものの弔いの歌を歌っていました。その歌が蛇への賛歌だったのか、哀歌だったのか、わたしには言えません。ともかく競演があり、エウノモスは暑い盛りの時刻に竪琴を弾いていました。ちょうど蝉が、山々の木の葉の陰で、日に温められて歌う時刻です。ところが、蝉が歌っていたのは、死んだ大蛇、ピュトの大蛇に向けてではありませんでした。そうではなく、知恵に満ちた神に向けて、おのずから調べを成す歌を歌っていたのです。エウノモスの調べよりもすぐれた歌です。そのとき、ロクリスの人の弦が一本切れました。蝉が竪琴の横木に飛んできてとまりました。蝉は枝にとまっているかのように、その楽器の上で鳴きました。歌い手は蝉の歌に合わせて調律し、欠けた弦を補いました。1:1:3 ですから、蝉はエウノモスの歌に引き寄せられたのではありません。神話はそう言いたがり、ピュトにエウノモスの青銅の像を立てて、竪琴も、ロクリスの人とともに競った相棒も、そこに加えました。しかし蝉は、自分から飛んできて、自分から歌ったのです。それなのにギリシャ人には、蝉が音楽の演じ手になったのだと思われています。

1:2:1 それでは、どうしてあなたがたは、生き物が音楽に魅せられるなどと考えて、むなしい神話を信じてきたのですか。ところが、あなたがたには、どうやら真理の輝く顔だけが作り物に見えるようです。真理だけが不信の目にさらされているのです。一方、キタイロンもヘリコンも、オドリュサイ人やトラキア人の山々も、迷いの秘儀の場です。その山々が、秘儀のゆえに神聖なものとされ、歌にうたわれているのです。1:2:2 わたしは、たとえ神話にすぎないとしても、悲劇に仕立てられたこれほど多くの災いには耐えられません。ところがあなたがたには、不幸の記録さえ劇となり、劇の役者は楽しい見ものになりました。しかし、劇と、レナイア祭で浮かれ騒ぐ詩人たちには、きづたの冠でもかぶせてやりましょう。そして、老いたヘリコンとキタイロンに閉じ込めてしまいましょう。詩人たちは、もうすっかり酒に酔い、バッコスの秘儀の式で途方もなく正気を失っています。サテュロスたちも、狂乱の信徒の群れも、ほかの悪霊の合唱隊も、一緒に閉じ込めましょう。そして、真理を、この上なく輝く思慮とともに、天の上から導き下ろしましょう。神の聖なる山へ、預言者たちの聖なる合唱隊のもとへ、導き下ろしましょう。1:2:3 真理には、できるかぎり遠くまで届く光を放って、闇の中を転げ回る人々を、あまねく照らしてもらいましょう。そして、いと高き右の手、すなわち悟りを差し伸べて救いへと導き、人々を迷いから解き放ってもらいましょう。人々は、顔を上げ、身を起こして、ヘリコンとキタイロンを去り、シオンに住みなさい。『律法はシオンから出、主の言葉はエルサレムから出るからである』（イザヤ二・三）。この主の言葉こそ、天のロゴスです。全世界という劇場で冠を受けておられる、本物の競い手です。1:2:4 わたしのエウノモスが歌っておられるのは、テルパンドロスの調べでも、カピオンの調べでもありません。フリュギア調でも、リュディア調でも、ドリス調でもありません。そうではなく、新しい調和の永遠の調べです。神にちなむ名を持つ調べ、新しい歌、レビ人の歌です。この歌には、『悲しみを除き、怒りを鎮め、あらゆる災いを忘れさせる』、甘く、まことの、悲しみをいやす薬が混ぜられています。

1:3:1 さて、あのトラキアの人と、テーバイの人と、メテュムナの人は、人であって人でない者たちです。わたしには、彼らが人を欺く者だったと思われま

す。彼らは音楽を口実にして人の生活を損ない、巧みな魔術を使い、悪霊に取りつかれて人を堕落させました。暴行を狂宴の祭りとして祝い、嘆きを神聖なものに祭り上げました。人々の手を引いて偶像へと最初に導いたのも、彼らだと思われます。しかも、石と木によって、すなわち像と絵によって、愚かな習わしを築き上げたのです。天の下で市民として暮らしていた人々には、あのまことに美しい自由がありました。彼らはその自由を、歌とまじないによって、最悪の隷属のくびきにつないだのです。1:3:2 しかし、わたしの歌い手は、そのような者ではありません。この歌い手は、暴君のようにふるまう悪霊どもの苦い隷属を、ほどなく打ち砕くために来られたのです。そして、わたしたちを、神を敬うことのくびきの下へと移してくださいます。柔和で、人を愛するくびきです。地に投げ落とされていた者たちを、ふたたび天へと呼び戻しておられます。

1:4:1 現に、昔から今まで、ただこのかただけが、最も手に負えない獣、すなわち人間を手なずけてこられました。鳥とは、人間のうちの軽はずみな者です。這うものとは欺く者、獅子とは怒りやすい者、豚とは快楽にふける者、おおかみとは奪い取る者です。愚かな者は石や木です。そればかりか、無知に浸りきった人間は、石よりもものを感じないのです。1:4:2 真理と声を合わせて歌う預言の声に、わたしたちの証人として進み出てもらいましょう。この声は、無知と愚かさにすり減らされた人々をあわれんで、こう言います。『神はこれらの石からでも、アブラハムの子を起すことができるからである』（マタイ三・九）。神は、真理に対して石のようになった人々の、大きな無知と心のかたくなさをあわれまれました。そして、あの石から、すなわち石を信じてきた異邦の民から、神を敬う種を起こされました。徳を感じ取る種です。1:4:3 また、神はある所で、義をつけねらう偽善者たちを『まむしの子ら』と呼んでおられます（マタイ三・七）。毒を吐き、裏表のある者たちです。しかし、こうした蛇のうちでも、自分から悔い改める者がいるなら、その人はロゴスについて行きます。そして『神の人』になります（第一テモテ六・一一）。また、ほかの人々を、羊の皮をまとった『おおかみ』とたとえで呼んでおられます（マタイ七・一五）。人の姿をした、奪い取る者たちをほのめかしておられるのです。こうして、天の歌そのものが、これらの最も荒々しい獣も、このような石も、みな穏やかな人間に変えました。1:4:4 『わたしたちも以前には、そう、以前には、無分別で、不従順な、迷っていた者であって、さまざまの快楽と情欲との奴隷になり、悪意とねたみとで日を過ごし、人に憎まれ、互に憎み合っていたからである』（テトス三・三）。使徒の書が言うとおりです。『ところが、わたしたちの救主なる神の慈悲と、人を愛する心とが現れたとき、わたしたちの行った義のわざによってではなく、神のあわれみによって、わたしたちは救われたのである』（テトス三・四〜五）。見なさい。新しい歌は、なんと大きな力をふるったことでしょう。石から人間を、獣から人間を造ったのです。むなしく死んでいた人々、まことに存在するいのちにあずかっていなかった人々も、この歌を聞いただけで生き返りました。

1:5:1 まさにこの歌が、宇宙を調子よく整え、もろもろの元素の不協和を、協和の秩序へと調律しました。全世界が、この歌のもとで一つの調和となるためです。この歌は、海を自由に流れるままにしましたが、陸に踏み込むことは禁じました。逆に、揺れ動いていた地を固め、それを海の境として据えました。それだけではありません。火の勢いを空気で和らげました。ドリス調をリュディア調と混ぜ合わせるようなものです。また、空気の厳しい冷たさを、火を織り交ぜることで手なずけました。万物の音階の両端にあるこれらの音を、調子よく混ぜ合わせたのです。1:5:2 まことに、この汚れのない歌は、万物の支えであり、すべてのものの調和です。この歌は、中心から果てまで、また端から中心まで張りわたされて、この宇宙を調えました。トラキアの音楽、ユバルの音楽に似たものに従ってではありません。父なる神のみこころに従ってです。ダビデが熱心に慕い求めたみこころです。1:5:3 ダビデから出て、しかもダビデより前におられたかたがいます。神のロゴスです。このかたは、琴や竪琴といった魂のない楽器には目もくれられませんでした。そうではなく、この世界と、さらに小さな世界である人間とを、すなわち人間の魂と体とを、聖霊によって調律されました。そして、この多くの声を持つ楽器によって神に向かって奏で、人間という楽器に合わせて歌っておられます。『あなたはわたしにとって、竪琴であり、笛であり、宮であるからだ』。竪琴というのは調和のゆえ、笛というのは霊の息のゆえ、宮というのはロゴスのゆえです。竪琴が鳴り、霊が息を吹き込み、宮が主を宿すためです。1:5:4 それどころか、少し前に名を挙げたダビデ王、あの竪琴弾きは、人々を真理

へと勧め、偶像から引き離しました。悪霊どもをほめ歌うなど、とんでもないことです。悪霊どもは、ダビデのまことの音楽に追い払われたのです。サウルが悪霊どもに取りつかれていたとき、ダビデはただ歌うだけで、その音楽によってサウルをいやしました。主は、人間を、息の通う美しい楽器として、ご自分のかたちに造り上げられました（創世記一・二七）。もちろん、主ご自身も、神の楽器です。あらゆる調和を備え、調子の整った、聖なる楽器です。世を超えた知恵、天のロゴスです。

1章 6〜10節　ロゴスの現れ

1:6:1 では、この楽器、すなわち神のロゴスである主は、そして新しい歌は、何を望んでおられるのでしょうか。盲人の目を開き、耳しいの耳をあけることです。両足を引きずる人や迷っている人の手を引いて、義へと導くことです。愚かな人間に神を示し、滅びを止め、死に打ち勝ち、不従順な子らを父と和解させることです。1:6:2 神の楽器は、人を愛する楽器です。主は、あわれみ、教え導き、勧め、さとし、救い、守ってくださいます。そして、学ぶことの報いとして、あり余る豊かさから、わたしたちに天国を約束してくださいます。主がわたしたちからお受けになる益は、ただ一つ、わたしたちが救われることだけです。悪は、人間の滅びを食い物にするからです。しかし真理は、蜜蜂のように、存在するものを何一つ損なわず、人間の救いだけを喜ぶからです。1:6:3 ですから、あなたには約束があります。人を愛する心があります。恵みにあずかりなさい。また、わたしの救いの歌を、器や家が新しいというような意味で、新しいと思ってはなりません。この歌は『明けの明星より前に』あったからです（詩篇一一〇・三）。また『初めにロゴスがあった。ロゴスは神と共にあった。ロゴスは神であった』からです（ヨハネ一・一）。迷いは古いものです。しかし真理は、新しいものに見えるのです。1:6:4 神話の山羊が、フリュギア人は古い民だと教えるとしましょう。また、アルカディア人を月より前の民と書き記す詩人たちが、アルカディア人を古い民だと教えるとしましょう。さらにまた、エジプト人を古い民だと教える者たちもいるとしましょう。この地こそ最初に神々と人間を現したのだと夢見る者たちです。しかし、この世界より前にいた者は、彼らのうち一人もいません。世界の造られる前にいたのは、わたしたちです。わたしたちは、やがてこの世界に生きるはずの者として、それより先に神のもとで生まれていたのです。わたしたちは、神のロゴスの造られた、理性ある者です。わたしたちが古いのは、このロゴスのゆえです。『初めにロゴスがあった』のですから（ヨハネ一・一）。1:6:5 ロゴスは昔からおられました。その点で、ロゴスは万物の神なる初めであられたし、今もそうであられます。しかし、今このかたは、昔から聖別されていて、その力にふさわしい名、キリストという名を受けられました。その点で、わたしはこのかたを新しい歌と呼んだのです。

1:7:1 現に、ロゴスであるキリストは、わたしたちが昔からあることの原因であられます（このかたは神のうちにおられたからです）。また、わたしたちがよくあることの原因でもあられます。そして今、このロゴスご自身が、人々に現れてくださいました。ただひとり、神であり人である、両方を兼ねたかたです。わたしたちにとって、あらゆる良いものの原因であられます。わたしたちは、このかたからよく生きることを教えられて、永遠のいのちへと送り届けられるのです。1:7:2 主のあの神々しい使徒が、こう言うとおりだからです。『すべての人を救う神の恵みが現れた。そして、わたしたちを導き、不信心とこの世の情欲とを捨てて、慎み深く、正しく、信心深くこの世で生活し、祝福に満ちた望み、すなわち、大いなる神、わたしたちの救主イエス・キリストの栄光の出現を待ち望むようにと、教えている』（テトス二・一一〜一三）。1:7:3 これこそ新しい歌です。初めにおられ、先におられたロゴスの現れで、今わたしたちのあいだに輝き出たものです。先におられた救い主が、つい先ごろ現れてくださいました。存在するかたのうちにおられるかたが、教師として現れてくださいました。『ロゴスは神と共にあった』のですから（ヨハネ一・一）。万物をお造りになったロゴスが現れてくださいました。このかたは、初めに人を形造られたとき、造り主として生きることをお与えになりました。そして、現れて、教師としてよく生きることを教えてくださいました。それは、のちに神として、いつまでも生きることを豊かにお与えになるためです。1:7:4 このかたは、今になって初めて、迷っているわたしたちをあわれまれたのではありません。そうではなく、ずっと昔から、初めからあわれんでおられました。そして今、滅びかけていたわたしたちのもとに現れて、救い出してくださったのです。あの悪い、這う獣が、魔術を使い、わたしの

思うに異民族のやり方で罰しながら、今もなお人々を奴隷にし、苦しめているからです。その異民族は、捕虜を死体に縛りつけ、ともに腐り果てるまでそのままにすると言われています。1:7:5 現に、この悪い暴君、この竜は、生まれたときから自分のものにできる人々を、偶像に縛りつけます。石や木や像や、そのような偶像に、迷信というみじめな鎖で縛りつけるのです。そして、ことわざのとおり、生きたまま運んでいって、偶像と一緒に葬ってしまいます。ともに滅びてしまうまでです。1:7:6 そのために、わたしたちの守り手であり助け手であるかたも、ただ一人、主ご自身です。欺く者が一人だからです。この者は、昔はエバを、そして今はほかの人々をも、死へと引きずり込んでいます。主は、初めから預言によって前もって告げておられました。そして今は、はっきりと救いへ招いておられます。

1:8:1 ですから、使徒の命令に従って、『空中の権をもつ君、すなわち、不従順の子らの中に今も働いている霊』から逃れましょう（エペソ二・二）。そして、救い主である主のもとへ走り寄りましょう。主は、今も、またいつも、救いへと勧めてこられました。エジプトでは、不思議としるしによってお勧めになりました。荒野では、柴と、雲によってお勧めになりました。その雲は、人を愛する心の恵みによって、はしためのようにヘブル人について行ったのです。1:8:2 主は、これらのものへの恐れによって、心のかたくなな人々をお勧めになりました。そしてさらに、主は、知恵に満ちたモーセと、真理を愛するイザヤと、預言者たちの合唱隊のすべてを用いられます。それによって、耳を持つ人々を、もっと理にかなった仕方でロゴスへと立ち返らせておられます。主は、ある所では責め、ある所ではおどしさえなさいます。ある人々のことは嘆き悲しみ、ほかの人々には歌いかけてくださいます。ちょうど良い医者のようです。医者は、病人のある者には膏薬を塗り、ある者はさすって和らげ、ある者には湯を注ぎかけます。ある者は刃物で切り開き、ほかの者は焼き、ときには、のこぎりで切断することさえあります。部分や手足を犠牲にしてでも、できることなら人を健やかにするためです。1:8:3 まことに、救い主は、人々を救うために、多くの声を持ち、多くの仕方を持っておられます。おどしてさとし、責めて立ち返らせ、嘆いてあわれみ、歌って招いてくださいます。柴を通して語っておられます（あの人々は、しるしと不思議を必要としていたのです）。また、柱から炎を燃え立たせて、火によって人々を恐れさせておられます。それは、恵みと恐れとを同時に示すものでした。聞き従うなら光、聞き従わないなら火です。しかし、人の肉は柱よりも柴よりも尊いので、そののちには預言者たちが声を上げます。イザヤのうちで語っておられるのは、主ご自身です。エリヤのうちでも主ご自身、預言者たちの口のうちでも主ご自身です。1:8:4 しかし、あなたが預言者たちを信じず、その人々も火も神話だと思うなら、主ご自身があなたに語ってくださいます。この主は、『神のかたちであられたが、神と等しくあることを固守すべき事とは思わず、おのれをむなしう』されたのです（ピリピ二・六〜七）。人を救いたいと切に願われた、あわれみ深い神です。そして今、ロゴスご自身が、あなたにはっきりと語っておられます。不信仰を恥じ入らせておられるのです。そうです、人となられた神のロゴスが語っておられるのです。それは、あなたもまた人から学ぶためです。人がいったいどのようにして神となるのかを、です。

1:9:1 それでは、友よ、おかしなことではありませんか。神はいつもわたしたちを徳へと勧めておられるのに、わたしたちはその益から身を引き、救いを先に延ばしているのです。実際、ヨハネもまた救いへと招き、まるごと勧めの声となっているではありませんか。では、ヨハネに尋ねてみましょう。『おまえは人々のうちの何者か、どこから来たのか』。ヨハネは、エリヤだとは言わないでしょう。キリストであることも否むでしょう。そして、荒野で呼ばわる声だと言い表すでしょう。では、ヨハネとは誰なのでしょうか。おおまかにとらえて、こう言わせてください。荒野で呼ばわる、ロゴスの勧めの声です。声よ、何を呼ばわっているのですか。『わたしたちにも語れ』。『主の道をまっすぐにせよ』（ヨハネ一・二三）。1:9:2 ヨハネは先駆けであり、その声はロゴスの先駆けです。招く声、救いへと備えさせる声、天を受け継ぐようにと勧める声です。この声のゆえに、うまずめも荒野も、もう不毛ではありません。この身ごもりを前もって告げたのは、御使いの声でした。その声もまた主の先駆けでした。ヨハネが荒野に良い知らせを告げたように、その声はうまずめの女に良い知らせを告げたのです。1:9:3 ですから、ロゴスのこの声のゆえに、うまずめは子に恵まれ、荒野は実を結びます。主の先駆けの二つの声、御使いの声とヨハネの声は、そこに秘められた

救いを、わたしにほのめかしています。このロゴスが現れて、わたしたちが、子に恵まれることの実、すなわち永遠のいのちを得る、という救いです。1:9.4 現に、聖書はこの二つの声を一つに合わせて、すべてを明らかにしています。『子を産まなかった者は聞け。産みの苦しみをしなかった者は声を放て。荒野の子は、とついだ者の子よりも多いからである』（イザヤ五四・一）。御使いが良い知らせを告げたのは、わたしたちにでした。ヨハネが勧めたのも、わたしたちにでした。農夫を悟り、夫を求めるようにと勧めたのです。1:9.5 うまずめの夫と荒野の農夫は、ただ一人の同じかただからです。このかたが、うまずめをも荒野をも、神の力で満たされたのです。生まれのよい女には子が多い一方、昔は子だくさんだったヘブル人の女は、不従順のゆえに子のない者となりました。そこで、うまずめが夫を、荒野が農夫を迎えるからです。こうして、荒野は実りの母、うまずめは信じる者たちの母となりました。どちらも、ロゴスのゆえに母となったのです。しかし、信じない人々にとっては、今もなお、うまずめはうまずめのまま、荒野は荒野のまま残っています。

1:10.1 さて、ロゴスの伝令であるヨハネは、このようにして、神であるキリストの来臨に備えるよう招いていました。ザカリヤの沈黙がほのめかしていたのも、このことでした。その沈黙は、キリストの先駆けとなる実を待っていたのです。それは、真理の光であるロゴスが福音となられて、預言の謎の、奥義を秘めた沈黙をお解きになるためでした。1:10.2 あなたは、もしまことに神を見たいと切に願うなら、神にふさわしい清めにあずかりなさい。月桂樹の葉や、羊毛と紫で飾った何かの紐によってではありません。そうではなく、義を冠として頭に巻き、自制の葉を身にまといなさい。キリストを熱心に尋ね求めなさい。キリストはある所で、『わたしは門である』と言っておられるからです（ヨハネ一〇・九）。神を悟りたいと思う人は、この門を学び知らなければなりません。キリストが、わたしたちのために、天の扉をいっせいに開け放ってくださるためです。1:10.3 ロゴスの扉は理にかなった扉で、信仰の鍵で開かれるからです。『神を知った者は、子と、子が神をあらわす者とのほかに、だれもありません』（マタイ一一・二七）。わたしはよく知っています。それまで閉ざされていた門をお開きになるかたが、のちに、中にあるものをあらわし、示してくださるのです。以前には、知ることもできなかったものです。キリストを通って進んだ人々でなければ、知ることができませんでした。神は、ただキリストを通してだけ、目のあたりに見られるのです。

2章 11〜18節　神託と秘儀

2:11:1 ですから、神のいない奥の院を詮索してはなりません。まやかしに満ちた深い淵の口も、テスプロティアの釜も、キラの鼎も、ドドナの青銅の器も、詮索してはなりません。そうではなく、砂漠の砂の中であがめられてきた古い樫の木と、そこにある神託所は、年老いた神話にまかせておきなさい。その神託所は、樫の木もろとも、しおれてしまったのです。現に、カスタリアの泉は黙りました。コロフォンのもう一つの泉も黙りました。ほかの占いの流れも、同じように死に絶えました。それらは、うぬぼれを失って空になり、自分たちの神話とともに涸れ果てました。そのことが、遅ればせながら、ついに暴かれたのです。2:11:2 さあ、ほかの占い、いや、むしろ狂いの、役に立たない神託所のことを、わたしたちに語ってみなさい。クラロスの神、ピュトの神、ディデュマの神、アンフィアラオス、アポロン[1]、アンフィロコスのことを。もしよければ、前兆を見る者たち、鳥占いをする者たち、夢を解く者たちも、それらといっしょに奉納してしまいなさい。また、麦粉で占う者たちと大麦で占う者たちを連れてきなさい。今なお多くの人々にあがめられている腹話術の占い師たちもです。そして、ピュトの神のそばにまとめて立たせなさい。そうです、エジプト人の奥の院も、テュレニア人の死者の口寄せも、闇に引き渡してもらいましょう。2:11:3 これらはまことに狂気の沙汰です。不信仰な人間たちの詭弁の学び舎、混じりけのない迷いの賭博場です。この魔術の商売仲間は、占いのために仕込まれた山羊たちと、人間から教わって人間に神託を告げる鴉たちです。

2:12:1 では、あなたに秘儀を数え上げてみたらどうでしょうか。アルキビアデスがしたと言われるように、踊って秘儀を暴くことはしません。しかし、真理の言葉に従って、秘儀に隠された魔術を、すっかり裸にしてみせます。あなたがたの神々と呼ばれる者たちそのものも、裸にしてみせます。秘儀の式はこの神々のものです。わたしは、人生の舞台に回り舞台で引き出すようにして、この神々を真理の観客たちに見せましょう。2:12:2 バッコスの信徒たちは、狂乱のディオニュソスを、狂宴の祭りで祭ります。生肉を食らって聖なる狂気を祝い、殺した獲物の肉を分ける儀式を執り行います。蛇を冠のように頭に巻き、「エウアン」と叫んで、あのエバの名を呼ぶのです。迷いをこの世にもたらしたのは、そのエバでした。バッコスの狂宴の祭りのしるしは、秘儀にあずかった蛇です。現に、ヘブル語の正確な発音によれば、「ヘウィア」という名は、気音を付けて読むと、雌の蛇という意味になります。一方、デオとコレは、すでに秘儀の劇となりました。二人の女神のさまよいと、娘の略奪と、嘆きを、エレウシスがたいまつを掲げて祝っているのです。

2:13:1 わたしは、狂宴の祭り（オルギア）と秘儀（ミュステリア）の名の由来を、こう説くべきだと思います。オルギアは、デオがゼウスに向けて起こした怒り（オルゲ）から来ています。ミュステリアは、ディオニュソスの身に起きた汚れ（ミュソス）から来ています。また、アッティカのミュウスという人から来ているとしても、かまいません。アポロドロスによれば、この人は狩りの途中で殺されたそうです。そうであれば、あなたがたの秘儀は、墓に供える誉れであがめられていることになります。2:13:2 また、別の考え方もできます。秘儀（ミュステリア）は、文字を入れ替えて、神話の狩り（ミュテリア）と考えてもよいのです。ほかにも人を狩るものはあるでしょうが、とりわけこうした神話が人を狩るからです。狩られるのは、トラキア人の中の最も野蛮な者、フリュギア人の中の最も愚かな者、ギリシャ人の中の迷信深い者です。2:13:3 ですから、人々のあいだにこの欺きを始めた者は、滅びますように。神々の母の秘儀を示したダルダノスであっても、そうです。サモトラケの人々の狂宴の祭りと秘儀の式を定めたエティオンであっても、そうです。あるいは、あのフリュギア人ミダスであってもです。ミダスは、あのオドリュサイ人から学び、それから、巧みに仕組んだ欺きを、自分の臣下たちに伝えました。2:13:4 島の人、クプロのキニュラスにも、わたしが説き伏せられることは決してないからです。キニュラスは、アフロディ

テにまつわるみだらな狂宴の祭りを、夜から昼へ移して、大胆にも人目にさらしました。同じ町の遊女を、躍起になって神にまつり上げたのです。2:13:5 ほかの人々は、アミュタオンの子メランプスが、デオの祭りをエジプトからギリシヤへ運んできたと言います。歌でたたえられる嘆きの祭りです。わたしなら、この者たちを、災いの張本人と呼びましょう。神のいない神話と、滅びをもたらす迷信の父たちです。秘儀という、悪と滅びの種を、人の世に植えつけた者たちなのです。

2:14:1 では、もう時でもありますから、あなたがたの狂宴の祭りそのものが、欺きとまやかしに満ちていることを暴いてみせましょう。あなたがたが秘儀を受けているなら、あがめているこの神話を、なおさら笑うことでしょう。隠されていることを、わたしは公然と語ります。あなたがたが拝んで恥じないものを、口にするのをはばかりはしません。2:14:2 さて、『泡から生まれた』女神、『クプロ生まれの』女神、キニュラスに愛された女神がいます。アフロディテのことです。『陽物（メデア）を好む女神、陽物から現れ出たゆえに』と呼ばれる女神です。その陽物とは、ウラノスから切り取られたあの陽物、好色で、切り取られた後に波を力ずくで犯した陽物のことです。みだらな部分から生まれた、なんとふさわしい実でしょう。この海の快楽の女神の秘儀の式では、姦淫の術の秘儀を受ける者たちに、ひとかけの塩と男根とが渡されます。女神の生まれの証拠としてです。秘儀を受ける者たちは、女神に貨幣をささげます。遊女に客がするようにです。

2:15:1 デオの秘儀とは、ゼウスが母デメテルと交わった情事です。そして、デオの怒りです。この先、デオを母と呼ぶべきか、妻と呼ぶべきか、わたしにはわかりません。この怒りのゆえに、デオはブリモと呼ばれるようになったと言われます。そして、ゼウスの嘆願、胆汁の飲み物、心臓の抜き取り、口にできない行いです。フリュギア人も、同じことを、アッティスとキュベレとコリュバンテスのために執り行います。2:15:2 彼らが言いふらしているところでは、ゼウスは雄羊の睾丸を引きちぎって持ってきて、デオの胸のただ中に投げ込んだそうです。力ずくで交わったことの償いを、偽りの形で払ったのです。いかにも自分を去勢したかのように見せかけて、です。2:15:3 この秘儀の授け方の符丁を、必要もないのに並べてみましょう。それは、笑う気のないあなたがたをも、暴かれたことのゆえに、きっと笑わせます。『わたしは太鼓から食べた。シンバルから飲んだ。ケルノスを運んだ。寝屋の下にもぐり込んだ』。この符丁は侮辱ではありませんか。この秘儀は物笑いの種ではありませんか。

2:16:1 では、残りのことも付け加えたらどうでしょうか。デメテルは身ごもり、コレが育てられます。ところが、生ませたこのゼウスが、今度はペルセフォネ、すなわち自分の娘と交わるのです。母デオの後にです。前の汚れを忘れたのです。しかも、蛇になって交わります。こうして、ゼウスは正体を暴かれたのです。2:16:2 現に、サバジオスの秘儀では、秘儀を受ける者たちへの符丁は「懐を通る神」です。これは蛇で、秘儀を受ける者たちの懐をくぐって引き出されます。ゼウスの放縦を暴くものです。2:16:3 ペルセフォネもまた、牛の姿の子を身ごもります。確かに、偶像に仕えるある詩人が、こう言っています。『牛は蛇の父、そして牛の父は蛇。山には秘められたもの、牛飼い、突き棒』。茴香の杖を、牛飼いの突き棒と呼んでいるのだと、わたしは思います。バッコスの信徒たちが花輪で飾る、あの杖です。

2:17:1 ペルセフォネの花摘みのことも、あなたに語りましょうか。籠のこと、アイドネウスによる略奪のこと、大地の裂け目のことも。また、エウブレウスの豚たちが、二人の女神とともに呑み込まれたことも。そのために、人々はテスモフォリア祭で、豚を地下の穴に投げ込むのです。この神話を、女たちは町ごとにさまざまな形で祝います。テスモフォリア祭、スキロフォリア祭、アレトフォリア祭です。さまざまなやり方で、ペルセフォネの略奪を悲劇に仕立てているのです。2:17:2 実際、ディオニュソスの秘儀は、まったく人の道に外れています。ディオニュソスがまだ子供だったころ、クーレーテスが武具を鳴らして踊りながら、そのまわりを巡っていました。そこへティタンたちが、計略をもって忍び込みました。そして、子供だましのおもちゃで欺いて、このティタンたちが、まだ幼いディオニュソスを引き裂いたのです。『秘儀の式』の詩人、トラキアのオルフェウスが、こう言っているとおりです。『松かさと、うなり板と、手足の曲がる人形、そして、澄んだ声のヘスペリデスから取った、美しい黄金のりんご』。

2:18:1 あなたがたのこの秘儀の式の役に立たない符丁の品々も、断罪のために並べておくのは、役に立たないことではありません。さいころの骨、毬、独楽、りんご、うなり板、鏡、羊毛の房です。さて、アテナは、ディオニュソスの心臓をこっそり持ち去りました。そして、心臓が脈打っていたこと（パレイン）から、パラスと呼ばれるようになりました。一方、ティタンたちは、ディオニュソスを引き裂いたうえに、鼎に釜を据え、ディオニュソスの手足を投げ入れて、まず煮ました。それから、串に刺して、『ヘファイストスの上にかざした』のです。

2:18:2 後になって、ゼウスが現れます（神であったのなら、焼かれる肉の脂の煙に、どうやらあずかったのでしょう。あなたがたの神々は、この煙を『分け前として受ける』と認めているのですから）。ゼウスは雷でティタンたちを罰し、ディオニュソスの手足を、息子アポロンに託して葬らせます。アポロンは、ゼウスに逆らわなかったので、引き裂かれた亡骸をパルナッソスへ運んで、そこに納めます。

訳注

1 この名は本文が崩れている。元は別の神託所の名か。

2章 19〜24節　秘儀の恥と無神論者

2:19:1 また、コリュバンテスの狂宴の祭りも観たいのなら、お話ししましょう。コリュバンテスの兄弟のうち二人が、三人目の兄弟を殺しました。そして、死んだ者の首を紫の布で覆い、冠をかぶせました。それから、青銅の盾に載せて運び、オリュンポスの山の麓に葬ったのです。2:19:2 これが秘儀なのです。ひと言で言えば、人殺しと墓です。この秘儀の祭司たちを、その道の者たちはアナクテレスタイと呼びます。この祭司たちは、その不幸に、さらにまやかしを上塗りしています。根の付いたセロリを食卓に置くことを禁じるのです。流れ出たコリュバンテスの血から、セロリが生え出たと考えているからです。2:19:3 それはちょうど、テスモフォリア祭を祝う女たちが、地面に落ちたざくろの粒を食べないように気をつけるのと同じです。女たちは、ざくろがディオニュソスの血のしずくから芽生えたと考えているのです。2:19:4 また、人々はコリュバンテスをカベイロイと呼び、カベイロイの秘儀の式を告げ知らせています。こういう話です。この兄弟殺しの二人は、ディオニュソスの男根が納められていた箱を持ち去り、テュレニアへ運んで行きました。誉れある積み荷を扱う商人というわけです。そして、亡命者として、そこにとどまりました。そのあいだに、たいそうありがたい敬虔の教え、すなわち男根と箱を、崇めるようにとテュレニア人に託したのです。このゆえに、男根を奪われたディオニュソスをアッティスと呼びたがる人々がいるのも、もっともです。

2:20:1 テュレニア人という異民族が、これほど恥ずべき受難の物語で秘儀を受けているとしても、何の不思議があるでしょうか。アテネの人々にも、ほかのギリシヤ全体にも、口にするのもはばかられますが、恥に満ちたデオの神話があるのですから。こういう話です。デオは、娘のコレを捜してエレウシスのあたりをさまよいます（これはアッティカの土地です）。そして、疲れ果て、悲しみながら井戸の上に腰を下ろします。井戸に腰を下ろすことは、今でも、秘儀を受ける者たちに禁じられています。秘儀を受けた者たちが、嘆く女神をまねているように見えないためです。そのころエレウシスには、土から生まれた人々が住んでいました。2:20:2 その名は、バウボ、デュサウレス、トリプトレモス、それにエウモルポスとエウブレウスです。トリプトレモスは牛飼い、エウモルポスは羊飼い、エウブレウスは豚飼いでした。この人々から、エウモルピダイとケリュケスの家が出て栄えました。アテネで秘儀の祭司長を出す、あの家柄です。2:20:3 そして（言わずにおくつもりはありませんから）、バウボはデオをもてなし、キュケオンを差し出します。しかし、デオは受け取ろうとせず、飲もうともしません（喪に服していたからです）。バウボはひどく心を痛めます。いかにも、ないがしろにされたと思ったかのようにです。そこで、バウボは衣をまくって陰部をあらわにし、女神に見せます。デオはその眺めを楽しみ、ようやく飲み物を受け取ります。その見ものを喜んだのです。

2:21:1 これが、アテネの人々の隠された秘儀です。オルフェウスも、このことを書き記しています。そのオルフェウスの詩句そのものを、あなたに示しましょう。秘儀の導き手を、恥知らずなありさまの証人として持ってもらうためです。『こう言うと、女は衣をまくり上げ、からだのふさわしくない形を、すっかり見せた。子供のイアッコスがそこにいて、笑いながら、バウボの懐の下で、手でしきりにそれを打ち振っていた。女神はほほえんだ。心の中でほほえんだ。そして、キュケオンの入った、きらめく器を受け取った』。そして、エレウシスの秘儀の合言葉は、こうです。2:21:2 『わたしは断食した。キュケオンを飲んだ。箱から取り出した。事を行ってから、籠に納めた。そして、籠から箱に納めた』。見ものはまことに美しく、女神にふさわしいものです。

2:22:1 つまり、こうした秘儀の式は、夜と火にふさわしいものです。あの『心の大きい』、いや、むしろ心のむなしいエレクテウスの子孫の民にふさわしいのです。さらに、ほかのギリシヤ人たちにもふさわしいのです。この人々には、『死んだ後に、思いもしないことが待っている』のです。では、エペソのヘラクレイ

トスは、誰に向けて予言しているのでしょうか。2:22:2『夜をさまよう者、魔術師、バッコスの信徒、レナイア祭の女、秘儀を受ける者』。この人々を、ヘラクレイトスは死後のことでおどし、この人々に火を予言しています。『人々のあいだで秘儀とされているものを、彼らは神聖を汚すしかたで受けているからである』。2:22:3ですから、秘儀は慣わしにすぎず、むなしい思い込みにすぎません。秘儀とは竜の欺きの一種で、それが崇められているのです。秘儀を受ける人々は、まがいものの敬虔をもってすがっています。すがる先は、まことは秘儀にもならない秘儀の授け方と、狂宴の祭りにもならない秘儀の式です。2:22:4秘儀の箱の中身も、なんというものでしょう。彼らの聖なるものを裸にし、口にできないものを語り出さなければならないからです。それは、胡麻の菓子、ピラミッド形の菓子、丸い菓子、こぶのたくさんある供え物の菓子、塩の粒、それに蛇ではありませんか。蛇は、ディオニュソス・バッサロスの狂宴の祭りの品です。そのうえ、ざくろ、いちじくの枝[1]、茴香の杖、木蔦、さらにフトイスという菓子と、けしの実ではありませんか。これが、彼らの聖なるものなのです。2:22:5さらに、大地の女神テミスの秘められた符丁があります。オレガノ、ともしび、剣、それに女の櫛です。この櫛とは、言葉を慎んで秘儀ふうに言えば、女の部分のことです。2:22:6ああ、なんとあからさまな恥知らずでしょう。昔は、慎み深い人々にとって、夜は口にされることなく、快楽を覆うものでした。ところが今では、秘儀を受ける者たちにとって、夜は放縦を試すものとなり、語りぐさとなっています。そして、たいまつに掲げられた火が、その情欲を暴いています。秘儀の祭司長よ、火を消しなさい。2:22:7たいまつ持ちよ、たいまつを恥じなさい。光が、あなたのイアッコスを暴いています。夜に秘儀を隠させなさい。狂宴の祭りは、闇によってあがめてもらいましょう。火は芝居をしません。暴き、罰するように命じられているのです。

2:23:1これが、無神論者たちの秘儀です。わたしがこの人々を無神論者と呼ぶのは、もっともなことです。彼らは、まことに存在する神を知らずにいます。その一方で、恥知らずにも崇めているのです。ティタンたちに引き裂かれる子供と、嘆き悲しむ女と、恥のゆえにまことに口にできない部分とをです。こうして彼らは、二重の無神論にとらわれています。第一の無神論は、神を知らないことです。まことに存在する神を認めないのです。もう一つの、第二の無神論は、この迷いです。存在しないものを存在するものとみなし、まことには存在しないものを神々と名づけているのです。いや、存在すらせず、ただ名を得ているにすぎないものをです。2:23:2だからこそ、使徒もわたしたちを暴いて、こう言っています。『また、約束されたいろいろの契約に縁がなく、この世の中で希望もなく、無神論者であった』（エペソ二・一二）。

2:24:1スクテヤ人の王には、多くの良いことがありますように。それが誰であったにしてもです。この王は、自分の国の一人の民を、矢で射殺しました。その民は、キュジコスの人々のもとで行われる神々の母の秘儀の式を、スクテヤ人のあいだでまねていたのです。太鼓を打ち鳴らし、シンバルを響かせていました。首から物を下げた、托鉢祭司さながらの姿でした。王は、この者を、ギリシヤ人のもとで男らしさを失った者、ほかのスクテヤ人に女々しい病を教える者として射殺したのです。2:24:2そういうわけで（決して隠しておくべきではありませんから）、わたしは不思議でなりません。人々は、どういうわけで、次の人々を無神論者と呼んできたのでしょうか。アクラガスの人エウヘメロス、クプロの人ニカノル、メロスの人ディアゴラスとヒッポンです。さらに、クレネのあの人（その名はテオドロス）と、そのほか大勢の人々です。この人々は慎み深く生き、この神々についての迷いを、ほかの人々よりも鋭く見抜いていたのです。真理そのものは悟っていなかったとしても、少なくとも迷いには感づいていました。それは、真理に向かう思慮をかき立てる火種として芽生える、小さくない種です。2:24:3そのうちのある人は、エジプト人にこう言い聞かせています。『神々だと思うなら、嘆いてはならない。胸を打ってはならない。しかし、悼むのなら、もはや神々だと思ってはならない』。2:24:4また別の人は、木で作ったヘラクレスの像を手に取って（たまたま家で何かを煮ていたのです。よくあることです）、こう言いました。『さあ、ヘラクレスよ。今こそ、おまえの出番だ。エウリュステウスにしたように、わたしたちにも、この十三番目の功業を果たしてくれ。ディアゴラスに料理をこしらえてくれ』。『それから、像を薪として火にくべた』。

訳注

1 写本は『心臓』と読む。

2章 25〜30節　神々を作る七つの型と、人間だった神々

2:25:1 ですから、無神論と迷信は、無知の両極です。わたしたちは、その両方の外にとどまるよう努めなければなりません。真理の秘儀の祭司長モーセが命じていることを、あなたは見ないのですか。睾丸のつぶれた者と切り取られた者は、会衆に加わってはならない。さらに遊女の子も、というのです（申命記二三・一〜二）。2:25:2 モーセは、前の二つによって、無神論の生き方を謎めかして言っています。神の力、生み出す力を奪われた生き方です。一方、残りの三つ目によって言うのは、ただ一人存在する神の代わりに、偽りの名の神々を大勢、自分の親と名乗る者のことです。それはちょうど、遊女の子が、まことの父を知らずに、大勢の男を父と名乗るのと同じです。2:25:3 さて、人間には、天との結びつきが、古くから生まれつき備わっていました。それは無知によって暗くされていました。しかし、ときおり突然、闇を突き抜けて輝き出ていたのです。たとえば、ある人が語った、あの言葉がそうです。『見えるか、高みにあるこの果てしない天空が。湿った腕で大地を抱いているのが』。また、『大地の乗り物であり、大地に座を持つ者よ。おまえが誰であるにせよ、見ても推し量りがたい者よ』。そのほか、詩人たちが歌う、同じような言葉がそうです。2:25:4 ところが、まっすぐな道から外れて迷い出た考えは、まことに滅びをもたらすものでした。その考えは、地の造りものに心を向けるよう人間を説き伏せました。そうして、天の植物である人間を、天の暮らしからそらせ、地の上に引き倒したのです。

2:26:1 実際、ある人々は、すぐに天の眺めに欺かれました。目だけを信じて星の動きを眺め、驚いて、神とあがめたのです。そして、星を、走る（テイン）ことから神々（テオイ）と名づけました。また、インド人のように太陽を、フリュギア人のように月を拝みました。2:26:2 別の人々は、地から生えるもののうち、栽培された実を摘み取って、名を付けました。アテネの人々のように穀物をデオと呼び、テーバイの人々のようにぶどうの木をディオニュソスと呼んだのです。2:26:3 ほかの人々は、悪に対する報いを見て、その報復と災いを拝み、神に仕立てています。ここから、舞台の詩人たちは、さまざまな女神や霊を作り上げてきました。エリニュスたちやエウメニデスたち、パラムナイオイやプロストロパイオイ、さらにアラストレスです。2:26:4 さらに、哲学者たちの中にも、詩人たちに続いて、あなたがたの中にある感情の姿を偶像に仕立てる者たちがいます。恐れ、愛欲、喜び、希望がそれです。昔のエピメニデスも、まさにそうでした。アテネに、傲慢と恥知らずの祭壇を建てたのです。2:26:5 また、出来事そのものから出て、人々によって神とされ、からだを持つ姿に作られるものもあります。正義の女神ディケ、クロト、ラケシス、アトロポス、運命の女神ヘイマルメネ、さらにアッティカのアウクソとタロです。2:26:6 第六の型は、欺きを持ち込み、神々をこしらえるものです。この型に従って、人々は神々を十二と数えます。ヘシオドスは、この神々について、自分の『神統記』を歌っています。ホメロスが神々について語っていることも、みなこの神々のことです。2:26:7 最後に残るのは（これらの型は全部で七つあるからです）、人間に降りてくる神の恵みから出たものです。実際、人々は、恵みを施してくださる神を悟らずに、救い手なる者たちをこしらえました。ディオスクロイ、災いを防ぐヘラクレス、医者アスクレピオスです。

2:27:1 これらが、すべりやすく有害な、真理からの逸脱です。人間を天から引きずり下ろし、深い淵へと転げ落とすものです。そこで、わたしは神々そのものを、肌に触れるほど間近に、あなたがたに示したいと思います。どんな者たちなのか、そもそも何者かではあるのかをです。あなたがたが、今こそ迷いをやめ、天へと駆け戻るためです。2:27:2 『わたしたちも、ほかの人々と同じく、怒りの子であったからである。しかるに、あわれみに富む神は、わたしたちを愛して下さったその大きな愛をもって、すでに罪過によって死んでいたわたしたちを、キリストと共に生かして下さった』（エペソ二・三〜五）。ロゴスは生きておられるからです。そして、キリストと共に葬られた者は、神と共に高められます。一

方、まだ信じない者たちは『怒りの子』と呼ばれます。怒りに養われる子らです。しかし、わたしたちは、もはや怒りの養い子ではありません。迷いから引き離され、真理へと急ぐ者たちです。2:27:3 こうして、かつて不法の子らであったわたしたちは、ロゴスの人を愛する心のゆえに、今や神の子らとなりました。ところが、あなたがたには、あなたがた自身の詩人、アクラガスの人エンペドクレスも、こう語る役を引き受けています。『それゆえ、おまえたちは、ひどい災いに取り乱し、みじめな苦しみから心を休めることは決してない』。あなたがたのもとで神々について語られることの大半は、神話として語られ、こしらえられたものです。2:27:4 一方、実際にあったと考えられていることは、放縦に生きた恥ずべき人間たちについて書き記されたものです。『おまえたちは、思い上がりと狂気のうちに歩む。正しくまっすぐな道を捨てて、いばらととげの道へ去った。死すべき者たちよ、なぜさまようのか。むなしい者たちよ、やめよ。夜の闇を離れ、光をつかめ』。預言者であり詩人でもあるシビュラは、わたしたちにこう言い聞かせています。2:27:5 真理も言い聞かせています。真理は、神々の群れから、このぎょっとさせ、たまげさせる仮面をはぎ取ります。そして、同じ名がいくつもあることによって、人々の思い込みが作り出したものを暴くのです。

2:28:1 現に、ゼウスを三人と記す人々がいます。一人はアイテルの子で、アルカディアにいます。残る二人はクロノスの子です。その二人のうち、一人はクレテに、もう一人はまたアルカディアにいるといいます。2:28:2 また、アテナを五人とする人々もいます。一人目はヘファイストスの子で、アテネのアテナです。二人目はナイルの子で、エジプトのアテナです。三人目はクロノスの子で、戦いを考え出したアテナです。四人目はゼウスの子で、メッセネの人々が母の名からコリュファシアと呼ぶアテナです。最後に、パラスと、オケアノスの娘ティタニスとの子がいます。このアテナは、不敬にも父をほふり、その父の皮を、羊の毛皮のようにまとって飾っています。2:28:3 さらに、アリストテレスはアポロンを数え上げています。一人目はヘファイストスとアテナの子です（ここではもう、アテナは処女ではありません）。二人目はクレテにいた、キュルバスの子です。三人目はゼウスの子、四人目はアルカディアの人で、シレノスの子です。このアポロンは、アルカディアの人々のもとでノミオスと呼ばれています。これらに加えて、アリストテレスは、アンモンの子であるリビヤのアポロンを挙げます。そして文法学者ディデュモスは、これらに六人目として、マグネスの子を加えています。2:28:4 今でも、アポロンはどれほどいることでしょうか。数えきれないほどの、死すべき、はかない人間たちです。先に挙げたあのアポロンたちと同じように、そう呼ばれている者たちです。

2:29:1 大勢のアスクレピオスのことを、あなたに話したらどうでしょうか。数え上げられるヘルメスたちや、神話に語られるヘファイストスたちのことをです。こうした大勢の名であなたがたの耳を水浸しにして、くどいと思われはしないでしょうか。ともかく、彼らの故郷も、技も、生活も、さらには墓も、彼らが人間であったことを暴いているのです。2:29:2 現に、アレスは、詩人たちのもとでも、できるかぎりの誉れを受けています。『アレスよ、アレスよ、人を滅ぼす者、血に汚れた者、城壁を襲う者』。このアレスは、移り気で敵意に満ちた者ですが、エピカルモスの言うところでは、スパルタ人でした。2:29:3 一方、ソフォクレスは、アレスをトラキア人として知っています。ほかの人々は、アルカディア人とします。ホメロスは、このアレスが十三か月のあいだ縛られていたと言います。『アレスは耐えた。アロエウスの子らであるオトスと、強いエピアルテスが、強い縛めで彼を縛ったときに。青銅の甕の中に、十三か月のあいだ縛られていた』。カリア人には、多くの良いことがありますように。アレスに犬を犠牲としてささげる人々です。2:29:4 スクテヤ人も、ロバを犠牲にするのをやめずにいなさい。アポロドロスとカリマコスが言うとおりです。『ポイボスは、ヒュペルボレオイ人のもとで、ロバの犠牲に臨む』。同じカリマコスは、別のところでこう言います。『脂の乗ったロバの犠牲が、ポイボスを喜ばせる』。2:29:5 ヘファイストスは、ゼウスにオリュンポスから、『神々しい敷居から』投げ落とされました。そしてレムノスに落ちて、鍛冶をしていました。両足が不自由になり、『その下で、細いすねがせわしく動いていた』のです。

2:30:1 あなたには、神々の中に、鍛冶屋だけでなく医者もいます。ところが、この医者は金に目がない者でした。その名をアスクレピオスといいます。あなたの詩人、ボイオティアの人ピンダロスを、あなたに引き合わせましょう。『手の中に輝く黄金が、豪勢な報酬で、あの者をも惑わした。そこで、クロノスの子は、

手で投げつけ、二人の胸から、たちまち息を奪った。燃える雷が、死を打ち込んだ』。2:30:2 エウリピデスも、こう言います。『ゼウスが、わたしの子アスクレピオスを殺した張本人なのだ。その胸に炎を投げつけて』。こうして、アスクレピオスは雷に打たれて、キュノスリスの地に横たわっています。2:30:3 フィロコロスは、テノスではポセイドンが医者としてあがめられていると言います。また、クロノスの上にはシチリアが載っていて、クロノスはそこに葬られているといいます。2:30:4 トゥリオイの人パトロクレスと小ソフォクレスは、いくつかの悲劇の中で、ディオスクロイについて語っています。このディオスクロイの二人は、はかない人間であったというのです。この言い伝えを請け合う者として、ホメロスで足りる人がいるなら、ホメロスはこう言っています。『しかし、二人はすでに、いのちを育む大地に覆われていた。ラケダイモンの地、愛する故郷の土地で』。2:30:5 『キュプリア』の詩を書いた人も、進み出なさい。『カストルは死すべき者で、死の定めが割り当てられている。しかし、アレスの若枝ポリュデウケスは、死なない者である』。これは、詩人らしい嘘でした。2:30:6 ホメロスのほうが、この人より信じるに足ります。ホメロスは、ディオスクロイの二人ともについて語りました。そのうえ、ヘラクレスも影にすぎないと暴きました。『人ヘラクレス、大いなる業に通じた者』と言っているからです。2:30:7 つまり、ホメロス自身も、ヘラクレスを死すべき人間と知っているのです。哲学者ヒエロニュモスは、その体つきまで述べています。小柄で、毛が逆立ち、たくましい、と。ディカイアルコスは、やせぎすで、筋張り、色が黒く、鉤鼻で、目はやや青みがかり、髪はまっすぐだった、と言います。このヘラクレスは五十二年生きて、生涯を終えました。オイテ山の火葬の薪の上で葬られたのです。

2章 31〜35節　神々の情欲と、死者のための競技祭

2:31:1 ムーサたちを、アルクマンはゼウスとムネモシュネの娘として系譜に記します。ほかの詩人や歴史家たちも、ムーサたちを神とあがめ、敬っています。今では、町ぐるみでムーサたちのために神殿を設け、聖域としているほどです。ところが、このムーサたちは、マカルの娘メガクロが買い取った、ムシヤの女奴隷でした。2:31:2 マカルはレスボスの人々の王ですが、いつも妻と争っています。メガクロは、母のために憤っています。どうして憤らずにいられるでしょうか。そこで、メガクロは、これだけの数のムシヤの女奴隷（ミュサイ）を買い入れます。そして、アイオリス人の方言で、ムーサ（モイサイ）と呼ぶのです。2:31:3 メガクロは、この女たちに、昔の出来事を調子よく歌い、竪琴を弾くことを教え込ませました。女たちは、たえず竪琴を弾き、見事に歌でまじないをかけて、マカルを魅了し、その怒りを鎮めていきました。2:31:4 そのため、メガクロは、母のための感謝のささげ物として、この女たちを青銅で奉納しました。そして、すべての神殿で、彼女たちを敬うように命じたのです。ムーサたちとは、このようなものです。この話は、レスボスの人ミュルシロスが伝えています。

2:32:1 では、あなたがたのもとの神々の恋と、放縦をめぐる途方もない神話を聞きなさい。神々の傷、縛め、笑い、戦いを聞きなさい。さらに、奴隷の勤めと宴、そしてまた抱擁、涙、苦しみ、みだらな快楽を聞きなさい。2:32:2 わたしの前に、ポセイドンを呼び出しなさい。ポセイドンに辱められた女たちの合唱隊も呼び出しなさい。アンフィトリテ、アミュモネ、アロペ、メラニッペ、アルキュオネ、ヒッポトエ、キオネ、そのほか数えきれない女たちです。これほど大勢の女たちの中でも、あなたがたのポセイドンの情欲は、まだ窮屈な思いをしていたのです。2:32:3 アポロンも呼び出しなさい。この者はポイボスであり、清らかな予言者であり、良い助言者です。しかし、ステロペはそうは言いません。アイトゥサも、アルシノエも、ゼウクシッペも、プロトエも、マルペッサも、ヒュプシピュレも言いません。ダフネだけが、予言者からも辱めからも逃れたからです。2:32:4 ゼウス自身も、すべての最後に来なさい。あなたがたの言う『人間と神々の父』です。ゼウスは、これほどまでに愛欲におぼれました。すべての女を欲し、すべての女に欲望を満たしたのです。現に、ゼウスは女たちで満ち足りていました。トゥムイスの雄山羊が雌山羊で満ち足りるのに、劣らないほどです。

2:33:1 ホメロスよ、わたしは、あなたの詩にも感嘆しています。『こう言って、クロノスの子は、黒い眉でうなずいた。王の不死の頭から、神々しい髪がなびき、彼は大いなるオリュンポスを揺るがした』。2:33:2 ホメロスよ、あなたはゼウスを、おごそかな者に作り上げ、誉れあるうなずきを着せています。しかし、人よ、あなたが刺繍の帯を見せさえすれば、ゼウスは暴かれ、その髪も恥をかくのです。2:33:3 あのゼウスは、どれほどの放縦にまで突き進んだことでしょう。アルクメネと、あれほど多くの夜を楽しんだのです。九つの夜でさえ、このふしだらな者には長くはなかったからです（むしろ、生涯のすべても、その放縦には短かったのです）。それも、わたしたちのために、災いを防ぐ神をもうけるためでした。2:33:4 ゼウスの子ヘラクレス、まことにゼウスの子です。長い夜から生まれた者です。この者は、十二の難業には長い時をかけて苦労しました。一方、テスティオスの五十人の娘たちは、一夜で辱めました。これほど多くの処女の、姦夫であり、花婿でもあったのです。ですから、詩人たちがこの者を『ひどい者』『無法なことをする者』と呼ぶのも、もっともです。この者のさまざまな姦淫と、少年たちを辱めたことを語れば、長くなるでしょう。2:33:5 実際、あなたがたのもとの神々は、少年たちからさえ手を引きませんでした。ある神はヒュラスを、別の神はヒュアキントスを恋しました。また、別の神はペロプスを、別の神はクリュシッポスを、別の神はガニュメデスを恋したのです。2:33:6 あなたがたの妻たちは、こういう神々を拝みなさい。そして、自分の夫たちもこういう者であるように、これほど慎み深い者であるように祈りなさい。夫たちが神々と同じことに励み、神々に似た者となるためです。あなたがたの子供たちも、こういう

神々を敬うことに慣れなさい。神々を淫行のありありとした像として受け取って、大人になるためです。2:33:7 しかし、神々のうち男の神々だけが、おそらく愛欲に駆け回るのでしょう。『女神たちは、恥じらいから、それぞれ家にとどまっていた』とホメロスは言います。女神たちは、おごそかさのゆえに、姦淫を犯したアフロディテを見ることを恥じらったのです。2:33:8 ところが、その女神たちも、姦淫に縛られて、いっそう情欲のままに、ふしだらにふるまっています。エオスはティトノスに、セレネはエンデュミオンにおぼれています。ネレイスの一人はアイアコスに、テティスはペレウスにおぼれています。デメテルはイアシオンに、ペルセフォネはアドニスにおぼれています。2:33:9 アフロディテは、アレスとのことで恥をかくと、キニュラスに乗り換えました。そして、アンキセスと結婚し、パエトンを待ち伏せし、アドニスを恋しました。また、牛の目のヘラと美しさを張り合いました。女神たちは、りんごのゆえに着物を脱ぎ、裸になって羊飼いの前に出ました。羊飼いの目に、誰が美しく映るかを確かめるためです。

2:34:1 さあ、競技祭も手短に巡り、この墓の祭りを打ち壊しましょう。イストミア祭、ネメア祭、ピュティア祭、そしてこれらに加えてオリュンピア祭です。ピュトでは、ピュトの蛇が祭られ、その蛇の祭りがピュティア祭と告げられます。イストモスでは、海が哀れな屑を吐き出し、イストミア祭はメリケルテスを嘆きます。ネメアでは、別の子供アルケモロスが葬られ、その子供の弔いの競技がネメア祭と呼ばれます。全ギリシヤの人々よ、あなたがたにとって、ピサはフリュギアの御者の墓です。そして、ペロプスへの献酒であるオリュンピア祭を、フェイディアスのゼウスが横取りしています。してみると、死者のために競われる競技は、神託と同じく、秘儀だったようです。そして、どちらも公にされてしまいました。2:34:2 しかし、アグライの秘儀と、アッティカのハリムスの秘儀は、アテネに限られています。一方、競技祭と、ディオニュソスにささげられる男根の像は、もう世界中の恥です。それらは、悪しく人の世にはびこっているのです。2:34:3 こういう話です。ディオニュソスは、ハデスへ降りたいと願いますが、道を知りません。ある者が、ディオニュソスに道を教えると約束します。名をプロシュムノスといい、ただで教えるのではありません。その報酬は、立派なものではありません。しかし、ディオニュソスには好ましいものです。その恵みは愛欲の恵みで、プロシュムノスが求めた報酬は、ディオニュソスその人です。その求めは、神の望むところとなります。そして、帰って来たら与えると約束し、誓いによってその約束を確かにします。2:34:4 道を教わると、ディオニュソスは出発します。そして、また戻って来ます。ところが、プロシュムノスは見つかりません（もう死んでいたからです）。ディオニュソスは、自分を恋した者への誓いを果たそうと、墓へ急ぎ、身をゆだねたいと焦がれます。そこで、手近にあったいちじくの枝を切り取り、男の部分の形にこしらえます。そして、その枝の上に座り、死者への約束を果たすのです。2:34:5 この情欲の、秘儀の記念として、町々でディオニュソスのために男根の像が立てられています。ヘラクレイトスは、こう言います。『もし行列をし、恥部に向けて最も恥知らずな歌を歌うのが、ディオニュソスのためでなければ、それは悪事をなしたことになる[1]。しかし、ハデスとディオニュソスは同じである。人々は、この者のために狂い、レナイア祭で浮かれ騒ぐのだ』。わたしの思うに、彼らが狂うのは、からだの酔いのゆえというより、放縦の恥ずべき秘儀の執り行いのゆえです。

2:35:1 ですから、あなたがたのこのような神々が奴隷であるのも当然です。情欲の奴隷となった神々なのです。それどころか、ラケダイモン人のもとのヘイロタイと呼ばれる者たちより前に、神々は奴隷のくびきの下に入りました。アポロンはフェライでアドメトスに、ヘラクレスはサルデスでオンファレに仕えました。ラオメドンには、ポセイドンとアポロンが雇われ人として仕えました。アポロンは、役に立たない召使いのようでした。前の主人から、自由を得ることさえできなかったのでしょう。そのとき、二人は、このフリュギアの人のために、トロイアの城壁も築いたのです。2:35:2 ホメロスは、アテナが、両手に『黄金の灯火を持って』オデュッセウスのそばで照らしたと語って、恥じません。また、わたしたちが読んだところでは、アフロディテは、ふしだらな小間使いのように椅子を運んで来ました。そして、ヘレネのために、それを姦夫の向かいに置いたのです。姦夫を交わりに誘い込むためです。2:35:3 パニュアッシスも、これらに加えて、ほかにもきわめて多くの神々が人間に仕えたと記しているからです。だいたい、こう書いています。『デメテルは耐えた。名高い両足の曲がった神も耐え

た。ポセイドンも耐えた。銀の弓のアポロンも耐えた。死すべき人間のもとで、一年のあいだ雇われ人として仕えることを。猛き心のアレスも、父の強いる力によって耐えた』。そして、これに続く句です。

訳注

1 別の読み方では『さもなければ最も恥知らずな行いになる』。

2章 36〜41節　傷つき、死ぬ神々と、ダイモン

2:36:1 ですから、あなたがたのこの神々は、色好みで情に動かされます。その神々を、あらゆる点で、人間と同じ苦しみを受ける者として描くことになります。それは当然の成り行きです。『あの者たちの肌も、まことに死すべきものなのだ』。ホメロスがその証人です。ホメロスは、アフロディテが傷を受けて、鋭く大声で叫ぶさまを、まことに細かく描いています。また、最も戦好きのアレスその人が、ディオメデスに脇腹を突かれたことも語っています。2:36:2 ポレモンは、アテナもオルニュトスに傷つけられたと言います。それどころか、アイドネウスがヘラクレスに矢で射られたと、ホメロスは言います。太陽の神ヘリオスも射られたと、パニュアッシスは記しています。さらに、同じパニュアッシスが記しています。結婚をつかさどるヘラまでが、同じヘラクレスに『砂深いピュロスで』射られたというのです。ソシビオスは、ヘラクレスまでもがヒッポコオンの子らに手を突かれたと言います。2:36:3 傷があるなら、血もあります。詩人たちの言う神々の血イコルは、血よりもさらにおぞましいものだからです。イコルは、血の腐ったものと解されるからです。ですから、神々が欠いている手当てと食べ物を、神々のために描き入れなければなりません。2:36:4 そのために、食卓があり、酒宴があり、笑いがあり、交わりがあるのです。もし神々が、不死で、何も欠かず、老いない者であったとします。そうであれば、人間のような情事にふけることも、子をもうけることも、眠ることもなかったでしょう。2:36:5 ゼウスその人も、エチオピヤ人のもとで、人間の食卓にあずかりました。また、アルカディアの人リュカオンのもとでもてなされ、人の道に外れた、掟に背く食卓にもあずかりました。現に、ゼウスは、意図せずに人間の肉を腹いっぱい食べたのです。神でありながら、ゼウスは知らずにいたからです。もてなし役のアルカディアの人リュカオンは、自分の子を殺し（名をニュクティモスといいます）、料理としてゼウスに出していたのです。

2:37:1 なんと立派なゼウスでしょう。予言の神、客人を守る神、嘆願する者を守る神、慈しみ深い神、すべての託宣の主、清めを求める者がすがる神です。いや、むしろ、不正な者、掟に背く者、無法な者、神聖を汚す者、人の道に外れた者、乱暴者、辱める者、姦夫、色好みです。しかし、ゼウスがいたのは昔のことです。そのような者であった頃、人間であった頃のことです。今では、わたしの思うに、あなたがたの神話も、もう老いてしまったようです。2:37:2 ゼウスは、もう蛇ではありません。白鳥でも、鷲でも、色好みの人間でもありません。神は空を飛ばず、少年を愛さず、口づけもせず、力ずくで迫ることもしません。とはいえ、今でも美しい女たちは大勢いるのです。レダより見目よく、セメレより若い盛りの女たちです。少年たちも、あのフリュギアの牛飼いより美しく、洗練されています。2:37:3 今、あの鷲はどこにいるのですか。白鳥はどこにいるのですか。ゼウスその人は、どこにいるのですか。ゼウスは、翼もろとも老いてしまいました。恋の業を悔い改めたわけでも、慎むよう教え導かれているわけでも、まさかないからです。神話は、あなたがたの前で裸にされています。レダは死にました。白鳥も死にました。鷲も死にました。あなたのゼウスを探しなさい。天ではなく、地を詮索しなさい。2:37:4 クレテの人が、あなたに語ってくれるでしょう。ゼウスは、その人のもとに葬られてもいるのです。カリマコスは讃歌の中で言います。『王よ、クレテ人は、おまえの墓さえ造った』。ゼウスは、死んでしまったからです（嘆いてはなりません）。レダと同じく、白鳥と同じく、鷲と同じく、色好みの人間と同じく、蛇と同じく、死んだのです。

2:38:1 迷信深い者たち自身も、すでに、神々をめぐる迷いに気づいていることが明らかです。不本意ながら、それでも気づいているのです。『彼らは、昔語りの樫の木から出たのでも、岩から出たのでもない』。神々は人の族なのです。しかし、もう少し先で、その神々が樫の木であり、岩でもあることが明らかになるでしょう。2:38:2 現に、スパルタでは、アガメムノンという名のゼウスが敬われて

いると、スタフュロスは記しています。また、ファノクレスは『恋、あるいは美少年たち』の中で書いています。ギリシャ人の王アガメムノンが、アルギュンノスのアフロディテの神殿を建てたというのです。愛した少年アルギュンノスのためです。2:38:3 アルカディア人は、首吊りのアルテミスと呼ばれる女神を拝んでいます。カリマコスが『縁起』で言っているとおりです。また、メテュムナでは、コンデュリティスと呼ばれる、別のアルテミスが敬われています。ラコニアには、また別のアルテミス、足痛風のアルテミスの神殿もあります。ソシビオスが言っているとおりです。2:38:4 ポレモンは、口を開けたアポロンの像を知っています。また、エリスで敬われている、ごちそう食いのアポロンの像もです。そのエリスで、エリスの人々は、蠅払いのゼウスに犠牲をささげます。ローマ人は、蠅払いのヘラクレスに犠牲をささげます。熱の神と恐れの神にも、犠牲をささげます。ローマ人は、これらもヘラクレスの仲間に書き加えているのです。2:38:5 アルゴス人とラコニア人のことは、言わずにおきましょう。アルゴス人は、墓荒らしのアフロディテを崇めています。スパルタ人は、咳のアルテミス（ケリュティス）を敬っています。彼らは、咳をすることを、ケリュッテインと言うからです。

2:39:1 わたしの挙げるこれらのことが、どこかから書き加えとして、あなたのもとに持ち込まれていると思うのですか。あなたは、自分の国の歴史家たちさえ知らないようです。わたしは、その歴史家たちを、あなたの不信仰に対する証人として呼びます。哀れな人々よ、彼らは、まことに生きるに値しないあなたがたの生活を、すべて無神のあざけりで満たしたのです。2:39:2 アルゴスでは、はげ頭のゼウスが敬われているではありませんか。クプロでは、別の、復讐のゼウスが敬われているではありませんか。また、アルゴス人はペリバソのアフロディテに、アテネの人々は遊女のアフロディテに犠牲をささげているではありませんか。シュラクサイの人々も、尻の美しいアフロディテ（カリピュゴス）に犠牲をささげています。詩人ニカンドロスは、このアフロディテを、どこかで『美しい尻の女神』（カリグルトス）と呼んでいます。2:39:3 ディオニュソス・コイロプサラスについては、もう口を閉ざしておきます。シキュオンの人々は、このディオニュソスを、女の部分をつかさどる神に任じて拝んでいます。乱行の張本人を、恥ずべきことの監督者として敬っているのです。彼らにとって、神々はこのようなものであり、彼ら自身もこのような者です。神々のことで戯れる者たち、いや、むしろ自分自身を嘲り、辱める者たちです。2:39:4 エジプト人は、村ごと、町ごとに、理性のない動物を敬っています。こういう神々を拝むギリシャ人より、どれほどましでしょうか。動物は、獣ではあっても、姦淫もせず、みだらでもないからです。自然に反した快楽を追い求めるものは、一つもありません。一方、あの神々がどのような者かについては、なお何を言う必要があるでしょうか。すでに十分に暴かれたのですから。2:39:5 とはいえ、いま触れたエジプト人も、拝むものについては、まちまちに分かれています。エジプト人のうち、シュエネの人々はパグロスという魚を敬います。エレファンティネに住む人々は、マイオテスを敬います（これも別の魚です）。オクシュリンコスの人々も、同じように、自分たちの土地と同じ名の魚を敬います。さらに、ヘラクレオポリスの人々はイクネウモンを敬います。サイスの人々とテーバイの人々は羊を、リュコポリスの人々は狼を、キュノポリスの人々は犬を敬います。メンフィスの人々はアピスを、メンデスの人々は雄山羊を敬います。2:39:6 一方、あなたがたは、何もかもエジプト人よりすぐれています（劣っている、とは言いかねますが）。毎日エジプト人を笑ってやまないあなたがたは、理性のない動物については、どうなのですか。あなたがたのうち、テッサリア人は、こうのとりを、慣れ親しんでいるゆえに敬っています。テーバイの人々は、ヘラクレスの誕生のゆえに、いたちを敬っています。では、テッサリア人はまたどうでしょうか。蟻を敬っていると伝えられています。ゼウスが蟻（ミュルメクス）に姿を変えて、クレトルの娘エウリュメドゥサと交わり、ミュルミドンを生ませたと学んだからです。2:39:7 ポレモンは、トロアスのあたりに住む人々が、その土地の鼠を敬っていると記しています。この鼠を、彼らはスミントイと呼びます。その鼠が、敵の弓の弦をかじり切ったというので、敬うのです。そして、その鼠にちなんで、アポロンをスミンティオスと名づけました。2:39:8 ヘラクレイデスは『神殿の創建』で、アカルナニアのあたりについて語っています。そこにはアクティオンの岬があり、アクティオンのアポロンの神殿があります。そこでは、蠅のために、まず牛を犠牲にささげる、と言うのです。2:39:9 サモスの人々のことも、忘れはしません（エ

ウフォリオンが言うとおり、サモスの人々は羊を敬っています）。ピニケに住むシリヤ人のことも、忘れはしません。その一部は鳩を、別の一部は魚を、エリスの人々がゼウスを敬うのと同じくらい、度を越して敬っているのです。

2:40:1 さて、それはそれとしましょう。あなたがたの崇めているものは、神々ではありません。そこで、それらがほんとうにダイモンなのかを、改めて調べてみたいと思います。あなたがたの言うとおり、この第二の位に数えられる者としてです。もしダイモンだとすれば、意地汚く、汚れた者たちだからです。2:40:2 町ごとに、その土地のダイモンが、これほど公然と誉れを受けているのを、見つけることができます。キュトノスの人々のもとではメネデモス、テノスの人々のもとではカリスタゴラスです。デロスの人々のもとではアニオス、ラコニア人のもとではアストラバコスです。ファレロンでも、船尾の英雄と呼ばれる者が敬われています。また、巫女ピュティアは、プラタイアの人々に、犠牲をささげるよう命じました。アンドロクラテス、デモクラテス、キュクライオス、レウコンにです。ペルシア戦争がたけなわの頃のことです。

2:41:1 ほんの少しでも見通すことのできる人なら、ほかにも、おびただしい数のダイモンを見て取ることができます。『実に、多くを養う大地の上には、三万の不死のダイモンがいる。言葉を話す人間たちの見張りである』。ボイオティアの人ヘシオドスよ、その見張りとは誰なのか、言うのを惜しんではなりません。2:41:2 いや、言うまでもありません。見張りとは、これらのダイモンと、それより誉れの高い者たち、すなわち大いなるダイモンたちです。アポロン、アルテミス、レト、デメテル、コレ、プルトン、ヘラクレス、そしてゼウスその人です。しかし、アスクラの人よ、彼らが見張るのは、わたしたちが逃げ出さないようにではなく、おそらく、罪を犯さないようにでしょう。罪などもちろん味わったこともない者たちが、です。ここでこそ、あのことわざを唱えるのがふさわしいでしょう。『父親が、自分は戒められたこともないことで、子を戒める』。2:41:3 もし、この者たちがほんとうに見張りだとしても、わたしたちへの好意に心を動かされているのではありません。あなたがたの滅びにしがみつき、煙に釣られて、へつらう者のように人の生活にすり寄ってくるのです。ダイモン自身が、どこかで、自分の大食いを告白しています。『注ぎの酒と、脂の煙。それこそ、われらの受ける誉れの分なのだから』と言うのです。2:41:4 エジプト人の神々、猫やいたちのような神々が、もし声を得たとします。そのとき、ホメロスと詩人たちの声、脂の煙と料理を好む声のほかに、どんな声を発するでしょうか。あなたがたのもとのダイモンと神々は、まさにこのようなものです。半分ろばの騾馬（ヘミオノイ）のように、半神（ヘミテオイ）と呼ばれる者たちがいるなら、その者たちもです。あなたがたには、不敬虔な言葉の組み合わせを作るための名前が、少しも不足していないからです。

3章　人身御供と、神殿と呼ばれる墓

3:42:1 さあ、では、このことも付け加えましょう。あなたがたの神々は、人の情けを持たず、人を憎む悪霊なのです。人間の狂気を喜ぶだけではありません。そのうえ、人殺しをも楽しんでいるのです。あるときは競技場での武器を取った争いを、あるときは戦争での数えきれない功名争いを手に入れます。それを、自分たちの快楽のきっかけにするのです。できるかぎり、人間の殺戮をはばかりなくむさぼるためです。すでに町ごと、民族ごとに、疫病のように襲いかかり、荒々しい注ぎの供え物を求めてきました。3:42:2 現に、メッセネの人アリストメネスは、イトメのゼウスに三百人を屠りました。これほど多くの、このような百牛の犠牲を、一度に、吉兆のうちにささげていると思ったのです。その中には、ラケダイモン人の王テオポンポスもいました。高貴ないけにえです。3:42:3 タウロイ人という民族は、タウリケ半島のあたりに住んでいます。彼らは、自分たちのもとで異国の人を、それも海で難破した人々を捕らえます。そして、ただちにタウロイのアルテミスに犠牲としてささげます。エウリピデスは、あなたのこのような犠牲を、舞台で悲劇に仕立てています。3:42:4 モニモスは『驚異の集成』の中で記しています。テッサリアのペラでは、アカイアの人間がペレウスとケイロンに犠牲としてささげられるというのです。3:42:5 実際、アンティクレイデスは『帰国物語』の中で明らかにしています。リュクトスの人々（これはクレテ人の中の一つの民族です）が、人間を屠ってゼウスにささげているというのです。また、ドシダスは言います。レスボスの人々も、ディオニュソスに同じような犠牲をささげているというのです。3:42:6 フォカイアの人々についても（この人々も見過ごしはしないからです）、ピュトクレスが『協和について』の第三巻で記しています。この人々は、タウロポロスのアルテミスに、人間を丸焼きの犠牲としてささげるというのです。3:42:7 アッティカのエレクテウスと、ローマのマリウスは、それぞれ自分の娘を犠牲にささげました。エレクテウスはペルセフォネにささげました。デマラトスが『悲劇の題材』の第一巻で言うとおりです。マリウスは災いを払う神々にささげました。ドロテオスが『イタリア誌』の第四巻で記しているとおりです。3:42:8 これらのことから、悪霊たちは、ずいぶん人を愛する者たちであることが明らかになります。それに見合って、迷信深い者たちも、どうして敬虔でないことがあるでしょうか。悪霊たちは救い手とたたえられています。一方、迷信深い者たちは、救いを損なおうとたくらむ者たちに救いを求めているのです。現に、彼らは、悪霊たちに吉兆の犠牲をささげているつもりで、自分では気づかずに人間を屠っているのです。3:42:9 実際、場所によって、殺しがいけにえになるのではありません。ある人が、怒りや金銭欲（これらもほかの同じような悪霊です）にではなく、アルテミスとゼウスに人間を屠ったとします。道ばたでではなく、いかにも聖なる場所で、祭壇の上で屠り、それをいけにえと唱えたとします。それでも、いけにえにはなりません。このような犠牲は、殺しであり、人殺しなのです。

3:43:1 それでは、ほかの生き物のうちで最も賢い人々よ、どういうことでしょうか。わたしたちは、荒々しい獣を避けて逃げます。どこかで熊や獅子に出くわせば、道をそれます。『ちょうど、山の谷間で蛇を見た者が、後ずさりして身を引き、震えが手足をとらえ、退いたように』です。一方、悪霊は、滅びをもたらし、呪われ、たくらみ、人を憎み、害をなす者たちです。あなたがたは、それをあらかじめ感づき、悟っています。それなのに、どうして道をそれず、背を向けもしないのですか。3:43:2 悪しき者たちが、どうして真実を語るでしょうか。だれの役に立つでしょうか。現に、わたしは、あなたがたの国のこれらの神々、つまり悪霊よりもすぐれた者として、人間をあなたに示すことができます。予言の神アポロンよりもすぐれた、クロスとソロンです。3:43:3 あなたがたのポイボスは、贈り物を愛しますが、人を愛してはいません。友であったクロイソスを裏切りました。報酬のことを忘れ（それほど名誉を好んでいたのです）、クロイソスにハリュス川を越えさせて、火刑の薪の山へと導いたのです。悪霊たちは、この

ように愛しながら、火の中へと導くのです。3:43:4 しかし、アポロンよりも人を愛し、アポロンよりも真実な人よ、薪の山の上に縛られている者を不憫に思いなさい。ソロンよ、あなたは真理を予言しなさい。クロスよ、あなたは火を消すよう命じなさい。クロイソスよ、せめて最後には、苦しみによって学び直し、正気に返りなさい。あなたが拝んでいる者は、恩知らずです。報酬を受け取り、黄金を手にした後で、またも偽るのです。つまり、あなたに結末を告げるのは、悪霊ではなく人間なのです。ソロンは、曲がった予言はしません。異民族の人よ、あなたは、これだけが真実な神託であることを見いだすでしょう。この神託を、薪の山の上で確かめることになるでしょう。

3:44:1 そこで、わたしは不思議に思わずにいられません。最初に迷った者たちは、いったいどんな幻に引き回されて、人々に迷信を告げ知らせたのでしょうか。彼らは、呪われた悪霊を敬うよう、掟として定めたのです。それがあのフォロネウスであれ、メロプスであれ、ほかのだれであれ、です。彼らは、悪霊のために神殿と祭壇を建てました。そのうえ、最初に犠牲をささげたとも、神話で語られています。3:44:2 実際、人々は、時代を追って、後から神々をこしらえ、それを拝むようになりました。たとえば、このエロスは、神々のうちで最も古い者の一人と言われています。しかし、カルモスがある少年をものにして、アカデメイアに祭壇を建てるまで、だれ一人エロスを敬っていませんでした。カルモスは、欲望を遂げた感謝のささげ物として、祭壇を建てたのです。そして、人々は、この病の放縦をエロスと呼び、ふしだらな欲望を神に仕立てたのです。3:44:3 アテネの人々も、フィリッピデスが告げるまでは、パンがだれなのかさえ知りませんでした。ですから、迷信がどこかから始まり、愚かな悪の泉となったのは、当然のことです。そして、迷信は、せき止められず、かえって広がり、大いにあふれ出て、多くの悪霊を造り出す者となります。百牛の犠牲をささげ、祭りを催し、像を立て、神殿を建てるのです。3:44:4 その神殿は（これについても、わたしは黙っていないからです。そのうえ、これも暴いてみせます）、聞こえよく神殿と呼ばれていますが、実は墓となったものなのです。あなたがたは、墓を敬うことを恥じて、せめて今からでも迷信を忘れなさい。

3:45:1 ラリサでは、アクロポリスにあるアテナの神殿の中に、アクリシオスの墓があります。アテネでは、アクロポリスにケクロプスの墓があります。アンティオコスが『歴史』の第九巻で言うとおりです。エリクトニオスはどうでしょうか。町を守る女神アテナの神殿に葬られているではありませんか。エウモルポスとダエイラの子インマラドスは、アクロポリスのふもとにあるエレウシニオンの境内に葬られているではありませんか。ケレオスの娘たちは、エレウシスに葬られているではありませんか。3:45:2 ヒュペルボレオイ人のもとから来た女たちのことを、あなたに数え上げることがあるでしょうか。二人はヒュペロケとラオディケと呼ばれ、デロスのアルテミスの神殿に葬られています。その神殿は、デロスのアポロンの聖域の中にあります。また、レアンドリオスは言います。クレオコスが、ミレトのディデュマの神殿に葬られているというのです。3:45:3 ここで、レウコフリュネの墓所も見過ごすわけにはいきません。ミュンドスの人ゼノンにならってのことです。レウコフリュネは、マグネシアのアルテミスの神殿に葬られています。また、テルメッソスのアポロンの祭壇も見過ごせません。人々は、この祭壇もまた、予言者テルメッソスの墓所だと記しています。3:45:4 アゲサルコスの子プトレマイオスは、『フィロパトルについて』の第一巻で言っています。パポスのアフロディテの神殿に、キニュラスとキニュラスの子孫が葬られているというのです。3:45:5 しかし、あなたがたが拝んでいる墓を一つ一つたどっていけば、『わたしには、すべての時をもってしても足りないだろう』。あえて行っていることを恥じる心が、あなたがたに少しも忍び込まないとします。それなら、あなたがたは、まったく死んだ者として、死んだ者たちを信じて歩き回っているのです。『ああ、哀れな者たちよ、なんという災いを受けているのか。おまえたちの頭は、夜に包まれている』。

4章46〜49節　人の手で作られた像と、サラピス、アンティノオス

4:46:1 さらにこれに加えて、わたしが像そのものをあなたがたの前に持ち出し、よく見させたとします。そうすれば、あなたがたは、一つ一つ見ていくうちに、自分たちの習わしがまことにたわごとであることに気づくでしょう。あなたがたは、感覚のない『人の手のわざ』を拝んでいるのです（詩篇一一五・四）。4:46:2 さて、昔、スクテヤ人は短剣を、アラビヤ人は石を、ペルシャ人は川を拝んでいました。ほかの人々のうちでもさらに古い者たちは、よく目立つ木を立てて祭り、石で柱を立てていました。これらは、材料から削り出された（アペクセスタイ）ことのゆえに、彫像（クソアナ）とも呼ばれたのです。4:46:3 たとえば、イカロス島では、アルテミスの像は細工をしていない木でした。テスペイアのキタイロンのヘラの像は、切り倒した木の幹でした。サモスのヘラの像も、アエトリオスが言うように、はじめは板でした。後に、プロクレスが執政官であったときに、人の立像の形になったのです。彫像が人間に似せて作られるようになると、死すべき人間（ブロトイ）にちなんで、像（ブレテ）という呼び名を得ました。4:46:4 一方、ローマでは、昔、アレスの彫像は槍だったと、歴史家ウァロは言います。職人たちが、まだこの見ばえのよい悪しき技に走っていなかったころのことです。しかし、技が花開くと、迷いも育ちました。

4:47:1 さて、人々が石や木を、ひと言で言えば材料を、人の姿をした像に仕立てたことは、もうそれだけで明らかです。あなたがたは、その像に向かって敬虔を装い、真理を中傷しているのです。それでも、この題目はいくらかの証明を求めますから、証明を拒むべきではありません。4:47:2 さて、オリュンピアのゼウスと、アテネの町を守る女神アテナの像は、金と象牙でできています。それを造ったのがフェイディアスであることは、だれにでもおそらく明らかでしょう。一方、サモスのヘラの彫像は、エウクレイデスの子スミリスが作ったと、オリュンピコスが『サモス誌』の中で記しています。4:47:3 ですから、疑ってはなりません。アテネで尊い女神たちと呼ばれる神々のうち、二人はスコパスが、リュクネウスと呼ばれる石で作りました。二人のあいだの一人は、カロスが作りました。わたしは、そう記しているポレモンを、あなたに示すことができます。『ティマイオスへの反論』の第四巻です。4:47:4 また、ルキヤのパタラにあるゼウスとアポロンの像を、あのフェイディアスがまたもや作ったことも、疑ってはなりません。像とともに奉納されている獅子と同じように、フェイディアスが作ったのです。しかし、ある人々が言うように、それがブリュアクシスの技だとしても、わたしは異を唱えません。この人も、あなたにとって像作りの一人です。4:47:5 二人のうち、好きなほうの名を、像に刻みなさい。さらに、テノスでは、高さ四メートルほどのポセイドンとアンフィトリテの像が拝まれています。フィロコロスが言うように、これはアテネの人テレシアスの作です。実際、デメトリオスは『アルゴリス誌』の第二巻で、ティリュンスのヘラの彫像について書き記しています。材料は梨の木で、作り手はアルゴスだというのです。4:47:6 天から落ちたと言われるパラディオンがあります。ディオメデスとオデュッセウスがトロイアから盗み出し、デモフォンに預けたと伝えられているものです。このパラディオンが、ペロプスの骨から造られたと知れば、多くの人はおそらく驚くでしょう。ちょうど、オリュンピアのゼウスの像が、別の骨、つまりインドの獣の骨から造られたのと同じです。そして、わたしは、これを記しているディオニュシオスを証人に立てます。『叙事詩の環』の第五部です。4:47:7 また、アペラスは『デルポイ誌』の中で言います。パラディオンは二つあり、どちらも人間が作ったというのです。しかし、わたしがこれらのことまで知らずに見過ごしたと、だれにも思われないようにしましょう。そこで、アテネにあるモリュコスのディオニュソスの像のことも述べておきます。その像はフェラタと呼ばれる石でできていて、エウパラモスの子シコンの作だというのです。ポレモンが、ある手紙の中で言っているとおりです。4:47:8 また、ほかにも二人の彫刻家がいました。クレテ人だったと思います（スキュリスとディポイノスという名でした）。この二人は、アル

ゴスのディオスクロイの像を造りました。また、ティリュンスのヘラクレスの立像と、シキュオンのムニュキアのアルテミスの彫像も造りました。

4:48:1 それにしても、なぜわたしは、こうしたことにかかずらっているのでしょうか。あの大いなる悪霊その者が何者であったかを、あなたがたに示すことができるのにです。わたしたちが聞くところでは、この者は、とりわけすべての人から敬われるにふさわしいとされています。人々は、これを手で造られないものだとさえ、あえて言いました。エジプトのサラピスのことです。4:48:2 実際、ある人々は、こう記しています。サラピスは、シノペの人々から感謝のささげ物として送られたというのです。送られた相手は、エジプト人の王プトレマイオス・フィラデルフォスです。このプトレマイオスは、シノペの人々が飢えに苦しみ、エジプトから穀物を取り寄せたとき、彼らを立ち直らせたのです。そして、この彫像はプルトンの像だったというのです。プトレマイオスは、この立像を受け取ると、高台の上に据えました。今ではラコティスと呼ばれているところで、そこでは、サラピスの聖域も敬われています。その一帯は、あの場所と隣り合っています。また、プトレマイオスは、カノボスで死んだ側女ブリスティケを移し、先に述べた聖所の下に葬りました。4:48:3 一方、ほかの人々は、サラピスはポントの像であり、盛大な祭りの礼をもってアレキサンドリヤへ移されたと言います。イシドロスだけは、その像はアンテオケのそばのセルキヤの人々のもとから移されたと言います。この人々も穀物の不足に陥り、プトレマイオスに養われたというのです。4:48:4 しかし、サンドンの子アテノドロスは、サラピスを古いものに見せようとして、どんな羽目に陥ったのか、わたしにはわかりません。サラピスが造られた像であることを、自分で暴いてしまったのです。彼は言います。エジプトの王セソストリスは、ギリシヤ人のあいだにいる民族の大半を従えました。そして、エジプトに戻ると、腕のいい職人たちを連れて来たというのです。4:48:5 そこで、王は、自分の先祖オシリスをぜいたくに飾り立てて造るよう、職人たちに命じます。それを造るのは、工匠ブリュアクシスです。あのアテネの人ではなく、あのブリュアクシスと同じ名の、別の人です。この人は、作るのに、混ぜ合わせたさまざまな材料を使います。金と銀と銅と鉄と鉛、さらに錫のやすりくずも持っているからです。エジプトの石も一つとして欠けてはいません。サファイヤと血石の破片、緑玉、さらには黄玉石のかけらもあるのです。4:48:6 そして、すべてを砕いてなめらかにし、混ぜ合わせて、紺青で色をつけます。そのために、像の色はやや黒いのです。さらに、オシリスとアピスの葬儀で残った薬で、すべてを練り合わせて、サラピスを形づくります。サラピスという名も、葬儀を共にしたことと、葬りから作られたことを、謎めかして示しています。オシリスとアピスを合わせて、オシラピスという名になったのです。

4:49:1 また、ローマ人の皇帝は、自分が愛した若者を、新しい別の神としてうやうやしく祭り上げました。たいへん美しかった若者です。エジプトでのことですが、ギリシヤ人のあいだでも、ほとんどそうなっています。皇帝は、ゼウスがガニュメデスにしたように、アンティノオスを神として聖別しました。恐れを持たない欲望は、たやすくは止められないからです。そして、今、人々はアンティノオスの聖なる夜を拝んでいます。しかし、その夜が恥ずべきものであることを、彼と共に夜を明かし、彼を愛した皇帝は知っていたのです。4:49:2 どうして、淫行によって敬われるようになった者を、わたしに神として数え上げるのですか。どうして、息子のように嘆き悲しむよう命じたのですか。どうして、その美しさを語り聞かせるのですか。辱めによってしおれた美しさは、恥ずべきものです。人よ、美しさに暴君としてふるまってはなりません。花盛りの若者を辱めてはなりません。美しさを清いまま保ちなさい。美しくあるためです。美しさの王となりなさい。暴君となってはなりません。美しさには、自由なままでいてもらいましょう。そのときこそ、わたしはあなたの美しさを認めましょう。あなたがその姿を清く保ったときにです。そのときこそ、わたしは美しさを拝みましょう。それが美しいものたちのまことの原型であるときにです。4:49:3 すでに、その愛された若者の墓があります。アンティノオスの神殿と町があります。思うに、神殿と同じように、墓もまたあがめられているのです。ピラミッドも、霊廟も、迷宮もそうです。これらは死者たちの、もう一つの神殿です。ちょうど、あの神殿が、神々の墓であるのと同じです。

4章 50〜53節　感覚のない像と、神殿を焼く火

4:50:1 あなたがたには、教師として、女預言者シビュラを引き合わせましょう。『偽りのポイボスの託宣を語る者ではない。むなしい人々は、ポイボスを神と呼び、予言者だと偽って言った。そうではなく、大いなる神の託宣を語る者である。その神は、人の手が、ものを言わない、石を刻んだ偶像に似せて造ったものではない』。4:50:2 このシビュラこそ、神殿を廃墟と呼んでいます。エペソのアルテミスの神殿については、『地の裂け目と地震』によって呑み込まれると、次のように予告しています。『エペソは、あおむけに倒れて、岸辺で泣きながら嘆くだろう。もはや住む者のない神殿を探し求めて』。4:50:3 一方、エジプトのイシスとサラピスの神殿については、倒され、焼かれると言います。『三度みじめな女神イシスよ、おまえはナイルの流れのほとりに、ひとりとどまっている。アケロンの砂の上で、ものを言わない狂乱の女として』。それから、先へ進んで言います。『サラピスよ、多くのむだな石を身に載せたおまえも、横たわっている。三度みじめなエジプトで、このうえなく大きな残骸となって』。4:50:4 しかし、あなたが女預言者に耳を傾けないなら、せめて、あなた自身の哲学者、エペソのヘラクレイトスに聞きなさい。彼は、像に感覚がないことをなじって、こう言います。『そして、人々はこれらの像に祈る。まるで家と世間話をするようなものだ』。4:50:5 実際、石を拝む人々は奇怪ではありませんか。しかも、その石を、働く力のあるもののように、扉の前に立てているのです。ヘルメスを神として拝み、アギュイエウスを門番として立てています。感覚のないものとして侮るなら、なぜ神として拝むのですか。感覚を持っていると思うなら、なぜ門番に立てるのですか。

4:51:1 ローマ人は、最も大きな功績を幸運の女神テュケにささげ、テュケを最も偉大な女神と考えました。それなのに、テュケを運んで、肥だめにささげたのです。便所を、女神にふさわしい神殿として割り当てたわけです。4:51:2 しかし、感覚のない石や木や、豪奢な金は、何ひとつ気にかけません。犠牲の脂の匂いも、血も、煙も気にかけないのです。その煙で、像は敬われ、いぶされて、黒くすすけるのです。誉れも侮りも気にかけません。像は、どんな生き物よりも値打ちのないものです。4:51:3 感覚のないものが、どうして神として祭り上げられたのか。わたしは途方に暮れます。そして、迷っている人々を、その愚かさのゆえに、哀れな者としてあわれみたくなります。生き物の中には、すべての感覚を持っているわけではないものもあります。うじ虫や毛虫がそうです。また、生まれたそのときから、体に欠けがあると見えるものもあります。もぐらや、ニカンドロスが『目が見えず、恐ろしい』と言うとがりねずみがそうです。4:51:4 それでも、これらの生き物は、ここにある、まったく物言わぬ彫像や像よりはましだからです。何か一つは感覚を持っているのです。たとえば、聞く感覚や触る感覚、あるいは嗅ぐことや味わうことにあたる感覚です。4:51:5 ところが、像は、ただ一つの感覚さえ持っていません。また、生き物の中には、目も見えず、耳も聞こえず、声も出せないものが多くあります。たとえば、牡蠣の類がそうです。それでも、生きて大きくなり、そのうえ月と感応します。一方、像は、働かず、何もせず、感覚もありません。縛りつけられ、釘で打ちつけられ、固定され、溶かされ、やすりをかけられ、のこぎりで切られ、まわりを削られ、刻まれるのです。4:51:6 像作りたちは、物言わぬ土を辱めています。土をその本来の性質から引き離し、技によって、人々を説き伏せて拝ませているのです。神々を作る者たちが拝んでいるのは、わたしの感じるところでは、神々でも悪霊でもありません。土と技、つまり像の正体です。像とは、まことに、職人の手によって形を与えられた死んだ材料だからです。しかし、わたしたちにとって、像とは、感覚でとらえられる材料からできた、感覚でとらえられるものではありません。思いでとらえられるものです。思いでとらえられ、感覚でとらえられないもの、それが神、ただひとりのまことの神です。

4:52:1 また逆に、迷信深い人々、石を拝む人々は、まさに窮地に立ったとき、身をもって学びます。感覚のない材料を敬ってはならないことをです。必要そのものに負けて、迷信のために身を滅ぼすのです。それでも、像を軽んじていながら、まったく見下していることが明らかになるのは望みません。そして、像がその名を冠している神々そのものによって、暴かれるのです。4:52:2 実際、僭主の小ディオニュシオスは、シチリアで、ゼウスの金の衣をはぎ取り、羊毛の衣を着せるよう命じました。そして、気の利いた口ぶりで、こちらのほうが金の衣よりよい、夏には軽く、冬には暖かいから、と言ったのです。4:52:3 また、キュジコスの人アンティオコスは、資金に困って、高さ七メートルほどのゼウスの金の像を溶かすよう命じました。そして、ほかの、もっと値打ちのない材料で、それによく似た像を作り、金箔をかぶせて、改めて奉納させたのです。4:52:4 また、つばめや、たいていの鳥は、中へ飛び込んで、像そのものに糞をかけます。鳥たちは、オリュンピアのゼウスも、エピダウロスのアスクレピオスも少しも気にかけません。町を守る女神アテナも、エジプトのサラピスも同じです。あなたがたは、その鳥たちからさえ、像に感覚がないことを学ばないのです。4:52:5 もっとも、悪事を働く者や、攻め寄せる敵もいます。彼らは、恥ずべき利をむさぼる心のゆえに、聖域を荒らし、奉納物を奪い、像そのものを溶かしさえしました。4:52:6 また、カンビュセスのような者やダリヨス、あるいはほかの狂った者が、そうしたことを企てたとします。だれかが、エジプトのアピスを殺したとします。わたしは、その者がエジプト人の神を殺したことは笑います。しかし、利得のために罪を犯したのなら、憤ります。

4:53:1 ですから、わたしは、この悪事のことは進んで忘れることにします。貪欲のしわざであって、偶像の無力を暴くものではないと考えてのことです。しかし、火と地震は、利得をむさぼりはしません。また、悪霊も像も恐れず、はばかりもしません。浜辺に積み重なった小石を、波が恐れないのと同じです。4:53:2 わたしは、迷信を暴き、いやす火を知っています。あなたが愚かさをやめたいなら、その火があなたを光へ導くでしょう。この火は、アルゴスの神殿を、巫女クリュシスもろとも焼き尽くしました。また、エペソのアルテミスの神殿を、アマゾンたちの後に二度目になめ尽くし、ローマのカピトリウムを何度もなめ尽くしました。アレキサンドリヤの町にあるサラピスの聖域も、免れませんでした。4:53:3 実際、アテネでは、エレウテレウスのディオニュソスの神殿を倒しました。デルポイのアポロンの神殿は、まずつむじ風がさらい、その後、分別のある火が消し去りました。火は、これを、自分が約束していることの序曲として、あなたに見せているのです。4:53:4 では、像の作り手たちは、あなたがたのうちの思慮ある人々を恥じ入らせて、材料を軽んじるようにさせるではありませんか。アテネの人フェイディアスは、オリュンピアのゼウスの指に、『パンタルケスは美しい』と刻みました。彼にとって美しかったのはゼウスではなく、彼が愛した若者だったからです。4:53:5 プラクシテレスについては、ポセイディッポスが『クニドについて』で明らかにしています。プラクシテレスは、クニドのアフロディテの像を造るとき、自分の愛した女クラティネの姿に似せて作りました。哀れな人々が、プラクシテレスの愛した女を拝むことができるようにするためです。4:53:6 テスピアイの遊女フリュネが盛りであったころ、画家たちはみな、アフロディテの像を、フリュネの美しさに似せて描きました。石工たちが、アテネのヘルメスの像を、アルキビアデスに似せて刻んだのと同じです。残っているのは、あなたが自分の判断で決めることです。遊女たちまで拝みたいのかどうかを、です。

4章 54〜57節　神を名のった人々と、像に欺かれる者たち

4:54:1 思うに、昔の王たちは、こうしたことに動かされたのです。彼らはこうした神話を侮り、人々から危険が及ばないことのゆえに、はばかりなく自分を神と名のりました。そうして、かの神々もまた、名声のゆえに不死の者とされたのだと教えたのです。アイオロスの子ケユクスは、妻のアルキュオネからゼウスと呼ばれました。一方、アルキュオネは、今度は夫からヘラと呼ばれたのです。4:54:2 プトレマイオス四世は、ディオニュソスと呼ばれていました。ポントのミトリダテスも、ディオニュソスと呼ばれました。また、アレクサンドロスも、アンモンの子だと思われたがり、像作りたちに角を生やした姿で造らせようとしました。人の美しい顔を、角で辱めようと急いだのです。4:54:3 王たちだけではありません。私人までもが、神々の呼び名で自分を尊いものに見せました。医者のメネクラテスがそうで、この男はゼウスと呼ばれていました。アレクサルコスのことを、どうしてわたしが数え上げる必要があるでしょうか（この男は学問としては文法家でした。サラミスの人アリストスが伝えるとおり、自分を太陽の神ヘリオスの姿に仕立てていました）。4:54:4 ニカゴラスのことも、どうして触れる必要があるでしょうか（彼は生まれはゼレイアの人で、アレクサンドロスの時代の者でした。このニカゴラスはヘルメスと呼ばれ、ヘルメスの装いを身に着けていました。本人が証言しているとおりです）。4:54:5 なにしろ、民族がまるごと、町が住民もろとも、へつらいに身を包んで、神々についての神話を安っぽいものにしているのです。人間でありながら、自分たちを神に等しい者に仕立て、名誉心にふくれ上がり、途方もない栄誉を自分たちに票決しています。あるときは、ペラ出身のマケドニヤ人、アミュンタスの子フィリッポスを、キュノサルゲスで拝むよう法で定めました。『鎖骨を折り、脚を損なった』男、片目をえぐり取られた男をです。またあるときは、デメトリオスも神と宣言しました。4:54:6 デメトリオスは、アテネに入るとき、ある場所で馬から降りました。そこには「降り立つ者」デメトリオスの聖域があり、祭壇はいたるところにあります。また、アテネの人々は、彼のためにアテナとの結婚を支度しました。しかし、像とは結婚できない彼は、女神のほうは見下しました。一方、遊女ラミアを連れてアクロポリスに上り、アテナの寝屋で戯れました。年老いた処女に、若い遊女の姿態を見せつけたのです。

4:55:1 それなら、ヒッポンが自分の死を不死に仕立てたのも、とがめるには及びません。このヒッポンは、自分の墓所に次の碑銘の詩を刻むよう命じました。『これはヒッポンの墓。死んだ彼を、運命の女神モイラは、不死の神々に等しい者とした』。見事です、ヒッポンよ。あなたは人間の迷いを、わたしたちに示してくれます。人々が、生きて話していたあなたを信じなかったとしても、死者の弟子にはなりなさい。4:55:2 これがヒッポンの託宣です。その意味を考えてみましょう。あなたがたのもとで拝まれている者たちは、かつては人間であり、それから死んだのです。彼らを敬われる者にしたのは、神話と時です。目の前にあるものは、慣れのために侮られるのが常だからです。一方、過ぎ去ったものは、その場で暴かれることから遠く離れています。そして、時を経てはっきりしなくなったために、作りごとによって敬われます。そして、前のものは信じられず、後のものは驚嘆までされるのです。4:55:3 現に、昔の死者たちは、長い迷いの時のおかげで尊ばれ、後の人々から神々と見なされています。その証拠は、あなたがた自身の秘儀と祭りです。縛めと傷と、涙を流す神々です。『ああ、わたしは悲しい。人々のうちでわたしの最も愛するサルペドンが、メノイティオスの子パトロクロスに討たれる定めとは』。4:55:4 ゼウスの意志は打ち負かされ、あなたがたのゼウスは、サルペドンのゆえに、負けて嘆いています。現に、あなたがた自身が、彼らを幻影と呼び、ダイモンと呼んできました。もっともなことです。ホメロスも、アテナその人やほかの神々を、悪しざまに敬って、ダイモンと呼んだのですから。『彼女はオリュンポスへ、アイギスを持つゼウスの館へ、ほかのダイモンたちのもとへ去っていた』。4:55:5 それなら、どうして幻影やダイモンが、

まだ神々なのでしょうか。それらは、まことに忌まわしい汚れた霊です。だれもが認めるとおり、土のもので、汚らわしく、下へ沈み、『墓と墓所のまわりをさまよう』ものです。そのまわりには、『影のような幻』も、かすかに現れます。4:56:1 これが、あなたがたの神々です。幻影であり、影です。そのうえ、あの『足の萎えた』、『しわだらけで、両の目がやぶにらみの』祈りの女神リタイたちです。ゼウスの娘というより、テルシテスの娘たちです。ですから、わたしには、ビオンが気の利いたことを言ったと思えます。ゼウスは自分にさえ良い子を恵めなかった。それなのに、どうして人々が、良い子に恵まれることをゼウスに正当に願えるだろうか、と言ったのです。4:56:2 ああ、なんという無神論でしょう。あなたがたは、損なわれることのない実体を、あなたがたの力の及ぶ限り、地に埋めています。あの汚れのない、聖なるものを、墓に葬って土をかぶせています。神なるものから、まことに真に存在する実体を奪い取ったのです。4:56:3 では、なぜ、神に属する誉れを、神でないものに分け与えたのですか。なぜ、天を捨てて、地を敬ったのですか。金や銀、鋼や鉄、青銅や象牙、宝石は、ほかの何だというのでしょうか。土であり、土から出たものではありませんか。あなたが見ているこれらのものはみな、ただ一つの母、大地から生まれたものではありませんか。4:56:4 では、むなしく、愚かな人々よ（もう一度繰り返して言いますから）、なぜ、天のかなたの場所を冒涜し、敬虔を地べたに引きずり下ろしたのですか。あなたがたは、地の神々を自分のために造り上げたのです。なぜ、生じたのではない神をさしおいて、これらの生じたものを追い求めて、いっそう深い闇に落ち込んだのですか。4:56:5 パロスの石は美しいものです。しかし、まだポセイドンではありません。象牙は美しいものです。しかし、まだオリュンピアのゼウスではありません。材料は、いつも技を必要とします。しかし、神は何も必要としません。技が進み出て、材料は形をまといます。そして、材料の豊かさは、利得の面では売り物になります。一方、拝まれるものになるのは、ただ形によってです。4:56:6 あなたの像は金です。木です。石です。さかのぼって考えるなら、土です。職人から形を受け取った土です。しかし、わたしは、土は踏むものと心得ていて、拝むものとは心得ていません。魂の望みを、魂のないものに託すことは、わたしには決して許されていないからです。

4:57:1 ですから、できるだけ像のすぐそばまで行ってみなければなりません。迷いが像に固有のものとして、見た目からも暴かれるためです。像の姿には、悪霊たちの性質が、まことにはっきりと刻みつけられているからです。4:57:2 そもそも、だれかが絵や像を見て回るなら、あなたがたの神々を、その恥ずべき姿から、すぐに見分けるでしょう。ディオニュソスはその衣から、ヘファイストスはその技から、デオはその災いから見分けます。イノはその頭布から、ポセイドンは三叉の矛から、ゼウスは白鳥から見分けます。ヘラクレスは、火葬の薪の山が示します。また、裸の女が描かれているのを見れば、『黄金の』アフロディテだと思うのです。4:57:3 こうして、あのクプロの人ピュグマリオンは、象牙の像に恋をします。その像はアフロディテの像で、裸です。クプロの人は、その姿に負けて、像と交わります。このことはフィロステファノスが伝えています。また、クニドには別のアフロディテがあります。石の像で、美しいものです。ある別の人がこれに恋をして、その石と交わります。これはポセイディッポスが伝えています。前の話はフィロステファノスが『クプロについて』で、後の話はポセイディッポスが『クニドについて』で伝えています。技は、恋に駆られる人々を奈落へ導くとりもち役となり、これほどまでに欺く力を持ったのです。4:57:4 作る技には、たしかに力があります。しかし、理性あるものを欺くことはできません。理性に従って生きてきた人々も欺けません。実際、絵がよく似ているゆえに、陰影で描かれた鳩に野鳩が飛び寄り、見事に描かれた雌馬に馬がいななきかけました。ある娘が絵姿に恋をし、ある美しい若者がクニドの像に恋をしたと言われています。しかし、見る人たちの目が、技に欺かれていたのです。4:57:5 正気の人なら、女神と抱き合ったりはしないからです。死んだ女と一緒に葬られたり、悪霊と石に恋をしたりもしません。一方、技は、あなたがたを別の魔術で欺きます。恋へと導くのではないにしても、像や絵を敬い、拝むようにと導くのです。4:57:6 絵は、たしかによく似ています。技はほめるとしましょう。しかし、技が、真理であるかのように人を欺いてはなりません。馬は静かに立っています。野鳩は動かず、その翼は止まったままです。一方、木で作られたダイダロスの牝牛は、野生の牡牛をとらえました。技は獣を欺いて、恋する女の上に乗らせたのです。

4章58〜63節　恥ずべき絵と、天を造られた神

4:58:1 技は、悪しき技をふるって、愚かな人々にこれほどの狂おしい熱を吹き込んだのです。しかし、猿を飼って世話する人たちは、猿に感心してきました。蠟や粘土で作った似姿や、娘たちの人形のどれにも、猿は欺かれないからです。一方、あなたがたは、石や木や金や象牙の小さな像や、絵に心を寄せて、猿よりも劣った者になるのです。4:58:2 あなたがたのために、このような有害な玩具を作るのは、石工、彫刻家、また画家、大工、詩人たちです。彼らは、多くの、このような群れを持ち込んでいます。野にはサテュロスたちとパンたちを持ち込みます。森には、山のニンフのオレイアスたちと、木のニンフのハマドリュアスたちを持ち込みます。そればかりか、水辺や川や泉には水のニンフのナイアスたちを、海には海のニンフのネレイスたちを持ち込むのです。4:58:3 魔術師たちは、すでに悪霊たちを、自分たちの不敬虔の手下だと誇っています。悪霊たちを自分の召し使いの名簿に書き入れ、まじないによって無理やり奴隷にしたのです。さらに、神々の結婚や子作りや出産が語り伝えられ、姦淫が歌われます。宴が喜劇に仕立てられ、酒の席の笑いが舞台に持ち込まれます。これらは、わたしが黙っていたくても、叫び声を上げるようにと、わたしに勧めるのです。4:58:4 ああ、なんという無神論でしょう。あなたがたは、天を舞台にしました。神なるものは、あなたがたにとって劇になったのです。あなたがたは、聖なるものに悪霊たちの仮面をかぶせて、喜劇にしました。真の神を敬うことを、迷信によってサテュロス劇に仕立てたのです。

4:59:1 『ところが、彼は竪琴を奏でながら、美しく歌い始めた』。ホメロスよ、その美しい歌声を、わたしたちに歌って聞かせなさい。『アレスと、美しい冠のアフロディテの恋を。二人がヘファイストスの館で、初めてひそかに交わったさまを。彼は多くの贈り物をし、王なるヘファイストスの寝床と閨を辱めた』。4:59:2 ホメロスよ、その歌をやめなさい。その歌は美しくありません。姦淫を教えています。わたしたちは、耳で淫行を犯すことさえ、拒んできました。わたしたちこそが、そうです、わたしたちこそが、神のかたちを携えているからです。この生きて動く像、すなわち人のうちに携えているのです。そのかたちは、わたしたちとともに住み、ともに思いをめぐらし、ともに語らいます。炉をともにし、ともに苦しみ、わたしたちのために苦しむのです。わたしたちは、キリストのために、神へのささげ物となりました。4:59:3 『わたしたちは、選ばれた種族、祭司の国、聖なる国民、宝の民である。以前は神の民でなかったが、いまは神の民である』（第一ペテロ二・九〜一〇）。わたしたちは、ヨハネの言うとおり、『下から出た者』ではありません（ヨハネ八・二三）。上から来られた方から、すべてを学んだ者です。神のご計画を悟った者、『新しいいのちに生きる』ことを修練してきた者です（ローマ六・四）。

4:60:1 しかし、多くの人々は、このように考えてはいません。恥じらいと恐れを投げ捨てて、家の中に、悪霊たちの倒錯した情欲を描かせています。現に、彼らは放縦にふけって、少し高いところに掛けた何枚かの絵の板で、寝室を飾りました。ふしだらを敬虔だと思い込んでいるのです。4:60:2 彼らは寝台に横たわり、抱き合っているさなかにも、あの裸のアフロディテを見つめます。交わりのうちに縛られたアフロディテです。また、彼らは女々しさを描いた絵を喜んで受け入れ、レダのまわりを飛び回る、あの恋の鳥を、指輪の石に彫らせます。ゼウスのふしだらにふさわしい印章を使っているのです。

4:61:1 これが、あなたがたの快楽の原型です。これが、乱行の神学であり、あなたがたとともに淫行する神々の教えです。アテネの弁論家の言うとおり、『人はそれぞれ、自分の望むことを、そのとおりだと思い込む』からです。また、あなたがたのほかの像も、なんというものでしょう。小さなパンたち、裸の娘たち、酔ったサテュロスたち、張りつめた部分です。それらは、絵によって裸にされ、その放縦によって暴かれています。4:61:2 あなたがたは、すでにおおっぴらに、あらゆるふしだらの姿態が描かれたものを、町じゅうで眺めていながら、恥じま

せん。それどころか、それらを掛けたまま、いっそう大切に守っています。まるで、あなたがたの神々の像を守るようにです。家に恥知らずの碑を奉納し、フィライニスの姿態を、ヘラクレスの功業と同じように描かせているのです。4:61:3 わたしたちは、これらのものを使うことだけでなく、見ることも、聞くことさえも、忘れるようにと告げ知らせます。あなたがたの耳は遊女となり、目は淫行を犯しました。そして、何より新しいことに、あなたがたのまなざしは、抱き合う前から姦淫を犯してしまったのです。4:61:4 人に暴力をふるい、造られたものの内にある神的なものを、辱めて打ち砕いた人々よ。あなたがたは、情欲のままにふるまうために、何もかも信じないのです。その放縦にあこがれて、偶像は信じます。一方、慎みに耐えられずに、神は信じません。また、よりすぐれたものを憎み、より劣ったものを敬ってきました。徳については観客となり、悪徳については競い手となったのです。

4:62:1 ですから、シビュラの言うとおり、『さいわい』なのは、いわば心を一つにした、あの人々すべてだけです。『その人々は、神殿をすべて見て否み、祭壇も否むであろう。それらは物言わぬ石を、むなしく据えたものにすぎない。石の彫像も、手で作った像も否むであろう。それらは、生きものの血と、四つ足と二本足の犠牲、鳥と獣の殺戮によって汚されている』。4:62:2 実際、わたしたちには、人を欺く技を行うことが、はっきりと禁じられています。預言者がこう言っているからです。『あなたは、上は天にあるもの、下は地にあるものの、どんな形をも造ってはならない』（出エジプト二〇・四）。4:62:3 プラクシテレスのデメテルとコレ、秘儀のイアッコスを、どうしてわたしたちが、なおも神々と見なすでしょうか。リュシッポスの技や、アペレスの手を、神々と見なすことがあるでしょうか。それらの手こそ、神だと思わせる形を、材料にまとわせたのです。しかし、あなたがたは、立像ができるかぎり美しく造られるようにと、ひたすら励んでいます。一方、あなたがた自身が、感覚がないことのゆえに立像と同じ者にならないようにとは、気を配りません。4:62:4 現に、預言の言葉は、まことにはっきりと、簡潔に、この習わしを暴いています。『もろもろの民のすべての神は悪霊の偶像である。しかし神はもろもろの天を造られた』（詩篇九六・五）と言うのです。天にあるものも、神が造られました。

4:63:1 現に、ある人々は、どういうわけか、ここから迷い出ています。彼らは、神の技ではあっても、神ではないものを拝んでいます。太陽と月と、ほかの星々の合唱隊です。時の道具であるそれらを、筋の通らないことに、神々と見なしているのです。『それらは神のみことばによって堅く据えられ、その万軍はみな、神の口の息によって据えられたからである』（詩篇三三・六）。4:63:2 人の技は、家や船や町や絵を作ります。しかし、神がどれほどのものを造られるかを、どうしてわたしに言い表せるでしょうか。世界全体を見なさい。それは神のみわざです。天も太陽も、御使いたちも人々も、『神の指のわざ』です（詩篇八・三）。4:63:3 神の力は、なんと大きいことでしょう。神のみこころだけで、世界が造られます。神だけが造られたからです。神だけが、真に神であられるのですから。神は、ただ望まれるだけで造られます。神がただお望みになれば、そのとおりに生じるのです。4:63:4 ここで、哲学者たちの一団は道をそれます。彼らは、人が天を眺めるために、見事に造られていると認めます。それなのに、天に現れて目にとらえられるものを拝むのです。天にあるわざは、人のわざではないにしても、人のために造られたものだからです。4:63:5 あなたがたのうちのだれも、太陽を拝んではなりません。そうではなく、太陽を造られた方を慕い求めなさい。だれも、世界を神としてあがめてはなりません。そうではなく、世界を造られた方を探し求めなさい。どうやら、救いの門にたどり着こうとする者に残された逃れ場は、ただ一つ、神の知恵だけのようです。救いへと急ぐ人は、ここにいれば、不可侵の聖域に守られるように、もはやどの悪霊にも連れ去られなくなるのです。

5章　哲学者たちが神としたもの

5:64:1 では、あなたがよければ、哲学者たちが神々について誇っている説にも、ざっと目を通してみましょう。もしかすると、哲学そのものも、虚栄のために物質を偶像に仕立てていることが、見つかるかもしれません。あるいは、ついでに、哲学がある種の悪霊どもを神としてあがめ、真理を夢うつつに見ていることを、示せるかもしれません。5:64:2 さて、元素をたたえて、それを始原として残した人々がいます。ミレトの人タレスは水を、同じくミレトの人アナクシメネスは空気をです。後に、アポロニアの人ディオゲネスがこれに従いました。一方、エレアの人パルメニデスは、火と地を神々として持ち込みました。その二つのうち、火だけを神と見なしたのは、メタポンティオンの人ヒッパソスと、エペソのヘラクレイトスです。実際、アクラガスの人エンペドクレスは、数の多さに陥りました。この四つの元素に加えて、争いと愛を数え入れているのです。5:64:3 まことに、この人々も無神論者です。知恵のない、ある種の知恵によって、物質を拝んだのです。石や木はあがめませんでしたが、それらの母である地を、神としてあがめました。ポセイドンの像を形作りはしませんが、水そのものを拝んでいるのです。5:64:4 実際、ポセイドンとは、いったい何でしょうか。飲むこと（ポシス）からその名ができた、何か湿った実体ではありませんか。それはちょうど、戦好きのアレスが、取り去ること（アルシス）と滅ぼすこと（アナイレシス）から名づけられたのと同じです。5:64:5 それゆえにこそ、多くの人々は、ただ剣だけを地に突き立て、それをアレスに見立てて犠牲をささげるのだと思えます。これはスクテヤ人の習わしです。エウドクソスが『大地の周遊記』第二巻で言っているとおりです。また、スクテヤ人のうちのサウロマタイ人は、短剣を敬っています。ヒケシオスが『秘儀について』で言っているとおりです。5:64:6 ヘラクレイトスの一派が、火を原初のものとして敬っているのも、まさにこれと同じことです。この火を、ほかの人々はヘファイストスと名づけたからです。

5:65:1 ペルシャ人の魔術師たちは、火をあがめてきました。アジヤに住む人々の多くも、さらにマケドニヤ人も同じです。ディオゲネスが『ペルシャ誌』第一巻で言っているとおりです。サウロマタイ人のことまで、なぜわたしが数え上げなければならないでしょうか。ニュンフォドロスは『異民族の慣習』で、この人々が火を敬うと伝えています。ペルシャ人やメジヤ人や魔術師たちのことも、数え上げるまでもありません。ディノンは、この人々が野天で犠牲をささげると言っています。火と水だけが神々の像だと考えてのことです。5:65:2 わたしは、この人々の無知も、隠し立てはしませんでした。この人々は、迷いからできるかぎり逃れていると思っていても、別の欺きへと滑り落ちているからです。この人々は、ギリシヤ人のように、木や石を神々の像と考えることはしません。エジプト人のように、トキやイクネウモンを像と考えることもしません。そうではなく、哲学者たちのように、火と水を像と考えているのです。5:65:3 しかし、長い年月の巡りを経て、この人々は人の形をした像を敬うようになりました。ベロッソスが『カルデヤ誌』第三巻で、そう示しています。それを持ち込んだのは、オコスと呼ばれたダリヨスの子、アルタシャスタでした。この王が初めて、アナイティスのアフロディテの像を立てました。バビロンとスサとエクバタナ、ペルシャとバクトラ、ダマスコとサルデスに立てて、それを敬うように教えたのです。5:65:4 ですから、哲学者たちは、ペルシャ人やサウロマタイ人や魔術師たちを、自分たちの師と認めなさい。その人々から、自分たちが始原をあがめるという無神論を学んだのです。哲学者たちは、すべてを治める方を知りません。万物の作り主であり、始原そのものを造られた方、始まりを持たない神を知らないのです。そして、人間に仕えるために造られた、使徒の言う『貧弱』で『無力な』この『もろもろの元素』を拝んでいます（ガラテヤ四・九）。

5:66:1 ほかの哲学者たちのうち、元素を越えて、何かもっと高く、並外れたものを詮索した人々がいます。そのうちのある人々は、無限なものをたたえました。

アナクシマンドロス（ミレトの人でした）、クラゾメナイの人アナクサゴラス、アテネの人アルケラオスです。アナクサゴラスとアルケラオスは、二人とも、無限なものの上に知性を据えました。一方、ミレトの人レウキッポスとキヨスの人メトロドロスも、どうやら二つの始原を残したようです。満ちたものと、空虚です。5:66:2 アブデラの人デモクリトスは、この二つを受け継いで、像を付け加えました。実際、クロトンの人アルクマイオンは、星々を魂のあるものとして、神々だと考えていました。わたしは、この人々の恥知らずを黙ってはいません。クセノクラテス（この人はカルケドンの人です）は、七つの惑星が神々であり、すべての恒星から成る世界が八番目の神であると、ほのめかしています。5:66:3 ストア派の人々のことも、素通りはしません。彼らは、神的なものが、あらゆる物質を、最も卑しい物質までも貫いていると言います。この人々は、まったく哲学を辱めています。5:66:4 ここまで来たのですから、ペリパトス派の人々に触れるのも、難しくはないと思います。この学派の父は、万物の父を悟らずに、『いと高き者』と呼ばれるものを、宇宙の魂だと考えています。つまり、世界の魂を神と見なして、自分で自分を突き刺しているのです。月のところまでで摂理を区切っておきながら、そのうえで世界を神と考える者は、自分の説をひっくり返すことになるからです。神にあずからないものを、神だと説いているのです。5:66:5 一方、エレソスの人で、アリストテレスの弟子のあのテオフラストスは、神を、あるときは天、あるときは霊と推し量ります。実際、エピクロスだけは、わたしは進んで忘れることにします。彼は、神には何ひとつ気にかかることがないと考える人で、何から何まで不敬虔です。ポントの人ヘラクレイデスはどうでしょうか。彼もまた、デモクリトスの像へと引きずり下ろされていないところが、どこにあるでしょうか。

6章　真理をほのめかした哲学者たち

6:67:1 このような群れが、どっとわたしに押し寄せてきます。子供をおどす化け物のように、見慣れない悪霊どもの奇妙な影絵を持ち込み、老婆のたわごとで神話を語るのです。大人に、このような話を聞くことを許すなど、とんでもないことです。わたしたちは、自分の子供たちでさえ、神話を語ってなだめるようなことはしません。ことわざに言うとおり、泣きじゃくっているときでもです。子供たちといっしょに、無神論まで育ててしまうことを恐れているのです。その無神論を言いふらしているのは、賢いと思い込んでいるこの人々です。この人々は、真理を知ることにかけては、幼子と少しも変わらないのです。6:67:2 哲学よ、真理にかけて問います。あなたはなぜ、あなたを信じた人々を、流れと運動と無秩序な渦に従わされた者として示すのですか。いったいなぜ、人の世を偶像で満たすのですか。風や空気や火や土、石や木や鉄、この世界を、あなたは神々に仕立てます。惑星までも神々に仕立てて、ほんとうに惑っている人々に向かって、天のことを論じ、むだ話をします。もてはやされているこの星占いによってです。天文学によってではありません。わたしが慕い求めるのは、風の主、火の主、世界の造り主、太陽に光をお与えになる方です。わたしが求めるのは神であって、神のわざではありません。

6:68:1 では、あなたのところから、誰をこの探求の助け手に取りましょうか。わたしたちは、あなたをまったく見放したわけではないからです。もしよければ、プラトンを取りましょう。プラトンよ、では、どのようにして神を探り出すべきでしょうか。『この宇宙の父であり作り主である者を見いだすのは、骨の折れる仕事だ。見いだしても、すべての人に語り出すことはできない』。その方にかけて問いますが、いったいなぜですか。『それは決して言い表せるものではないからだ』。6:68:2 見事です、プラトンよ。あなたは真理に触れています。しかし、疲れてやめてはなりません。善についての探求に、わたしとともに手を貸しなさい。すべての人間に例外なく、とりわけ言論に携わる人々には、神から流れ出たものが、何かしら滴り込んでいるからです。6:68:3 そのために、彼らは不本意ながらも、とにかく神は一つであると認めています。この神は滅びず、生じたのでもない。どこか上の方、天の背のあたりで、自分だけの、自分にふさわしい高みに、真に存在するものとしていつもいるのだ、と。『では、どのような神を思い描くべきか、言ってくれ。すべてを見ていながら、自分は見られない神をだ』と、エウリピデスは言います。6:68:4 メナンドロスは、少なくとも、惑っているとわたしには思えます。彼はこう言っています。『太陽よ、神々のうちで、まず第一におまえを拝まなければならない。おまえによって、ほかの神々を見ることができるのだから』。太陽は、真の神を決して示さないからです。示すのは健全なロゴスです。このロゴスは魂の太陽です。ただこのロゴスが、内に、知性の深みに昇られるときにだけ、魂の目は照らされるのです。6:68:5 それゆえ、デモクリトスがこう言うのも、もっともです。『学識ある人々のうち少数の者が、今わたしたちギリシヤ人が空気と呼んでいるところへ手を上げて、それをゼウスと名づけた。実際、これがすべてを知り、すべてを与え、また取り去る。これがすべてのものの王である』。プラトンも、どこかこのように考えて、神をほのめかしています。『すべてのものの王のまわりに、すべてのものはある。そして、それがすべての美しいものの原因である』。

6:69:1 では、すべてのものの王とは誰でしょうか。神です。神は、存在するものの真理の尺度です。つまり、計られるものが尺度によってとらえられるように、神を思い描くことによって、真理も計られ、とらえられるのです。6:69:2 まことに聖なるモーセは言っています。『あなたの袋に大小二種の重り石を入れておいてはならない。あなたの家に、大きい尺度も小さい尺度もおいてはならない。ただ、不足のない正しい重り石を持たなければならない』（申命記二五・一三～一五）。神を万物の重り石、尺度、数と考えてのことです。6:69:3 不正で不公平な偶像は、家の中の袋の中、いわば汚れた魂の中に隠されているからです。一方、た

だ一つの正しい尺度は、ただひとりのまことの神です。この神は、いつも等しく、同じあり方で、同じようにおられ、すべてを計り、量っておられます。正義を天秤のようにして、万物の本性を偏りなく包み、支えておられるのです。6:69:4『さて、古い言葉にもあるとおり、神は存在するすべてのものの初めと終わりと中ほどを持つ。そして、本性に従って巡りながら、まっすぐに道を成し遂げる。神には常に正義が付き従い、神の法から外れる者たちを罰する』。

6:70:1 プラトンよ、あなたはどこから真理をほのめかしているのですか。これほど惜しみなく言葉を繰り出しながら、どこから神を敬うことを言い当てているのですか。異民族の種族のほうがギリシャ人よりも賢い、とプラトンは言います。あなたが隠そうとしても、わたしはあなたの師たちを知っています。あなたは、幾何学をエジプト人から、天文学をバビロン人から学び、健やかなまじないをトラキア人から受けています。アッスリヤ人も、多くのことをあなたに教えました。しかし、律法のうち真実なものと、神についての考えとは、ヘブル人その人々から得て、益を受けたのです。6:70:2『彼らは、むなしい欺きにだまされて、金や青銅や、銀や象牙で作った人間の手のわざを敬うことはしない。木や石でできた、死んだ人間たちの偶像も、敬わない。死すべき者たちが、愚かな思いで敬うようなものはだ。そうではなく、朝早く寝床から起きて、清い腕を天に向かって上げ、いつも水で肌を清める。そして、とこしえに治める不死なる者だけを敬う』。

6:71:1 哲学よ、わたしのために、このプラトンひとりだけでなく、ほかにも多くの人々を連れて来るよう努めなさい。ただひとりのまことの神を、神の霊感に従って、神と声高く告げる人々をです。もしかすると、その人々も、どこかで真理をつかんでいるかもしれません。6:71:2 実際、アンティステネスは、このことを、キュニコス派らしからぬ仕方で考えました。むしろ、ソクラテスの弟子として、『神は何ものにも似ていない』と言います。『それゆえ、誰も神を像から学び知ることはできない』とも言うのです。6:71:3 アテネの人クセノフォンも、ソクラテスの毒を恐れていなかったなら、ソクラテスのように真理を証ししたことでしょう。真理について何かを、はっきりと書き残していたはずです。それでも、彼はそれに劣らずほのめかしています。現に、彼は言っています。『すべてを揺り動かし、また静める者が、何か偉大で力ある者であることは明らかである。しかし、その姿がどのようであるかは明らかではない。すべてを照らすと思われている太陽でさえ、人がそれを見ることを許さないようだ。かえって、誰かが厚かましく太陽を見つめれば、その視力を奪ってしまう』。6:71:4 では、このグリュロスの子は、どこから知恵を得たのでしょうか。明らかに、ヘブル人の女預言者からではありませんか。彼女は、およそこのように託宣を告げています。『どんな肉なる者が、天にいるまことの不死の神を、目で見ることができようか。天に住む神をだ。いや、死すべき者として生まれた人間たちは、太陽の光線にさえ、向かって立つことができない』。

6:72:1 ストア派の哲学者、ペダサの人クレアンテスは、詩人の神々の系譜ではなく、まことの神学を示しています。彼は、神について考えていたことを、隠しませんでした。6:72:2『善とはどのようなものかと、おまえはわたしに尋ねるのか。では聞け。秩序あるもの、正しいもの、清いもの、敬虔なもの、自分を治めるもの、役に立つもの、美しいものだ。なすべきもの、厳しいもの、偽りのないもの、いつも益をもたらすものだ。恐れのないもの、悲しみのないもの、得になるもの、苦しみのないもの、助けになるものだ。喜ばれるもの、確かなもの、愛すべきもの、尊いもの、首尾一貫したもの[1]。誉れあるもの、高ぶらないもの、心を配るもの、柔和なもの、激しいものだ。時を経て保たれるもの、非のうちどころのないもの、いつまでも続くものだ。評判に目を向ける者は、みな自由人にふさわしくない。評判から、何か良いものを得られると思っているのだ』。6:72:3 ここで彼は、神がどのような方であるかを、はっきりと教えていると、わたしは思います。また、世間の評判と習わしとが、神を求めるのではなく、それらに従う人々を、奴隷にしてしまったことも教えています。6:72:4 ピュタゴラスの一派の人々も、隠しておくべきではありません。彼らはこう言っています。『神は一つである。この神は、ある人々が推し量るように、宇宙の秩序の外にいるのではない。そうではなく、その中に、円環の全体の中に全体としていて、すべての生成を見守っている。すべての時代を混ぜ合わせる者であり、自分の力とわざのすべてを行う者である。天にある光であり、すべてのものの父である。円環の全体の知性であり、それに魂を吹き込むものであり、すべてのものの動きである』。

6:72:5 これだけでも、真理を少しでも見分けることのできる人が神を知るには、十分です。これらの言葉は、神の霊感によって彼らが書き記し、わたしたちが選び出したものです。

訳注

1 ここで詩の言葉が欠けている。

7章　真理を証しする詩人たち

7:73:1 さらに、わたしたちのもとには（哲学だけでは足りないからです）、詩の技そのものにも来てもらいましょう。詩の技は、すべてにおいて偽りにかかずらってきました。しかし今、ようやく真理を証しすることになるでしょう。いや、むしろ、神話への脱線を神に告白することになるでしょう。では、詩人のうち望む者が、誰でもまず進み出なさい。7:73:2 さて、アラトスは、神の力がすべてのものを貫いて行き渡っていると考えます。『すべてのものが確かに育つためである。それゆえ、人々はいつも、最初にも最後にも彼をなだめる。父よ、幸いあれ。大いなる驚き、人間の大いなる益よ』。7:73:3 同じように、アスクラの人ヘシオドスも、神をほのめかしています。『彼こそが、すべてのものの王であり、主である。不死の者たちのうちで、ほかに誰一人、力においておまえと争った者はいない』。

7:74:1 舞台の上でも、すでに真理をあらわにしています。エウリピデスは、天空と天とを仰ぎ見て、『これを神とみなせ』と言います。7:74:2 一方、ソフィロスの子ソフォクレスは言います。『まことに神は一つ、神は一つである。この神が、天と広い大地と、海のきらめく波と、風の力とを造った。しかし、わたしたち死すべき者の多くは、心が迷って、苦しみの慰めとして、神々の像を立てた。石の像、あるいは青銅や金や象牙で造った像である。そして、これらに犠牲とむなしい祭りをささげて、それで敬虔にしていると思っている』[1]。この人は、危険を冒してまで、舞台の上で観客に真理を持ち込んだのです。7:74:3 一方、オイアグロスの子オルフェウスは、トラキアの秘儀の祭司長であり、同時に詩人でもあります。彼は、狂宴の祭りの秘儀を執り行い、偶像の神学を語りました。そのあとで、真理を語る取り消しの歌を持ち込みます。遅まきながら、それでもとにかく、まことに聖なるロゴスを歌うのです。7:74:4 『わたしは、聞くことの許された者たちに語ろう。俗なる者たちは、みな同じように門を閉ざせ。だが、おまえは聞け。光をもたらす月の女神メネの子、ムサイオスよ。わたしは真実を語り出すのだから。以前に胸の内に現れた思いが、おまえから愛しいいのちを奪ってはならない。神のロゴスに目を向け、ひたすらそれに仕えよ。心という知性の器を、まっすぐに保って。そして、道によく踏み入り、世界の王、不死なる者だけを見つめよ』。7:74:5 それから、少し先で、はっきりと付け加えます。『ひとりの者がいる。自ら生まれた者である。すべてのものは、このひとりの者から生まれた。彼自身は、それらの中を巡り行く。死すべき者のうち誰一人、彼を見る者はいない。しかし彼は、すべての者を見ている』。オルフェウスはこう言いました。迷っていたのですが、時を経て、ついに悟ったのです。7:74:6 『しかし、おまえ、策に富む死すべき者よ、ためらって遅れていてはならない。むしろ、迷いから引き返し、向きを変えて、神をなだめるがよい』。7:74:7 ギリシャ人が、神のロゴスの火種をいくらか受けて、真理のうちのわずかなことを語ったのは、たしかにそのとおりです。それによって彼らは、真理の力が隠されていないことを証しはします。しかし、自分たち自身については、弱く、目的に達しなかった者であることを暴いているからです。

7:75:1 真理のロゴスなしに何かを行う者も、語る者も、足なしで歩こうと無理をする者たちに似ています。このことは、今では誰の目にも明らかになったと、わたしは思うからです。あなたがたの神々について暴かれたことにも、あなたを恥じ入らせ、救いへ向かわせてもらいましょう。詩人たちは、真理のゆえに強いられて、それらを喜劇で笑いものにしているのです。7:75:2 現に、喜劇作家のメナンドロスは、劇『ヘニオコス』で言います。『わたしは気に入らない。老婆を連れて外を出歩く神など。小さな板に載って家々に入り込む神などは』。神々の母の托鉢祭司のことです。7:75:3 神々の母の托鉢祭司とは、そういうものだからです。それゆえ、アンティステネスが、物乞いをする彼らにいつも言っていたのも、もっともです。『わたしは神々の母を養わない。彼女は神々が養っている』。7:75:4 また、同じ喜劇作家は、劇『女祭司』で、習わしに腹を立て、迷いの生む神

なきおごりを暴こうと努めます。思慮深く、こう言い添えるのです。『もし人が、シンバルで、神を自分の望むところへ引いて行くなら、そうする者は神よりも偉大だからだ。しかし、これらは、厚かましさと暴力の道具として、人間が考え出したものだ』。

7:76:1 メナンドロスだけではありません。ホメロスも、エウリピデスも、ほかの多くの詩人たちも、あなたがたの神々を暴き、どこまでもののしることを恐れません。たとえば、アテナを『犬蠅』と呼び、ヘファイストスを『両足の曲がった神』と呼びます。また、ヘレネはアフロディテに言います。『おまえが二度と、その足でオリュンポスへ帰ることのないように』。7:76:2 ディオニュソスについては、ホメロスがあからさまに書いています。『彼はかつて、狂ったディオニュソスの乳母たちを、聖なるニュサの山で追い立てた。乳母たちはみな、人殺しのリュクルゴスに追われて、祭具を地に投げ捨てた』。7:76:3 エウリピデスは、まことにソクラテスの学びの場にふさわしい人です。真理に目を向け、観客には目もくれません。あるときは、『大地のへその座に住み、死すべき者たちに、この上なくはっきりと語る口を与えている』アポロンを、こう暴きます。7:76:4 『わたしは、あの神に従って、自分を生んだ母を殺した。あの神を不敬な者とみなして殺せ。罪を犯したのはあの神で、わたしではない。あの神は、立派なことと正しいことを、よりわきまえていないのだ』。またあるときは、ヘラクレスを狂った者として舞台に出します。別のところでは、酔って飽くことを知らない者として出すのです。7:76:5 そうではありませんか。このヘラクレスは、肉のごちそうにあずかりながら、『青いいちじくを添えて食べ、調子はずれに吠えたてた。異民族にも分かるほどに』。7:76:6 さらに、劇『イオン』では、頭の覆いを取り払うように、あからさまに神々を劇場の前に押し出して見せます。『人間たちに法を書き与えたおまえたちが、自分では不正の罪を負う。それがどうして正しいのか。そんなことはあるまいが、言葉の上で言ってみよう。おまえたちが、力ずくの交わりの償いを人間たちにするとしよう。そうなれば、おまえも、ポセイドンも、天を治めるゼウスも、不正の償いを払って、神殿をからにすることになろう』。

訳注

1 この詩はソフォクレスの作ではなく、後代の偽作とされる。

8章　預言者たちの証し

8:77:1 さて、ほかのことは、順を追ってすでに述べ終えました。今こそ、預言の書に進むときです。託宣は、神を敬うことへの足がかりを、最もはっきりとわたしたちに差し出し、真理の土台を据えるからです。慎み深い暮らしの定めも、救いへの近道ではあるでしょう。しかし、神の書は、化粧も、外側の美しい響きも、おしゃべりも、へつらいも持ちません。それでいて、悪に首を絞められている人間を立ち上がらせます。この世の暮らしのすべりやすさをものともせず、ただ一つの同じ声で多くのものを癒やします。害をもたらす欺きからわたしたちを引き離し、目の前にある救いへとはっきり勧めるのです。8:77:2 たとえば、女預言者シビュラが、まず初めに、救いの歌をわたしたちに歌いなさい。『見よ、このかたは、すべての者にとって明らかで、迷いがない。来たれ。いつまでも闇と暗黒を追い求めてはならない。見よ、太陽の、目に甘い光が、ひときわ輝いている。知恵をおまえたちの胸に置いて、知れ。神はひとりである。雨、風、地震、稲妻、飢饉、疫病、痛ましい苦しみ、雪、氷を送る神である。なぜ、一つ一つ数え上げることがあろうか。神は天を導き、地を治め、自ら存在する』。8:77:3 シビュラは、まことに神に満たされて、欺きを闇にたとえ、知識を太陽と神の光にたとえます。そして、両者を並べて比べ、選ぶことを教えます。偽りは、真実をただ横に並べるだけでは散らされず、真理を用いることによって、押し出されて追い払われるからです。

8:78:1 また、知恵に満ちた預言者エレミヤも、いや、むしろエレミヤのうちにおられる聖霊が、神を示しておられます。『わたしは近くの神であって、遠くの神ではない』と言われます。『人がひそかな所で何かをしても、わたしがその人を見ないことがあろうか。わたしは天と地とに満ちているではないか。主は言われる』（エレミヤ二三・二三〜二四）。8:78:2 さらにまた、イザヤを通して言われます。『だれが、指を伸ばして天をはかり、ひとつかみで全地をはかるだろうか』（イザヤ四〇・一二）。神の大きさを見て、驚き打たれなさい。このかたを拝みましょう。このかたについて、預言者は言います。『あなたの御顔の前で、山々は溶ける。ろうが火の前で溶けるように』（イザヤ六四・一〜二）。預言者によれば、このかたこそ神です。『天はその位、地はその足台である』方です（イザヤ六六・一）。『このかたが天を開かれるなら、震えがあなたを捕らえる』のです（イザヤ六四・一）。8:78:3 あなたは、偶像についても、この預言者が何と言うかを聞きたいでしょうか。『彼らは太陽の前でさらしものにされる。その死体は、空の鳥と地の獣の食物となる。それらは太陽と月によって腐る。その太陽と月は、彼ら自身が愛し、仕えてきたものである。そして、彼らの町は焼き払われる』（エレミヤ八・二、三四・二〇、四・二六）。8:78:4 また、元素も世界も、偶像とともに滅びると言います。『地は古び、天は過ぎ去る』（イザヤ五一・六、マタイ二四・三五）。『しかし、主の言葉は、とこしえに残る』（イザヤ四〇・八、第一ペテロ一・二四）。

8:79:1 では、神がモーセを通して、もう一度ご自身を示そうとされるときは、どうでしょうか。『見よ、見よ、わたしこそは彼である。わたしのほかに、ほかの神はない。わたしは殺し、また生かし、傷つけ、またいやす。わたしの手から救い出しうるものはない』（申命記三二・三九）。8:79:2 しかし、あなたは、ほかの託宣を歌う者にも耳を傾けたいでしょうか。あなたには、預言者の合唱隊のすべてがあります。モーセとともに祭りを祝う、一団の仲間たちです。聖霊は、ホセアを通して[1]、何と語っておられるでしょうか。ためらわずに言いましょう。『見よ、わたしは雷を固め、風を創造する』（アモス四・一三）。このかたは、その御手で天の軍勢の基を据えられた方です。8:79:3 さらに、イザヤを通しても言われます（この声も、あなたに語り聞かせましょう）。『わたしだ、わたしだ。義を語り、真理を告げる主である。もろもろの国から救われる者よ、集まってきて、来たれ。共に相談せよ。自分たちの彫った木をになう者、また、自分たちを救わない神々に祈る者は、悟らなかった』（イザヤ四五・一九〜二〇）。8:79:4 それか

ら、少し先で言われます。『わたしは神である。わたしのほかに義なる者はなく、わたしのほかに救い主はない。地の果の者たちよ、わたしに立ち帰れ。そうすれば救われる。わたしは神であって、ほかに神はない。わたしは自分をさして誓う』（イザヤ四五・二一～二三）。8:79:5 また、偶像を拝む者たちに憤って言われます。『あなたがたは主をだれになぞらえたのか。どんな似姿に、主をなぞらえたのか。細工人が像を造り、鍛冶が金を溶かして、それを金でおおったとでもいうのか』（イザヤ四〇・一八～一九）。そして、その先も続きます。8:79:6 では、あなたがたは、まだ偶像を拝む者のままだとでもいうのですか。せめて今からでも、おどしに用心しなさい。彫った像も、手で造ったものも、泣き叫ぶからです。いや、むしろ、それらに寄り頼む者たちが泣き叫ぶのです。材料には感覚がないからです。さらに言われます。『主は人の住む町々を揺り動かし、全世界を巣のように手でつかまれる』（イザヤ一〇・一三～一四）。

8:80:1 知恵の奥義や、知恵を授けられたヘブル人の子供の言葉を、なぜ、あなたに告げることがあるでしょうか。『主は、そのわざのために、その道の初めとして、わたしを造られた』（箴言八・二二）。また、『主が知恵を与え、知識と悟りとは、御顔から出る』（箴言二・六）。8:80:2 『なまけ者よ、いつまで寝ているのか、いつ目をさまして起きるのか』（箴言六・九）。『もしあなたが怠らないなら、あなたの刈り入れは泉のようにあなたに来る』（箴言六・一一）。その刈り入れとは、父のロゴス、良いともしびです。光と、信仰と救いとを、すべての人にもたらしてくださる主です。8:80:3 エレミヤが言うとおり、『主はその力をもって地を造り、その知恵をもって世界を立て直された』からです（エレミヤ一〇・一二）。偶像へと倒れ落ちたわたしたちを、知恵が、すなわち神のロゴスが、真理へと立て直してくださるからです。8:80:4 これが、過ちからの最初の立ち上がりです。それゆえ、神々しいモーセは、あらゆる偶像礼拝から人々を引き離そうとして、見事に叫んでいます。『イスラエルよ聞け。あなたの神、主は唯一の主である』（申命記六・四）。また、『主なるあなたの神を拝し、ただ神にのみ仕えよ』（申命記六・一三）。8:80:5 ですから、人々よ、あの幸いな詩篇の歌い手ダビデに従って、今こそ悟りなさい。『教えをしっかりとつかめ。さもないと主は怒り、その憤りがすみやかに燃えるとき、あなたがたは正しい道から滅びるであろう。すべて主に寄り頼む者はさいわいである』（詩篇二・一二）。

8:81:1 さらに、主はわたしたちを深くあわれんで、救いの旋律を授けてくださいます。進軍の歌のような拍子です。『人の子らよ、いつまで心を重くしているのか。なぜ、むなしいものを愛し、偽りを慕い求めるのか』（詩篇四・二）。8:81:2 では、むなしいものとは何で、偽りとは何でしょうか。主の聖なる使徒が、ギリシヤ人を責めて、あなたに説き明かしてくれるでしょう。『なぜなら、彼らは神を知っていながら、神としてあがめず、感謝もせず、かえってその思いはむなしくなったからである。そして、神の栄光を変えて、朽ちる人間の像に似せ、創造者の代りに被造物に仕えたのである』（ローマ一・二一、二三、二五）。8:81:3 しかも、この神こそ、『はじめに天と地とを創造された』方です（創世記一・一）。ところが、あなたは、神を思い描かずに、天を拝んでいます。これが不敬虔でなくて何でしょうか。8:81:4 もう一度、預言者の言葉を聞きなさい。『太陽は光を失い、天は暗くなる。しかし、全能者はとこしえに輝く。天の力は揺り動かされ、天は、張られては縮められ、皮のように巻かれる』（これこそ預言の声だからです）。『そして、地は主の御顔から逃げ去る』[2]。

訳注

1 次の句はアモス書にあり、その後の言葉はギリシア語訳ホセア書の句に近い。

2 このままの形では聖書にない。数か所を合わせたか、失われた書から引いたらしい。

9章　きょう、み声を聞くなら

9:82:1 ほかにも、数えきれないほどの聖書の言葉を、あなたに示すことができます。その言葉は、『一画もすたることはなく』、ことごとく全うされます（マタイ五・一八）。主の口である聖霊が、これをお語りになったからです。聖霊は言われます。『だから、わたしの子よ、もう主の訓練を軽んじてはいけない。主に責められるとき、弱り果ててはならない』（箴言三・一一、ヘブル一二・五）。9:82:2 ああ、あふれるばかりの、人を愛する心よ。主は、教師が弟子をさとすようにではありません。主人が召使いを、神が人をさとすようにでもありません。そうではなく、『やさしい父のように』子らをさとしておられるのです。9:82:3 それに、モーセは、ロゴスについて聞いて、『恐ろしさのあまり、おののいている』と言い表しています（ヘブル一二・二一）。一方、あなたは、神のロゴスそのものに聞きながら、恐れないのですか。思い悩まないのですか。畏れ慎みつつ、急いで学び取ろうとはしないのですか。つまり、裁きを避けるために、怒りを恐れ、恵みを愛し、望みを熱心に求めて、救いへと急ごうとはしないのですか。9:82:4 来なさい、来なさい、わたしの若者たちよ。聖書も言うとおり、『再び幼な子のようになり、新しく生れなければ』、まことにおられる父を受けることはないからです。『決して天国にはいることもできない』のです（マタイ一八・三、ヨハネ三・五）。実際、よそ者が、どうして入ることを許されるでしょうか。9:82:5 しかし、思うに、その人が登録されて市民となり、父を受けたとき、そのときこそ『父の家に』いることになります（ルカ二・四九）。そのとき、受け継ぐにふさわしい者とされます。そのとき、まことの子である『愛されている方』と、父の御国をともにするのです。9:82:6 これこそ、多くの良い子供たちから成る、長子の教会だからです。この子供たちこそ、『天に登録されている長子たち』です。また、あれほど『無数の御使い』とともに、祭りを祝う者たちです（ヘブル一二・二二〜二三）。9:82:7 長子である子供とは、神に養われるわたしたちのことです。『長子』である方の、まことの友です。ほかの人々に先がけて神を思い描いた、最初の者たちです。罪から最初に引き離され、悪魔から最初に切り離された者たちです。

9:83:1 ところが今、ある人々は、神が人を愛されるほどに、それだけいっそうひどい無神論者となっています。神は、わたしたちが奴隷から子となることを望んでおられるからです。一方、その人々は、子となることさえ、高ぶってはねつけています。ああ、甚だしい愚かさよ。あなたがたは主を恥じているのです。9:83:2 主は自由を約束しておられるのに、あなたがたは奴隷の身へと逃げ去っていきます。主は救いを恵んでくださるのに、あなたがたは死へと押し流されていきます。主は永遠のいのちを贈ってくださるのに、あなたがたは懲らしめを待っています。そのうえ、『主が悪魔とその御使いたちのために用意された火』を、行く手に見ているのです（マタイ二五・四一）。9:83:3 そのため、幸いな使徒は言います。『わたしは主にあって証しする。あなたがたは今後、異邦人がむなしい心で歩いているように歩いてはならない。彼らの知力は暗くなり、神のいのちから遠く離れている。それは、その内なる無知と心の硬化とによる。彼らは自ら無感覚になって、放縦に身をゆだね、あらゆる不潔な行いと貪りに走った』（エペソ四・一七〜一九）。

9:84:1 このような証人が、人々の愚かさを暴き、神を証人として呼び求めているのです。それなら、信じない者たちに、裁きと有罪の宣告のほかに、何が残されているでしょうか。しかし、主は、疲れを知らずに、忠告し、恐れさせ、勧め、奮い立たせ、さとしておられます。迷った者たちを目覚めさせ、闇そのものから起き上がらせてくださいます。9:84:2 主は言われます。『眠っている者よ、起きなさい。死人のなかから、立ち上がりなさい。そうすれば、主キリストがあなたを照すであろう』（エペソ五・一四）。このかたは、復活の太陽です。ご自身の光でいのちを恵んでくださった方であり、『明けの明星より前に』お生まれになった方です（詩篇一一〇・三）。9:84:3 ですから、だれもロゴスを軽んじてはなりませ

ん。気づかないうちに、自分自身を軽んじることにならないためです。聖書は、どこかでこう言っているからです。『きょう、あなたがたがみ声を聞いたなら、荒野における試錬の日に、神にそむいた時のように、あなたがたの心を、かたくなにしてはいけない。あなたがたの先祖たちは、そこで、ためしによって試みた』（ヘブル三・七〜九）。9:84:4 その『ためし』とは何か、あなたが知りたいなら、聖霊が説き明かしてくださいます。『そして、四十年の間わたしのわざを見たのである。だから、わたしはこの時代の人々に対して、いきどおって言った。彼らの心は、いつも迷っており、彼らは、わたしの道を認めなかった。そこで、わたしは怒って、彼らをわたしの安息にはいらせることはしない、と誓った』（ヘブル三・九〜一一）。9:84:5 脅しを見なさい。勧めを見なさい。誉れを見なさい。では、なぜ、わたしたちは、なおも恵みを怒りに変えてしまうのでしょうか。なぜ、耳を大きく開いてロゴスを迎え入れ、清い魂のうちに神を客としてお迎えしないのでしょうか。わたしたちが、きょう、み声を聞くなら、その約束の恵みは大きいからです。この『きょう』は、『きょう』と呼ばれるかぎり、日ごとに増していきます（ヘブル三・一三）。9:84:6 世の終わりまで、『きょう』も学びも続きます。そして、そのとき、まことの『きょう』、すなわち神の尽きることのない日が、世々とともに延びていきます。ですから、いつも神のロゴスの声に聞き従いましょう。『きょう』は、永遠の世の像だからです。日は光の象徴であり、ロゴスは人にとっての光です。このロゴスによって、わたしたちは照らされて、神を見るのです。

9:85:1 ですから、信じて聞き従う者には、当然、恵みがあふれるほど増し加わります。一方、従わない者、心の迷っている者、主の道を認めなかった者がいます。その道は、ヨハネがまっすぐにし、整えるように命じた道です。そういう者たちに対して、神はいきどおり、脅しておられます。9:85:2 しかも、昔のヘブル人の、荒野をさまよった者たちは、脅しの結末を、なぞめいた形で身に受けました。彼らは、不信仰のゆえに安息にはいらなかった、と言われているからです。それは、モーセの後継者に従って、ついに身をもって学ぶまでのことでした。学んだのは、ヨシュア（イエスース。イエスと同じ名）のように信じた者でなければ、ほかに救われる道はない、ということです。9:85:3 しかし、主は人を愛される方なので、すべての人を『真理の知識』へと招いておられます（第一テモテ二・四）。助け主をお遣わしになる方です。では、その知識とは何でしょうか。神を敬うことです。パウロによれば、『神を敬うことは、万事に益となる』のであり、『今のいのちと後の世のいのちとの約束を持っている』のです（第一テモテ四・八）。9:85:4 人々よ、もし永遠の救いが売りに出されていたら、あなたがたは、いくらで買うと申し出たでしょうか。パクトロス川は、あの神話の黄金の流れです。たとえ、だれかがその川をそっくり量って差し出しても、救いに見合う代価を数えることはできないでしょう。

9:86:1 ですから、気落ちしてはなりません。あなたがたは、望むなら、この上なく尊い救いを、自分の宝で買い取ることができます。それは、愛といのちの信仰であり、値打ちのある代価です。神は、この代価を喜んでお受けになります。『わたしたちは、すべての人の救主、特に信じる者たちの救主なる生ける神に、望みを置いてきたからである』（第一テモテ四・一〇）。9:86:2 一方、ほかの人々は、海の岩にくっつく海藻のように、この世にまといついて、不死を軽んじています。彼らは、イタケの老人オデュッセウスのようです。真理と天の祖国を慕わず、さらに、まことに存在する光をも慕わず、ただ煙を慕っているのです。しかし、神を敬うことは、できるかぎり人を神に似た者にし、ふさわしい教師として神を迎えます。このかたこそ、人をふさわしく神に似せることのおできになる、ただひとりの方です。

9:87:1 使徒は、この教えがまことに神のものであることを知っていて、言います。『しかし、テモテよ、あなたは幼い時から、聖なる文字を知っている。それは、キリストにある信仰によって救に至る知恵を、あなたに与えうるものである』（第二テモテ三・一四〜一五）。聖なるものとし、神のようにする文字こそ、まことに聖なるものだからです。9:87:2 この聖なる文字と音節から、書物、すなわち著作が組み立てられています。同じ使徒は、それに続けて、これを『神の霊感を受けて書かれたもの』と呼びます。その書物は、『人を教え、戒め、正しくし、義に導くのに有益である。それによって、神の人が、あらゆる良いわざに対して備えられ、完全な者になる』のです（第二テモテ三・一六〜一七）。9:87:3 人を愛される主ご自身の勧めほど、人の心を打つものはありません。ほかの聖なる

人々の勧めも、これには及びません。主の仕事は、ただ一つ、人が救われることだけだからです。現に、主ご自身が、救いへと急き立てて叫んでおられます。『天国は近づいた』（マタイ四・一七）。恐れによって近づいてくる人々を、立ち帰らせてくださるのです。9:87:4 このように、主の使徒も、マケドニヤの人々を招いて、神の声を解き明かす者となっています。『主は近づいた』と言うのです（ピリピ四・五）。そして、『わたしたちがむなしい者として捕らえられないよう、気をつけなさい』と言います[1]。ところが、あなたがたは、これほど恐れを知らず、いや、むしろ信じようとしません。主ご自身にも、パウロにも従わないのです。しかも、パウロはキリストのために縛られているというのに。

9:88:1 『神の恵みふかきことを味わい知れ』（詩篇三四・八）。信仰が導き入れ、経験が教え、聖書が養い育ててくれるでしょう。聖書は言います。『子らよ、来てわたしに聞け、わたしは主を恐るべきことをあなたがたに教えよう』（詩篇三四・一一）。それから、すでに信じた者たちに向けるように、手短にこう続けます。『いのちを慕い、良い日々を見ることを好む人はだれか』（詩篇三四・一二）。わたしたちこそ、その人です、と答えましょう。良きものを拝む者、良いものを熱心に求める者です。9:88:2 ですから、『遠く離れている者たち』よ、聞きなさい。『近くにいる者たち』よ、聞きなさい（エペソ二・一七）。ロゴスは、だれにも隠されたことがありません。すべての者に共通の光であり、すべての人を照らします。ロゴスのもとでは、闇に住むキンメリオイ人のような者は一人もいません。救いへと、新生へと急ぎましょう。多くの者が、一なる実体の一致に従って、一つの愛へと集められるよう急ぎましょう。良い一なるものを探し求め、善を施されたことに見合って、一つであることを追い求めましょう。9:88:3 多くの者からできた一致は、多くの声と離散から、神の調和を得て、一つの響き合いとなります。ただひとりの合唱の導き手であり教師であるロゴスについて行き、真理そのものの上に憩い、『アバ、父よ』と呼ぶのです（ローマ八・一五）。神は、このまことの声を、ご自分の子らからの最初の実りとして受け取り、喜んで迎えてくださいます。

訳注

1 この句はピリピ人への手紙になく、出どころが分からない。

10章 89〜94節　習慣を捨てて、まことの父のもとへ

10:89:1 しかし、父祖からわたしたちに伝えられた習慣をくつがえすのは理にかなわない、とあなたがたは言います。それなら、なぜわたしたちは、最初の食べ物である乳を、今も飲まないのでしょうか。生まれたときから、乳母たちがわたしたちを慣れさせたものなのに。また、なぜ父祖の財産をふやしたり減らしたりして、受け継いだとおりに保たないのでしょうか。なぜもう、父の膝の上に乳を吐きもどさないのでしょうか。幼いころ、母たちに育てられながら笑いものになったほかのことも、なぜ今はしないのでしょうか。かえって、たとえ良い養育係に恵まれなかったとしても、わたしたちは自分で自分を正してきたではありませんか。10:89:2 それに、船旅では、航路をそれることは損で危ないのに、それでもなぜか楽しく感じられます[1]。それなのに、生き方では、悪く、情念にとらわれ、神を認めない習慣を捨てて、真理へとそれようとしないのでしょうか。たとえ父たちが怒っても、慣わしを毒薬のように突き放して、まことにおられる父を探し求めようとしないのでしょうか。10:89:3 実際、わたしが企てていることのうちで最も美しいのは、まさにこのことです。神を敬うことが、狂気と、このきわめてみじめな習慣のゆえに憎まれたのだと、あなたがたに示すことです。これほどの善が、憎まれたり禁じられたりすることは、決してなかったはずです。これより大きなものを、神はまだ人類にお贈りになったことがありません。それが憎まれたのは、あなたがたが習慣にさらわれたからにほかなりません。そのうえ、あなたがたは、わたしたちに耳をふさぎました。首のこわい馬が手綱にさからい、くつわを噛むように、わたしたちの言葉から逃げていたのです。あなたがたの生き方の御者であるわたしたちを、振り落とそうと望んでいました。そして、無分別のために滅びの崖へと押し流されながら、神の聖なるロゴスを、汚れたものと思っていたのです。

10:90:1 だからこそ、ソフォクレスの言うとおり、あなたがたには、選んだことの報いがついて来ます。『知性は消え、耳は役に立たず、思いはむなしい』。そして、あなたがたは、何にもまして確かな次のことを知らないのです。善良で神を敬う者たちは、善を尊んだので、善い報いを受けます。逆に、悪い者たちは、それにふさわしい罰を受けます。そして、悪の支配者の頭上には、懲らしめがかかっているのです。10:90:2 現に、預言者ゼカリヤは、この者をおどして言います。『どうか、エルサレムを選んだ方が、あなたを責めるように。これは火の中から取り出した燃えさしではないか』（ゼカリヤ三・二）。それなら、なぜ人々には、なお、自ら選ぶ死への欲が宿っているのでしょうか。なぜ、この死をもたらす燃えさしのもとへ逃げ込むのでしょうか。習慣に従ってではなく、神に従って、立派に生きることができるというのに。その燃えさしといっしょに、焼き尽くされるのです。10:90:3 実際、神はいのちを恵んでくださいます。一方、悪い習慣は、この世を去った後に、むなしい悔い改めを罰とともに押しつけます。迷信は滅ぼし、神を敬うことは救うということを、『愚か者は痛い目にあって知る』のです。

10:91:1 あなたがたのだれでも、偶像のもとで仕える者たちを見てみなさい。髪は汚れ、汚くて破れた衣で辱められています。湯浴みをまったく知らず、伸びた爪で獣のようになっています。その多くは、陰部まで取り去られています。偶像の境内が、実は墓か牢獄であることを、行いで示しているのです。わたしには、この者たちは神々を拝んでいるのではなく、神々の喪に服しているように見えます。この者たちの受けている苦しみは、神を敬うことと呼ぶよりも、あわれみに値するものです。10:91:2 これを見ていながら、あなたがたは、なお盲目のままでいるのですか。すべてのものの主人、万物の主を見上げようとしないのですか。この世の牢獄から逃れて、天からのあわれみのもとへ逃げ込もうとしないのですか。10:91:3 実際、神は、深く人を愛する心から、人をしっかりとつかまえていてくださいます。巣から落ちるひなのもとへ、母鳥が飛んで行くようにです。もし這う獣がひなに大口を開けて迫るなら、『母鳥はいとしい子らを嘆いて、まわり

を飛び回る』のです。しかし、父である神は、ご自分が形造ったものを探し、過ちをいやし、獣を追い払ってくださいます。そして、ひなを再び取り上げ、巣へと舞い上がるよう促してくださるのです。

10:92:1 それに、犬は、迷ったときにも、においをかいで主人を探し当ててきました。馬も、乗り手を振り落としても、口笛ひとつで主人に従ってきました。主は言われます。『牛はその飼主を知り、ろばはその主人のまぐさおけを知る。しかしイスラエルはわたしを知らない』（イザヤ一・三）。では、主はどうなさるのでしょうか。悪をいつまでも覚えてはおられず、なおあわれみ、なお悔い改めを求めておられます。10:92:2 わたしは、あなたがたに尋ねたいのです。次のことが、おかしいとは思いませんか。あなたがた人間は、神に形造られたものであり、神から魂を受け、まったく神のものです。それなのに、ほかの主人の奴隷となっています。そのうえ、王ではなく暴君に、善い方ではなく悪い者に仕えているのです。10:92:3 実際、真理にかけて問います。正気の者で、だれが善を捨てて、悪と連れ添うでしょうか。だれが神から逃げて、悪霊どもと暮らすでしょうか。神の子となることができるのに、だれが奴隷であることを喜ぶでしょうか。天の市民となることができるのに、だれが闇を追い求めるでしょうか。楽園を耕し、天を巡り歩き、いのちを与える清らかな泉にあずかることができるのです。エリヤのように、あの輝く雲の跡を追って空を歩み、救いの雨を見つめることができるのです。10:92:4 一方、ある人々は、虫けらのように、沼や泥、つまり快楽の流れの中を転げ回っています。そして、益もなく愚かな楽しみを食んでいます。豚のような人間たちです。実際、豚は、ある人の言うとおり、清い水よりも『泥を喜び』ます。また、デモクリトスによれば、『ごみの上で狂い騒ぐ』のです。10:92:5 ですから、決して、決してわたしたちは奴隷にされてはなりません。豚のような者にもなってはなりません。そうではなく、まことの『光の子』らしく（エペソ五・八）、上を仰ぎ、光を見上げましょう。太陽が鷲を暴くように、主がわたしたちを庶子として暴くことをなさらないためです。

10:93:1 ですから、悔い改めましょう。無知から確かな知へ、愚かさから思慮へ、放縦から自制へ、不義から義へ、無神論から神へと移りましょう。10:93:2 神のもとへ寝返るのは、美しい危険です。義を恋い慕い、永遠の救いを追い求めるわたしたちは、ほかにも多くの善いものを楽しむことができます。とりわけ、神ご自身がイザヤを通して語り、ほのめかしておられるものです。『主に仕える者たちには、受け継ぐものがある』（イザヤ五四・一七）。10:93:3 この受け継ぐものは、まことに美しく、慕わしいものです。それは、金でも、銀でも、衣でもありません。そういうものには、虫が入り込みます。強盗も、地を這うような富に目をつけて忍び込みます。そうではなく、あの救いの宝です。言葉を愛する者となったわたしたちは、この宝へと急がなければなりません。そして、立派な行いが、ここからわたしたちとともに旅立ち、真理の翼に乗っていっしょに飛んで行くのです。

10:94:1 この受け継ぐものを、わたしたちの手に渡すのは、神の永遠の契約です。この契約が、永遠の賜物を惜しみなく与えるのです。わたしたちの、このいつくしみ深い父、まことの父は、勧め、さとし、教え導き、愛することをおやめになりません。救うこともおやめにならないからです。そして、最善のことを忠告してくださいます。『正しい者となれ、と主は言われる。かわいている者は水にきたれ。金のない者は、行って買い求め、金を出さずに飲め』（イザヤ五四・一七、五五・一）。10:94:2 父は、洗いへ、救いへ、照らしへと招いておられます。ほとんど叫ぶようにして、こう言っておられるのです。「子よ、わたしはあなたに地と海を与える。天も、その中にいるすべての生き物も、あなたに恵む。子よ、ただ父を渇き求めなさい。神は、ただであなたに示される」。真理は売物にされません。空を飛ぶものも、水を泳ぐものも、地の上のものも、あなたに与えてくれます。10:94:3 父は、あなたが感謝して楽しむために、これらを造られたのです。庶子は、金を出して買うことになります。それは滅びの子であり、『富に仕える』ことを選んだ者です（マタイ六・二四）。一方、あなたには、父はあなたのものをゆだねてくださいます。つまり、父を愛するまことの子であるあなたに、です。父は、このあなたのゆえに、今も働いておられます。このあなただけ、父は約束してこう言われます。『地は売り渡されて、永代に確定されることはない』。滅びのものとして確定されることはないからです。『すべての地はわたしのものだからである』（レビ二五・二三）。しかし、あなたが神を受けるなら、地はあなたのものでもあるのです。10:94:4 ですから、聖書が信じた者たちに

良い知らせを告げるのは、もっともなことです。『主の聖徒たちは、神の栄光とその力を受け継ぐ』。幸いな人よ、どんな栄光なのか、わたしに言ってください。『目がまだ見ず、耳がまだ聞かず、人の心に思い浮びもしなかった栄光である。彼らは、とこしえに、その主の御国を喜ぶ。アーメン』[2]。

訳注

1 写本は『船旅』ではなく『情念』と読む。

2 二つの句は外典『エリヤの黙示録』からとされる。中ほどは第一コリント二・九に近い。

10章 95〜99節　物言わぬ像と、魂のある像

10:95:1 人々よ、あなたがたは、恵みについての神の約束を持っています。また、もう一方の、罰についてのおどしも聞きました。主は、この二つによって救ってくださいます。恐れと恵みとによって、人を教え導いておられるのです。わたしたちは、なぜためらうのでしょうか。なぜ罰を避けないのでしょうか。なぜ賜物を受け取らないのでしょうか。なぜ、よりよいものを選ばないのでしょうか。悪い者の代わりに神を選び、偶像礼拝よりも知恵を選び取り、死と引き換えにいのちを得ようとしないのでしょうか。10:95:2 主は言われます。『見よ、わたしは、死といのちを、あなたがたの前に置いた』（申命記三〇・一五、一九）。主は、あなたにいのちを選ばせようと努めておられます。父として、神に従うよう、あなたに忠告してくださいます。主は言われます。『もし、あなたがたがわたしに聞き、望むなら、地の良き物を食べることができる』。これが、聞き従うことの恵みです。『しかし、わたしに聞き従わず、望まないならば、つるぎと火があなたがたを食いつくす』。これが、聞き従わないことへのさばきです。『これは主がその口で語られたことだからである』（イザヤ一・一九〜二〇）。主の言葉は、真理の律法です。10:95:3 わたしがあなたがたの良い助言者となることを、あなたがたは望みますか。では、あなたがたは聞きなさい。わたしのほうは、できることなら、示してみましょう。人々よ、あなたがたは、善そのものについて思いめぐらすなら、生まれつき備わった信仰を引いてくるべきでした。それは、その場で、自分の家から連れて来る、信頼に足る証人です。この信仰は、最善のものを、はっきりと選び取ります。それを追い求めるべきかどうかを問うのではなく、善を骨折って行うべきだったのです。10:95:4 実際、たとえば、酒に酔うべきかどうかなら、ためらうのが当然です。ところが、あなたがたは、よく調べる前に酔ってしまいます。乱暴をはたらくべきかどうかも詮索せず、できるだけ早く乱暴をはたらきます。一方、神を敬うべきかどうかだけは、問いただすのです。この賢い神とキリストについて行くべきかどうかとなると、それこそ思案と考察に値すると考えます。しかも、神にふさわしいことが何であるかさえ、思い描いたことがないのです。

10:96:1 せめて、酔いに身をゆだねるのと同じようにでも、わたしたちを信じなさい。正気に返るためです。乱暴に身をゆだねるのと同じようにでも、信じなさい。生きるためです。また、徳の明らかな証しを見きわめて、納得したいと望むなら、さあ、ロゴスについての説得を、あり余るほど示しましょう。10:96:2 さて、あなたがたは、この先がどうなっているのかを、もう聞くことができるでしょう。父祖の習慣が、前もって教えを受けたあなたがたを、もう真理から引き離すことはないからです。そして、この名を恥じる心が、あなたがたを先に捕らえてはなりません。その恥は、『人をひどく損ない』、救いから人をそらすのです。10:96:3 ですから、公然と衣を脱ぎ、真理の競技場で、まことの競い手として競いましょう。審判を務めておられるのは聖なるロゴスで、競技を主催しておられるのは万物の主人です。実際、わたしたちの前に置かれた賞は、小さなものではありません。不死なのです。10:96:4 ですから、市場にたむろする屑のような者たちが、あなたがたのことを何と言おうと、もう少しも気にかけてはなりません。この者たちは、迷信の合唱隊で歌う無神論者たちです。愚かさと狂気によって、まさに奈落へと突き落とされています。偶像を作り、石を拝む者たちです。実際、この者たちは、人間を神として祭り上げることまで、あえてしてきました。マケドニヤ人アレクサンドロスを、十三番目の神として書き記したのです。この者は、『バビロンが死者として暴いた』者です。

10:97:1 そういうわけで、わたしは、キヨスのソフィストに感心します[1]。テオクリトスという名の人です。アレクサンドロスの死の後、テオクリトスは、人々が神々について抱いていたむなしい考えをあざけりました。そして、町の人々にこう言ったのです。『人々よ、神々が人間より先に死んでいくのを見ているうちは、安心していなさい』。10:97:2 見える神々と、生じたものたちの雑多な群れと

を拝み、それと親しく交わる者は、あの悪霊どもよりも、はるかにみじめです。実際、神は、悪霊どものように不義であることは、どこにも、どのようにも、決してありません。かえって、できるかぎり最も正しい方です。そして、わたしたちのうちで、できるかぎり正しい者となる人ほど、神に似ているものは、ほかにありません。10:97:3 『さあ、道へ出て行け、手仕事をするすべての民よ。ゼウスの娘、鋭い目をした仕事の女神を、据えた箕で拝むおまえたちよ』。石（リトン）を作り、石を拝む、愚か者（エリティオイ）たちよ。

10:98:1 あなたがたのフェイディアスも、ポリュクレイトスも、来なさい。プラクシテレスも、アペレスも、手仕事の技にたずさわる者たちも、みな来なさい。土の者であり、土を扱う職人である者たちです。実際、ある預言は言います。人々が立像を信じるとき、そのとき、この世のことは不幸に陥る、と。10:98:2 では、小手先の職人たちよ、もう一度来なさい。呼ぶのをやめるつもりはありませんから。この者たちのうち、だれひとり、息の通う像を作った者はいません。土から柔らかな肉を柔らかくこねた者もいません。だれが骨髄を溶かしたでしょうか。だれが骨を固めたでしょうか。だれが筋を張り渡し、だれが血管をふくらませたでしょうか。だれがその中に血を注ぎ、だれが皮膚で包んだでしょうか。この者たちのうちのだれが、見る目を作れるでしょうか。だれが魂を吹き入れたでしょうか。だれが義を贈ったでしょうか。10:98:3 だれが不死を約束したでしょうか。ただ万物の造り主、『最上の技を持つ父』だけが、このような魂のある像、つまりわたしたち人間を形造ってくださったのです。一方、あなたがたのオリュンピアのゼウスは、かたちのかたちです。真理からはるかに外れた、アッティカの手による、物言わぬ作品です。実際、『神のかたち』はそのかたのロゴスです（第二コリント四・四）。神のロゴスは、知性のまことの子であり、光の原型である光です。そして、ロゴスのかたちは、まことの人、つまり人のうちにある知性です。そのため、この知性は、神の『かたちに』、また『かたどって』造られた、と言われます（創世記一・二六）。この知性は、心の思慮によって神のロゴスに似せられ、その点で理性あるものとなっています。一方、目に見える、土から生まれた人の、土のかたちが、人の姿をした像です。それは、真理から遠く離れた、その場かぎりの写しであることが明らかです。

10:99:1 ですから、人の生活は、これほどの熱心さで物質にかかずらい、狂気に満ちたものでしかなくなった、とわたしには思えました。慣わしは、むなしい考えによって、すっかり堕落しています。そして、あなたがたに、奴隷の身分と、理にかなわない詮索とを味わわせたのです。10:99:2 一方、無法な掟と、欺きの見せかけとの原因は、無知です。この無知が、人の種族に向けて仕組まれ[2]、滅びをもたらす死の霊と、忌まわしい偶像という、悪霊の多くの姿を考え出しました。そして、自分に従う者たちに、長い死のしみを押しつけたのです。10:99:3 ですから、理にかなった水を受け取りなさい。汚れた者たちよ、身を洗いなさい。慣わしから離れ、まことのしずくで、自分に水を振りかけなさい。天に昇るには、清くなければならないのです。あなたは人です。これは、だれにも最も共通することです。あなたを造られた方を探し求めなさい。あなたは子です。これは、あなたに最も固有のことです。父を認めなさい。10:99:4 それなのに、あなたは、まだ罪にとどまり、快楽に溶け込んでいるのですか。主はだれに、『天国はあなたがたのものである』とお語りになるのでしょうか（マタイ五・三、ルカ六・二〇）。あなたがたが望むなら、それはあなたがたのものです。神へと心を定めたあなたがたのものです。ただ信じ、短い宣教に従おうと望むなら、あなたがたのものです。ニネベの人々は、この短い宣教に聞き従いました。そして、まことの悔い改めによって、予期していた陥落と引き換えに、美しい救いを得たのです。

訳注

1 写本は『キヨスの』ではなく『神のような』と読む。

2 この句は本文が崩れていて、確かには読めない。

10章100〜104節　天への狭い道と、石に変わる人々

10:100:1「では、どうすれば天に昇れるのですか」と、ある人は言います。主は『道』です（ヨハネ一四・六）。『狭い』道ですが（マタイ七・一三〜一四）、『天から』の道です（ヨハネ三・一三、三一）。狭くはあっても、天へと送り上げてくださる道です。地の上では狭く、見下されていますが、天では広く、拝まれています。10:100:2さて、ロゴスを聞いたことのない者には、迷いの言い訳として無知があります。一方、耳に入れていながら、自分の意志で、魂のうちに不従順を抱えている者がいます。この者は、賢そうに見えれば見えるほど、その悟りがかえって身の災いとなります。最善のものを選ばずに、思慮を自分の告発者にしてしまっているのですから。人は、人である以上、生まれつき神と親しいものだからです。10:100:3わたしたちは、馬に耕すことを強いませんし、牡牛に狩りを強いることもしません。むしろ、それぞれの生き物を、生まれつき向いていることへと連れて行きます。それと同じように、まさに人をも、神の知識へと招くのです。人は、天を仰ぎ見るために生まれた者、まことに天の植物です。わたしたちは、ほかの生き物と比べて、人に本来備わった、際立った、人だけのものをとらえています。そこで、永遠にわたって足りる旅の糧、つまり神を敬うことを備えるよう、忠告しているのです。10:100:4わたしたちは言います。農夫なら、畑を耕しなさい。ただし、耕しながら神を知りなさい。航海を好む人よ、海を行きなさい。ただし、天の舵取りを呼び求めながら、行きなさい。兵士として仕えているあなたを、知識がとらえたのです。

10:101:1正しいことを合図する将軍に聞きなさい。ですから、あなたがたは、眠りと酔いに重くなった人々のように、酔いからさめなさい。少し目を凝らして、考えてみなさい。あなたがたが拝んでいる石には、何の意味があるのでしょうか。あなたがたが物質のために、むなしい熱心で費やしているものには、何の意味があるのでしょうか。あなたがたは、財産も生活も無知に注ぎ込んで、使い果たしています。ちょうど、自分のいのちを死に注ぎ込むのと同じようにです。むなしい望みの行き着く先として、ただそれだけを見いだしたのです。あなたがたは、自分自身をあわれむこともできません。それどころか、あなたがたの迷いをあわれんでくれる人々に、従うことのできる者にもなりません。悪い慣わしの奴隷となっているのです。その慣わしにすがりついたまま、自分から進んで、最後の息に至るまで、滅びへと運ばれて行きます。10:101:2『光がこの世にきたのに、人々は光よりもやみの方を愛した』からです（ヨハネ三・一九）。けれども、あなたがたは、救いの妨げになるもの、つまり思い上がりと富と恐れとを、ぬぐい去ることもできるのです。そのときには、詩人のあの句を唱えればよいのです。『この多くの財宝を、わたしはどこへ運ぶのか。わたし自身も、どこをさまようのか』。10:101:3では、あなたがたは、このむなしい思い込みを投げ捨てて、慣わしそのものに別れを告げようとは望まないのですか。そして、虚栄に向かって、こう言い添えればよいのです。『偽りの夢よ、さらば。おまえたちは、結局、何ものでもなかったのだ』。

10:102:1実際、人々よ、テュコンと呼ばれるヘルメスがあります。アンドキデスのヘルメスや、アミュエトスと呼ばれるヘルメスもあります。あなたがたは、これらを何だと考えているのですか。だれの目にも明らかなように、石です。ヘルメスそのものと同じく、石なのです。かさは神ではありません。虹も神ではありません。そうではなく、どちらも、空気と雲に起こる現象です。また、一日は神ではなく、年も、それらで満たされる時も、神ではありません。それと同じように、太陽も月も神ではありません。先に挙げたものは、それぞれ、太陽と月によって区切られているのです。10:102:2では、まともな考えを持つ人なら、だれが、責めを問うことや、罰や、裁き（ディケ）や、憤り（ネメシス）を、神々と見なすでしょうか。実際、エリニュスたちも、運命（モイライ）も、定め（ヘイマルメネ）も、神ではありません。国家も、評判も、富（プルトス）も、神ではないのですから。この富は、画家たちも、盲目の姿に描いて見せています。

10:102:3 また、あなたがたが、慎み（アイドス）や愛欲（エロス）や愛の営み（アフロディテ）を、神として祭り上げるとしましょう。それなら、恥と衝動と、美しさと交わりにも、そのお供としてついて来てもらいましょう。ですから、眠りと死が、もはや、あなたがたのもとで双子の神と見なされるのも、筋が通らないでしょう。どちらも、生き物に自然に起こる状態です。死の霊（ケル）も、定め（ヘイマルメネ）も、運命（モイライ）も、正しく女神と呼ぶことはできません。10:102:4 争い（エリス）と戦いが神でないなら、アレスもエニュオも神ではありません。さらに、稲妻も雷も雨も神でないなら、どうして火と水が神でしょうか。また、空気の現象のゆえに生じた流れ星や彗星も、どうして神でしょうか。運（テュケ）を神と言う人は、行いも神と言いなさい。

10:103:1 では、これらのうちのどれ一つも、神とは考えられないとしましょう。人の手で作られた、あの感覚のない作り物も、神とは考えられないとしましょう。それでいて、わたしたちのまわりには、神の力による摂理が、たしかに現れています。それなら、残るのは、このことを認めることだけです。まことに唯一の方として存在し、実在しておられるのは、ただひとり、まことに存在しておられる神なのです。しかし実際、愚かな人々よ、あなたがたは、マンドラゴラか何かほかの薬を飲んだ人々に似ています。10:103:2 どうか神が、いつの日か、あなたがたをこの眠りからさまし、神を悟らせてくださいますように。そして、金や石や木を、また行いや情念や病や恐れを、神であるかのように思い描くことのないようにしてくださいますように。実際、『多くを養う大地の上には』、まことに『三万の』『ダイモンがいる』のです。ただし、それは『不死の』ものではなく、死すべきものでもありません（感覚にあずかっていないので、死にもあずかることがないからです）。そうではなく、石や木でできた、人間の主人たちです。10:103:3 この者たちは、慣わしを通して、人の生活を辱め、裏切っています。『地とそれに満ちている物とは、主のものである』と書いてあります（詩篇二四・一、第一コリント一〇・二六）。それなのに、あなたは、主のものの中でぜいたくをしていながら、どうして、あえて主人を知らずにいるのですか。主はあなたに言われるでしょう。「わたしの地を離れなさい。わたしが湧き上がらせる水に、触れてはならない。わたしが耕して育てる実を、取ってはならない」。人よ、養ってもらった恩を、神に返しなさい。あなたの主人を認めなさい。あなたは、神が形造ってくださった、神ご自身のものなのです。神に属するものが、どうして正しくよそのものとなることがあるでしょうか。よそのものとされたものは、神との親しさを奪われて、真理を奪われているからです。10:103:4 実際、あなたがたは、いわばニオベのように、感覚のない状態へと変わっていくのではありませんか。いや、もっと奥義めいた言い方をするなら、あのヘブル人の女のように、です（古人たちは、この女をロトと呼びました[1]）。この女は、ソドムを恋い慕ったことのゆえに石にされた、とわたしたちは伝え聞いています。ソドムの人々とは、無神論者たちのことであり、不敬虔のほうへ振り向く、心のかたくなな愚か者たちのことです。

10:104:1 これらの言葉は、神から、あなたに言い聞かされているのだと思いなさい。実際、石や木、鳥や蛇は聖なるもので、人間はそうではない、と思ってはなりません。むしろ、まったく逆です。人間こそ、まことに聖なるものだと考えなさい。獣や石は、ありのままのものと考えなさい。10:104:2 実際、人間のうちの哀れでみじめな者たちは、こう考えています。神は、からすやこくまるがらすを通しては声を上げておられるが、人間を通しては黙っておられる、と。そして、からすを神の使いとしてあがめながら、神の人は迫害します。この人は、かあかあと鳴くのでも、ぎゃあぎゃあと鳴くのでもなく、言葉を語っているのにです。ああ、この者たちは、理にかなって、人を愛して教える人を、人でなしにも屠ろうとします。義へと呼ぶ人を、です。上からの恵みを待ち望むこともせず、罰を避けることもしません。10:104:3 この者たちは、神を信じず、神の力を学び知ろうともしないからです。人を愛する心が言い尽くせないほどの方は、悪を憎む心も、計り知れないほどです。怒りは、罪に対して罰を育てます。一方、人を愛する心は、悔い改めに対して善を施します。何よりも痛ましいのは、神からの助けを奪われることです。10:104:4 さて、目が見えなくなることと、耳が聞こえなくなることは、悪い者が人から奪い取るほかのものよりも、つらいものです。目の見えない者は天を仰ぎ見ることを、耳の聞こえない者は神から学ぶことを、奪われているからです。

訳注

1 聖書でロトは夫の名。夫を指すと読み直す案がある。

10章 105〜110節　耳をふさぐ蛇と、天の法

10:105:1 ところが、あなたがたは、真理に対しては身の不自由な者です。知性では目が見えず、悟りでは耳が聞こえません。それなのに、痛みも覚えず、憤りもしません。天を見ることも、天の造り主を見ることも、望みませんでした。自分の選びを救いに結びつけて、万物の造り主であり父である方に聞き、学ぶことを、求めもしませんでした。10:105:2 神の知識へと急ぐ人には、妨げとして立ちはだかるものは何もないからです。無学も、貧しさも、不名誉も、無一物も、妨げにはなりません。また、まことに真実の知恵を、『青銅で討ち取って』手に入れようと願う者は、だれもいません。鉄によっても、そうです。実際、何にもまして、次の言葉は見事に言われています。10:105:3 『善良な人は、どこにいても救いをもたらす』[1]。実際、義を熱心に求める者は、何も必要としない方を愛する者として、わずかなもので足ります。ほかの何ものでもなく、神ご自身のうちに、幸いをたくわえたのです。そこには、虫も、強盗も、海賊もいません。おられるのは、善いものを永遠に与えてくださる方です。10:105:4 ですから、あなたがたが、まじないを唱える者たちに耳を閉ざした、あの蛇たちに似た者になったのも、もっともなことです。実際、聖書はこう言っています。『彼らには、蛇に似た怒りがある。それは、耳が聞こえず、自分の耳をふさいでいるまむしのようで、まじないを唱える者たちの声を聞こうとしない』（詩篇五八・四〜五）。

10:106:1 しかし、あなたがたは、せめて、その野性をまじないで鎮めてもらいなさい。穏やかな、わたしたちのロゴスを迎え入れなさい。人を損なう毒を吐き出しなさい。あの蛇たちが老いを脱ぎ捨てるように、あなたがたが、できるかぎり滅びを脱ぎ捨てることを許されるためです。わたしに聞きなさい。耳をふさいではなりません。聞く耳を閉ざしてはなりません。むしろ、語られることを心に留めなさい。10:106:2 不死の薬は、美しいものです。もういいかげんに、地を這うそのうねりを止めなさい。『主の敵はちりをなめる』と言われているからです（詩篇七二・九）。地から顔を上げて、大空を仰ぎなさい。天を見上げなさい。驚きなさい。義人たちのかかとをねらい、『真理の道』を妨げることを、やめなさい（第二ペテロ二・二）。10:106:3 賢く、害のない者になりなさい。たぶん主は、あなたがたに純真さの翼を与えてくださるでしょう（主は、土から生まれた人々に翼を付けようと決めておられるのです）。それは、あなたがたが穴ぐらを捨てて、天に住むようになるためです。ただ、心を尽くして悔い改めましょう。心のすべてで神を宿すことができるほどにです。10:106:4 『民のすべての集まりよ、神に望みを置け。その御前に、あなたがたのすべての心を注ぎ出せ』と言われます（詩篇六二・八）。悪を空にした人々に向かって、こう言っておられるのです。神はあわれみ、義で満たしてくださいます。人よ、人であり神である方を信じなさい。人よ、苦しみを受けられ、拝まれておられる方、生きておられる神を信じなさい。10:106:5 奴隷たちよ、死なれた方を信じなさい。すべての人々よ、すべての人の神であるただひとりの方を信じなさい。信じて、報いとして救いを受けなさい。『神を求めよ。そうすれば、あなたがたの魂は生きる』（詩篇六九・三二）。神を求める者は、自分自身の救いを熱心に探し求めているのです。

10:107:1 神を見いだしたなら、あなたはいのちを持っています。ですから、求めましょう。生きるためです。見いだしたことの報いは、神のもとでのいのちです。『あなたを求める者はみな、あなたによって喜び楽しむように。そして、つねに『神は大いなるかな』と言うように』（詩篇七〇・四）。神への美しい讃歌とは、不死の人間です。義によって建てられ、その内に真理の言葉が刻み込まれた人です。実際、節度ある魂のほかに、どこに義を書き込むべきでしょうか。愛は、どこに書き込むべきでしょうか。恥じらいは、どこにでしょうか。柔和は、どこにでしょうか。10:107:2 この神の書きつけを魂に刻みつけた者は、こう考えるべきだと思います。人生のどの分野に向かう人にとっても、知恵こそが美しい出発点である、と。そして、同じ知恵を、救いの波立たない港と見なすべきです。10:107:3 この知恵のゆえに、父なる神のもとへ走り寄った父親たちは、子供たちに

とって良い父となります。御子を知った息子たちは、親にとって良い息子となります。花婿を覚えている夫たちは、妻にとって良い夫となります。最もひどい奴隷の身から贖い出された主人たちは、しもべたちにとって良い主人となります。

10:108:1 ああ、人間の迷いよりも、獣のほうが幸いです。獣は、あなたがたと同じように、無知の中で草をはんでいます。けれども、真理を装うことはしません。獣のもとには、へつらう者の種族はいません。魚は迷信にとらわれず、鳥は偶像を拝みません。ただ一つ、天に驚き打たれるだけです。理性にあずかることを許されていない獣は、神を思い描くことができないのですから。10:108:2 それでいて、あなたがたは、理性のないものよりも、自分自身を理性のない者にしてしまって、恥ずかしくないのですか。あなたがたは、これほど多くの年齢を重ねるあいだ、無神論のうちに身をすり減らしてきました。子供になり、少年になり、若者になり、大人になりました。しかし、善良な者には一度もなりませんでした。10:108:3 せめて、自分の老いを重んじなさい。人生の夕暮れに至った今、正気に返りなさい。せめて人生の終わりに、神を知りなさい。人生の終わりが、あなたがたにとって救いの始まりとなるためです。あなたがたは、迷信のうちに老いました。若い者として、神を敬うことへと来なさい。神は、悪を知らない子供たちを選び入れてくださいます。10:108:4 たしかに、アテネの人はソロンの法に、アルゴス人はフォロネウスの法に、スパルタ人はリュクルゴスの法に従うとしましょう。しかし、あなたが自分を神に属する者として名簿に書き入れるなら、あなたの祖国は天であり、立法者は神です。では、その法とは何でしょうか。10:108:5 『殺してはならない。姦淫してはならない。少年を汚してはならない。盗んではならない。偽証してはならない。あなたの神、主を愛さなければならない』（出エジプト二〇・一三〜一六、申命記六・五）。これらを満たして補うものもあります。理にかなった法、聖なる言葉で、心そのものに書き込まれています。『あなた自身のようにあなたの隣人を愛さなければならない』（レビ一九・一八）。また、『あなたの頬を打つ者にはほかの頬をも向けてやりなさい』（ルカ六・二九）。また、『むさぼってはならない。欲望だけで、もう姦淫したことになるからである』（出エジプト二〇・一七、マタイ五・二八）。

10:109:1 そもそも、欲望を遂げるより、してはならないことをはじめから欲しようとさえしないほうが、人にとってどれほど良いでしょうか。しかし、あなたがたは、救いの厳しさに耐え抜くことができません。食べ物では、わたしたちは甘いものを楽しみ、その快さのなめらかさのゆえに、それを好みます。けれども、わたしたちを癒し、健やかにするのは、感覚に粗く当たる苦いものです。むしろ、弱い胃を強くするのは、薬の厳しさです。それと同じように、慣わしは心地よく、くすぐってくれます。しかし、一方は奈落へと突き落とします。慣わしです。他方は天へと導き上げます。真理です。真理は、初めのうちこそ『粗い』ものです。『けれども、よく若者を育てる』のです。10:109:2 真理の住む、この女たちの部屋は尊く、長老たちの集まりは節度があります。真理は、近づきにくいものでも、手に入れられないものでもありません。そうではなく、わたしたちのすぐ近く、わたしたちのうちに住んでいます。このうえなく賢いモーセが、謎めいた言い方で語るとおりです。真理は、わたしたちの三つの部分に住んでいます。『手と口と心』にです（申命記三〇・一四）。10:109:3 これは、真理が、思いと行いと言葉の三つすべてによって満たされることを示す、まことのしるしです。実際、多くの楽しげな幻があなたから知恵を奪うのではないかと、このことを恐れてはなりません。あなたは、自分から進んで、慣わしのたわごとを越えて行くでしょう。子供たちも、大人になると、おもちゃを投げ捨てるのと同じです。

10:110:1 実に、神の力は、追い越すことのできない速さと、近づきやすい好意をもって地を照らし、宇宙を救いの種で満たしました。実際、主は、これほど短い時のうちに、これほど大きな働きを成し遂げておられます。神の助けがなければ、それはおできにならなかったでしょう。主は、見た目には侮られながら、実のところは拝まれておられます。清め、救い、和らげてくださる方、神のロゴス、まことに最も明らかに現れた神です。このかたは、万物の主人と等しい者とされました。10:110:2 神の子であり、『ロゴスは神のうちにあった』のですから（ヨハネ一・一）。このかたは、初めに前もって宣べ伝えられたときにも、信じられなかったわけではありません。人間の仮面を着け、肉によって身を形づくり、人類の救いの劇を演じておられたときにも、知られなかったわけではありません。10:110:3 実際、このかたは、まことの競い手であり、神が形造ったものとと

もに競った相棒でした。このかたは、またたく間にすべての人々に行き渡ってくださいました。父の意志そのものから、太陽よりも速く昇り、いとも容易に、わたしたちのために神を照らし出してくださいました。ご自分がどこから来られ、何者であるのかを、明らかにしてくださったのです。お教えになったことと、お示しになったことによってです。このかたは、和平の誓いを運ぶ使者、和解させてくださる方、わたしたちの救い主であるロゴスです。いのちを与える、平和の泉で、地の全面に注がれています。このかたのゆえに、言ってみれば、すべてのものが、すでに善いものの海となったのです。

訳注

1 写本は『善良な人は』を『キリストは』と読む。

11章　ロゴスの光と、救いへの勧め

II:111:1 さて、よければ、少しさかのぼって、神の恵みのわざを見つめなさい。最初の人は、楽園で、縛られることなく遊んでいました。神の子供だったからです。ところが、その子は快楽に陥りました（蛇とは、腹で這う快楽、地上の悪、物質へ向かうもののたとえです）。欲望に惑わされていったとき、子は不従順によって大人ぶり、父に聞き従わずに、神の前で恥じ入りました。快楽は、これほどの力をふるったのです。純真さのゆえに縛られていなかった人が、罪に縛られた者となっていたのです。II:111:2 主は、この人を再びその縄目から解こうとお望みになりました。そして、肉に縛られて（これは神の奥義です）、蛇を打ち負かし、暴君である死を奴隷となさいました。そして、何より思いがけないことをなさいました。快楽に惑わされ、滅びに縛られていたあの人を、広げた両手によって、解かれた者としてお示しになったのです。II:111:3 ああ、なんという奥義の不思議でしょう。主は身を横たえておられ、人は立ち上がりました。楽園から落ちた者が、従順の賞として、さらに大きなもの、すなわち天を受け取るのです。

II:112:1 ですから、ロゴスご自身が、天からわたしたちのところに来てくださった以上、わたしにはこう思えます。わたしたちは、もはや人間の教えのもとへ行く必要はありません。アテネやほかのギリシヤ、さらにはイオニアにまで、あれこれと詮索して出かけることはないのです。わたしたちの教師が、聖なる力で万物をお満たしになった方なら、その教師が、今、すべてを教えておられるからです。その力とは、造ること、救うこと、恵むこと、法を定めること、預言すること、教えることです。宇宙全体が、ロゴスによって、すでにアテネとなり、ギリシヤとなったのです。II:112:2 実際、あなたがたは、詩人の語る神話を信じてきました。まさか、神の弟子となったわたしたちは信じない、というのではないでしょう。その神話は、クレテの人ミノスを、ゼウスの語らいの友と書き記しています。わたしたちは、まことに真実の知恵を身に受けた者です。哲学の頂に立つ人々は、その知恵を、ほのめかしただけでした。しかし、キリストの弟子たちは、それをとらえもし、宣べ伝えもしたのです。II:112:3 そればかりか、言ってみれば、すべての人が[1]。キリストは、分かたれることがありません。異民族もユダヤ人もギリシヤ人もなく、男も女もありません（ガラテヤ三・二八、コロサイ三・一一）。ただ、神の聖霊によって形造り直された、新しい人があるのです。

II:113:1 さて、ほかの忠告や勧告は、取るに足りないもので、個々の事柄にかかわるものです。結婚すべきか、国の政に携わるべきか、子をもうけるべきか、といったことです。けれども、実に、すべてにわたる勧めは、ただ一つ、神を敬うことです。それは明らかに、生涯の全体にかかわります。どんな時にも、どんな境遇にあっても、最も大切な目的であるいのちへと向かわせるのです。わたしたちは、ただこれに従って生きなければなりません。いつまでも生きるためです。一方、哲学は、長老たちの言うように、長い時をかける忠告です。知恵への永遠の愛を得ようと、言い寄るものです。II:113:2 しかし、『主の戒めは遠くまで輝いて、眼を明らかにする』（詩篇一九・八）。キリストを受け取りなさい。見ることを受け取りなさい。あなたの光を受け取りなさい。『神と人とを、よく見分けられるように』。わたしたちを照らしてくださったロゴスは、『金と宝石よりも甘く、蜜と蜂の巣よりも慕わしい』のです（詩篇一九・一〇）。実際、どうして慕わしくないことがあるでしょうか。このかたは、闇の中に埋もれていた知性を、はっきり見えるものにしてくださいました。魂の『光をもたらす目』を、研ぎ澄ましてくださったのです。II:113:3 実際、『太陽がなければ、ほかの星々があっても、すべては夜であっただろう』と言われます。それと同じように、ロゴスを知らず、ロゴスに照らされなかったなら、わたしたちは肥やされる鳥と変わらなかったでしょう。闇の中で太らされ、死に向けて養われていたでしょう。II:113:4 光を宿しましょう。神を宿すためです。光を宿し、主の弟子となりましょう。まさにこのことを、主は父に約束しておられます。『わたしはあなたのみ名を兄弟たちに告げ、会衆の中であなたをほめたたえるでしょう』（詩篇二二・二二）。主

よ、ほめたたえてください。あなたの父である神を、わたしに告げてください。あなたの告げる言葉が、わたしを救うでしょう。その歌が、わたしを教え導くでしょう。わたしはこれまで、神を探し求めて、どれほどさまよってきたことでしょう。11:113:5 けれども、主よ、今はあなたが、わたしを光へと導いてくださいます。そこで、わたしはあなたによって神を見いだし、あなたのもとから父を受け取ります。こうして、あなたとともに受け継ぐ者となるのです。あなたは、兄弟を恥とされなかったのですから（ヘブル二・一一）。

11:114:1 ですから、取り除きましょう。真理を忘れていることを、取り除きましょう。無知と、妨げとなる闇を、目にかかった霧のように払い落として、まことにおられる神を、目のあたりに見ましょう。まず、このかたに向かって、この言葉をほめ歌ってからです。『光よ、ようこそ』。闇の中に埋もれ、死の陰に閉じこめられていたわたしたちに、天から光が輝き出ました（ルカ一・七九）。その光は、太陽よりも清く、この世のいのちよりも甘いものです。11:114:2 その光は、永遠のいのちです。それにあずかったものは、みな生きます。夜は光を恐れ、恐怖のゆえに沈んで、主の日に場所を譲ります。すべてのものが、眠ることのない光となりました。日の入りは、日の出へと変わったのです。11:114:3 新しい創造が目ざしたのは、このことです。万物の上を駆けめぐる『義の太陽』が（マラキ四・二）、人類を分け隔てなく巡っておられるからです。それは、父にならってのことです。父は、『すべての人の上に、その太陽をのぼらせ』（マタイ五・四五）、真理の露を降り注いでくださる方です。11:114:4 このかたは、日の入りを日の出へと移し、死を十字架にかけて、いのちへと変えてくださいました。人を破滅から奪い取って、天空に掛けてくださいました。滅びを朽ちないことへと植え替え、地を天へと変えてくださるのです。このかたは、神の農夫です。『吉兆を示し』、『民を』善い『仕事へと起こし』、まことの『生活を思い起こさせ』てくださいます。父の、まことに大いなる、神聖な、奪われることのない受け継ぐ分を、わたしたちに恵んでくださいます。天の教えによって人を神のようにし、『法を彼らの思いの中に入れ、心にそれを書きつけて』くださいます（エレミヤ三一・三三、ヘブル八・一〇）。11:114:5 では、どのような法をお書きになるのでしょうか。『すべての人が、小より大に至るまで、神を知るようになる。わたしは彼らをあわれみ、彼らの罪を決して思い出さない』と、神は言われます（エレミヤ三一・三四）。

11:115:1 いのちの法を受け入れましょう。勧めてくださる神に従いましょう。このかたを学び知りましょう。このかたが、あわれみ深くあってくださるためです。何も必要としておられない方にも、感謝の報酬として、従順をお返ししましょう。この地に住まわせていただいていることへの、神への家賃のようなものとしてです。『青銅と引き換えに金を、九頭の牛の値と引き換えに百頭の牛の値のものを』。わずかな信仰と引き換えに、神はあなたに、これほど広い地を与えて耕させてくださいます。水を飲ませ、ほかの水では航海させ、空気を吸わせ、火を役立たせ、世界に住まわせてくださいます。ここから天へ、移り住む民を送り出すことも、あなたに許してくださいました。これほど大きく、これほど多くの、造られたものと賜物を、わずかな信仰を賃料として、あなたに貸し与えてくださったのです。11:115:2 さて、まじない師を信じた人々は、お守りやまじないを、さも救いをもたらすもののように受け入れています。それなのに、あなたがたは、天のロゴスご自身、救い主であるロゴスを、身に着けようとしないのですか。神のまじないを信じて、魂の病である情念から解き放たれ、罪から引き離されようとしないのですか。11:115:3 罪は、永遠の死だからです。まことに、あなたがたは、もぐらのように、まったく歯もなく目も見えません。闇の中で、食べることのほかは何もせずに暮らしています。滅びに包まれて、朽ち崩れていくのです。しかし、真理はあります。たしかにあります。『闇の中から光が照るであろう』と叫ぶ真理です（第二コリント四・六）。11:115:4 ですから、人の隠れたところ、すなわち心の中で、光に照ってもらいましょう。知識の光線に昇ってもらいましょう。その光線が、内に隠れている人を照らし出し、輝かせるのです。光の弟子であり、キリストに親しい者であり、ともに受け継ぐ者である人です。とりわけ、善い父の、最も尊く、最も敬うべき名が、敬虔で善い子に知られるようになるときにです。その父は、穏やかなことを命じ、救いとなることを子に言いつけてくださいます。11:115:5 その父に聞き従う人は、あらゆる点で得をします。神について行き、父に従います。さまよっていたのに、父を知りました。神を愛

し、隣人を愛しました。戒めを満たしました。賞を求め、約束が果たされることを求めます。

11:116:1 神は、人間の群れを救うことを、いつも心に定めておられます。それで、善い神は、善い羊飼いをお遣わしになりました。ロゴスは、真理を広げて、救いの高さを人々に示してくださいました。人々が、悔い改めて救われるか、聞き従わずに裁かれるかのためです。これが、義の宣教です。聞き従う人々には福音であり、聞き従わない人々には裁きです。11:116:2『とどろき渡る』ラッパは、鳴り響いて兵士たちを集め、戦いを告げました。それなら、キリストが平和の調べを地の果てまで吹き鳴らして、ご自分の平和の兵士たちをお集めにならないことがあるでしょうか。人よ、それどころか、お集めになったのです。ご自分の血と言葉とによって、血を流さない軍勢を集め、天国を彼らに委ねてくださったのです。11:116:3 キリストのラッパとは、その福音です。このかたが吹き鳴らしてくださり、わたしたちが聞きました。平和のうちに武装しましょう。『正義の胸当を胸につけ』、信仰の盾を手に取り、救いのかぶとをかぶりましょう（エペソ六・一四～一七）。『御霊の剣、すなわち、神の言』を研ぎましょう（エペソ六・一七）。このように、使徒は、わたしたちを平和のうちに戦列に並ばせています。11:116:4 これが、わたしたちの、傷つくことのない武具です。これで武装して、悪しき者に向かって戦列を組みましょう。悪しき者の赤く焼けた矢を、ロゴスが焼き入れをしてくださった水の刃で消しましょう（エペソ六・一六）。神の恵みに、感謝の賛美をもってお応えし、神のロゴスによって神をあがめましょう。実際、こう言われています。『あなたがまだ語っているうちに、『見よ、わたしはここにおる』と言われる』（イザヤ五八・九）。

11:117:1 ああ、この聖なる、幸いな力。この力によって、神は人々と同じ国の民となっておられるのです。ですから、存在するもののうちで最もすぐれた実体にならい、同時に仕える者となることは、より望ましく、よりすぐれたことです。実際、人は、清く仕えるその行いによってでなければ、神にならうことはできません。また、ならうことによってでなければ、仕えることも、敬うこともできません。11:117:2 まことに天の、まことに神聖な愛は、このようにして人々のうちに生まれます。魂そのものの中で、まことに美しいものが、神のロゴスによって再び燃え立たされ、輝き出ることができるようになるときです。そして何よりも、心から望むのと同時に、救われることが伴うのです。言ってみれば、選びといのちが、くびきを共にしているのです。11:117:3 ですから、ただこの真理の勧めだけが、友のうちで最も忠実な者にたとえられるのです。この勧めは、最後の息まで寄り添い、天へ旅立つ人々の、全き、完全な魂の霊にとって、善い見送り手となります。では、わたしはあなたに、何を勧めるのでしょうか。あなたが救われるようにと、わたしは急いでいるのです。キリストが望んでおられるのは、このことです。11:117:4 ただ一つの言葉（ロゴス）によって、キリストはあなたにいのちを恵んでくださいます。では、このロゴスとはだれでしょうか。手短に学びなさい。真理のロゴス、朽ちないことのロゴスです。人を新たに生まれさせ、真理へと引き上げてくださる方、救いへと駆り立てる突き棒です。滅びを追い出し、死を追い払ってくださる方です。人々のうちに神殿を建て、人々のうちに神を住まわせてくださった方です。11:117:5 神殿を清めなさい。快楽と怠惰を、一日でしおれる花のように、風と火にまかせて捨てなさい。慎みの実を、思慮深く育てなさい。そして、自分自身を初物の奉納として、神の前に立てなさい。あなたが神の作品であるだけでなく、神の恵みともなるためです。キリストに親しい者には、その両方がふさわしいのです。御国にふさわしい者と見えることと、御国にふさわしいとされることです。

訳注

1 ここで本文の一部が失われているとみられる。

12章　セイレンの歌を逃れ、ロゴスの秘儀へ

12:118:1 ですから、慣わしから逃れましょう。険しい岬から、カリュブディスのおどしから、神話のセイレンたちから逃れるように、逃れましょう。慣わしは人を絞め殺し、真理から引き離し、いのちから連れ去ります。慣わしは罠です。深い淵です。穴です。むさぼる悪です。『あの煙と大波の外へ、船を遠ざけよ』。12:118:2 船の仲間たちよ、逃れましょう。この大波から逃れましょう。それは火を吐き出します。骨と死体の積み重なった、悪しき島があります。その島で、若く美しい遊女が歌っています。快楽です。俗受けする音楽を楽しんでいるのです。『さあ、こちらへ来よ、ほめたたえられるオデュッセウスよ、アカイア人の大いなる誉れよ。船を止めよ、より神々しい声を聞くために』。12:118:3 船乗りよ、その遊女はあなたをほめ、ほめたたえられる者と呼びます。ギリシャ人の誉れを、自分のものにしてしまいます。死者たちを食い荒らすのは、その女に任せておきなさい。天の霊が、あなたを助けてくださいます。快楽のそばを通り過ぎなさい。快楽は人をたぶらかします。『尻を飾り立てた女が、おまえの心を欺いてはならない。その女は甘い言葉でさえずり、おまえの穀倉をねらっている』。12:118:4 その歌のそばを、船で通り過ぎなさい。それは死をもたらします。あなたが望みさえすれば、あなたはもう破滅に打ち勝っています。木に縛りつけられて、すべての滅びから解かれるでしょう。神のロゴスが、あなたの舵を取ってくださいます。聖霊が、あなたを天の港に入らせてくださいます。そのとき、あなたは、わたしの神を見つめるでしょう。あの聖なる秘儀を受け、天に隠されているものを楽しむでしょう。わたしのために取っておかれたもの、『耳がまだ聞かず、人の心に思い浮びもしなかった』ものです（第一コリント二・九）。12:118:5 ある人が、偶像に浮かされてバッコスの狂乱にふけり、無知という生の酒に酔って、こう言いました。『まことに、わたしには、太陽が二つ見え、テーバイが二つ見えるようだ』。わたしなら、酔って乱れるこの人をあわれみ、このように正気を失った人を、正気に返らせる救いへと招くでしょう。主も、罪人の悔い改めをお喜びになり、その死をお喜びにならないのですから（エゼキエル一八・二三、三三・一一）。

12:119:1 狂った人よ、来なさい。テュルソスの杖にすがらず、きづたを頭に巻かずに来なさい。頭帯を投げ捨てなさい。子鹿の皮を投げ捨てなさい。正気に返りなさい。わたしはあなたに、ロゴスと、ロゴスの秘儀を示しましょう。あなたになじみの姿を借りて語るのです。ここに、神に愛された山があります。キタイロンのように悲劇の題材にされる山ではありません。真理の劇にささげられた山です。酒を断った山、清い林におおわれた山です。この山でバッコスの祭りを祝って踊るのは、『雷に打たれた』セメレの姉妹たち、狂女たち（マイナデス）ではありません。汚れた肉の分け合いの秘儀を受ける女たちではありません。そうではなく、神の娘たち、美しい雌の小羊たち（アムナデス）です。ロゴスの尊い祭りを告げ知らせ、慎みある合唱隊を集める者たちです。12:119:2 合唱隊は義人たちです。歌は、すべてのものの王への賛歌です。乙女たちが琴を弾いて歌い、御使いたちがほめたたえ、預言者たちが語ります。音楽の響きが送り出されます。人々は走って、祭りの一団を追いかけます。招かれた人々は、父を受け取りたいと慕い求めて、急ぎます。12:119:3 老人よ、あなたも来なさい。テーバイを去り、占いとバッコスの狂乱を投げ捨てて、真理へと手を引かれて行きなさい。見なさい、すがるための木を、あなたに与えます。テイレシアスよ、急ぎなさい。信じなさい。あなたは見るでしょう。キリストが、太陽よりも明るく照っておられます。このかたのゆえに、盲人の目が見えるようになるのです。夜はあなたから逃げ去り、火はおびえ、死は去っていきます。テーバイを見ることのできない老いた人よ、あなたは天を見るでしょう。

12:120:1 ああ、まことに聖なる秘儀よ。ああ、混じりけのない光よ。わたしは、天と神とを観るために、たいまつで導かれます。秘儀を受けて、聖なる者となります。主が秘儀の祭司長を務めてくださり、秘儀を受けた者を光へと導きなが

ら、印を押してくださいます。そして、信じた者を、とこしえに守られる者として、父に委ねてくださいます。これが、わたしの秘儀の、バッコスの祭りです。12:120:2 望むなら、あなたも秘儀を受けなさい。そうすれば、御使いたちとともに踊ることになります。生じたのではなく、滅びることのない、ただひとりのまことの神を囲んで踊るのです。神のロゴスも、わたしたちとともに賛美してくださいます。この永遠のイエスは、唯一の偉大な大祭司です。ただひとりの、同じ神であり父である方の大祭司です。このかたが、人々のために祈り、人々に呼びかけておられます。「『聞け、数知れぬ民よ』。いや、むしろ、人々のうちで理性ある者はみな、異民族もギリシヤ人も聞け。わたしは人類のすべてを招く。わたしは、父のみこころによって、人々を造った者である」。12:120:3 「わたしのもとに来なさい。ただひとりの神と、神のただひとつのロゴスのもとに、列を整えられるためである。理性のない生き物に、理性（ロゴス）でまさるだけであってはならない。むしろ、わたしは、死すべきものすべてのうちで、あなたがたにだけ、不死を実として刈り取らせる。実際、わたしは望んでいる。この恵みにも、あなたがたをあずからせたいと望んでいる。欠けのない恵みのわざを、すなわち朽ちないことを与えるのである。わたしは、あなたがたにロゴスを、神の知識を恵む。完全なわたし自身を恵むのである」。12:120:4 「わたしはこれである。神が望んでおられるのはこれである。これが響き合いであり、父の調和である。これが子であり、キリストであり、神のロゴスである。主の腕であり（イザヤ五三・一）、万物の力であり、父のみこころである。昔からかたちでありながら、そのすべてが原型に似ているわけではない者たちよ。わたしは、あなたがたを原型に合わせて正したい。あなたがたが、わたしに似た者ともなるためである」。12:120:5 「わたしは、あなたがたに信仰の香油を塗る。それによって、あなたがたは滅びを脱ぎ捨てる。また、義の姿をありのままに示す。それによって、あなたがたは神のもとへ昇っていく。『すべて重荷を負うて苦労している者は、わたしのもとにきなさい。あなたがたを休ませてあげよう。わたしは柔和で心のへりくだった者であるから、わたしのくびきを負うて、わたしに学びなさい。そうすれば、あなたがたの魂に休みが与えられるであろう。わたしのくびきは負いやすく、わたしの荷は軽いからである』（マタイ一一・二八〜三〇）」。

12:121:1 神に愛され、神に似た、ロゴスの像たちよ、急ぎましょう。走りましょう。急ぎましょう。走りましょう。このかたのくびきを負いましょう。朽ちないことに手を伸ばしましょう。人々を御する美しい御者であるキリストを、愛しましょう。このかたは、くびきを負うろばの子を、年を経たろばとともに引いて来られました（マタイ二一・五）。そして、人々という二頭立てをくびきにつなぎ、戦車を不死へとまっすぐに走らせておられます。謎で示しておられたことをはっきりと成し遂げようと、神のもとへ急いでおられるのです。先にはエルサレムへお乗り入れになりましたが、今は天へ乗り入れておられます。永遠の子が勝利を得て、父にとって最も美しい光景となっておられるのです。12:121:2 ですから、美しいものを熱心に求め、神に愛される人となりましょう。善いもののうちで最も大きなもの、すなわち神といのちを、手に入れましょう。ロゴスが助け手です。このかたに信頼しましょう。銀や金への慕い、評判への慕いが、真理のロゴスご自身への慕いほどに、わたしたちに襲いかかってはなりません。12:121:3 実際、わたしたちが、最も値打ちのあるものを最も軽んじ、別のものをより重んじて選ぶなら、神ご自身もお喜びになりません。その別のものとは、無知と無学と怠惰と偶像礼拝の、あからさまな辱めであり、極みの不敬虔です。

12:122:1 実際、哲学者の子らは、愚かな者たちの行うことはすべて、汚れた行い、不敬虔な行いだと考えています。それも、いわれのないことではありません。そして、無知そのものを狂気の一種と描いて、多くの人々は狂っているにほかならない、と認めているのです。12:122:2 では、正気でいることと狂っていることの、どちらがよいかと迷うことは、道理が許しません。そうではなく、真理にしっかりとすがり、正気を保って、力を尽くして神について行かなければなりません。そして、すべてのものは、神のものだと考えなければなりません。実際にそうなのです。さらに、わたしたち自身も、神の所有物のうちで最も美しいものだと学んだ者として、自分自身を神に委ねなければなりません。主なる神を愛し（マタイ二二・三七）、それを生涯の仕事と心得るのです。12:122:3 『友のものは共有のもの』です。そして、人は神に愛される者です（ロゴスが仲立ちをしてくださって、人は神の友だからです）。そうだとすれば、すべてのものは人のものとなります。すべてのものは、神のものなのですから。すべてのものは、二人の

友、すなわち神と人との共有のものなのです。12:122:4 ですから、今こそ、わたしたちは言うときです。神を敬う人だけが、富んだ者であり、慎みある者であり、高貴な者であると。そして、そのようにして、神に似た、神のかたちであると。また、こう言い、こう信じるときです。その人は、キリスト・イエスによって『思慮を伴って、正しく、敬虔な者』となったのだと。もうそれほどまでに、神にも似た者となっているのだと。

12:123:1 現に、預言者は、この恵みを隠さずに、こう言っています。『わたしは言う、『あなたがたは神だ、あなたがたは皆いと高き者の子だ』』（詩篇八二・六）。神は、わたしたちを、ほかならぬわたしたちを、子として迎えてくださったからです。そして、わたしたちだけの父と呼ばれることを望んでおられます。聞き従わない者たちの父とではありません。実際、キリストに従う者であるわたしたちのことは、おおよそ次のとおりです。思いのとおりに、言葉もあります。言葉のとおりに、行いもあります。わざのとおりに、生き方があります。キリストを知った人々の生き方は、全体が善良なものです。12:123:2 言葉は、もう十分だと思います。たしかに、わたしは、人を愛する心から、神から受けたものを何であれ注ぎ出して、ずいぶん長く語ってきました。善いもののうちで最も大きなもの、すなわち救いへと招く者として、語ったのです。実際、どこにも、どのようにも終わりのないいのちがあります。そのいのちについて語るときは、言葉もまた、秘儀を説き明かすことを決して終えようとはしません。しかし、あなたがたには、なお、この締めくくりが残されています。益となるほうを選ぶことです。裁きか、恵みかです。わたしとしては、二つのうちどちらがよいかを、迷うことさえふさわしいとは思いません。いのちを破滅と比べることも、許されないのです。

ギリシア人への勧め

2026年11月23日版
著者　アレクサンドリアのクレメンス
制作　藤遥
発行　christian-classics-jp
公開　https://christian-classics-jp.github.io/site/clement-protrepticus/
原稿　https://github.com/christian-classics-jp/site/tree/master/books/clement-protrepticus
全文を、ギリシア語原文（Προτρεπτικὸς πρὸς Ἕλληνας）からAIを使って翻訳しました。
訳文はCC BY-SA 4.0で公開しています。引用した聖書の本文は含みません。